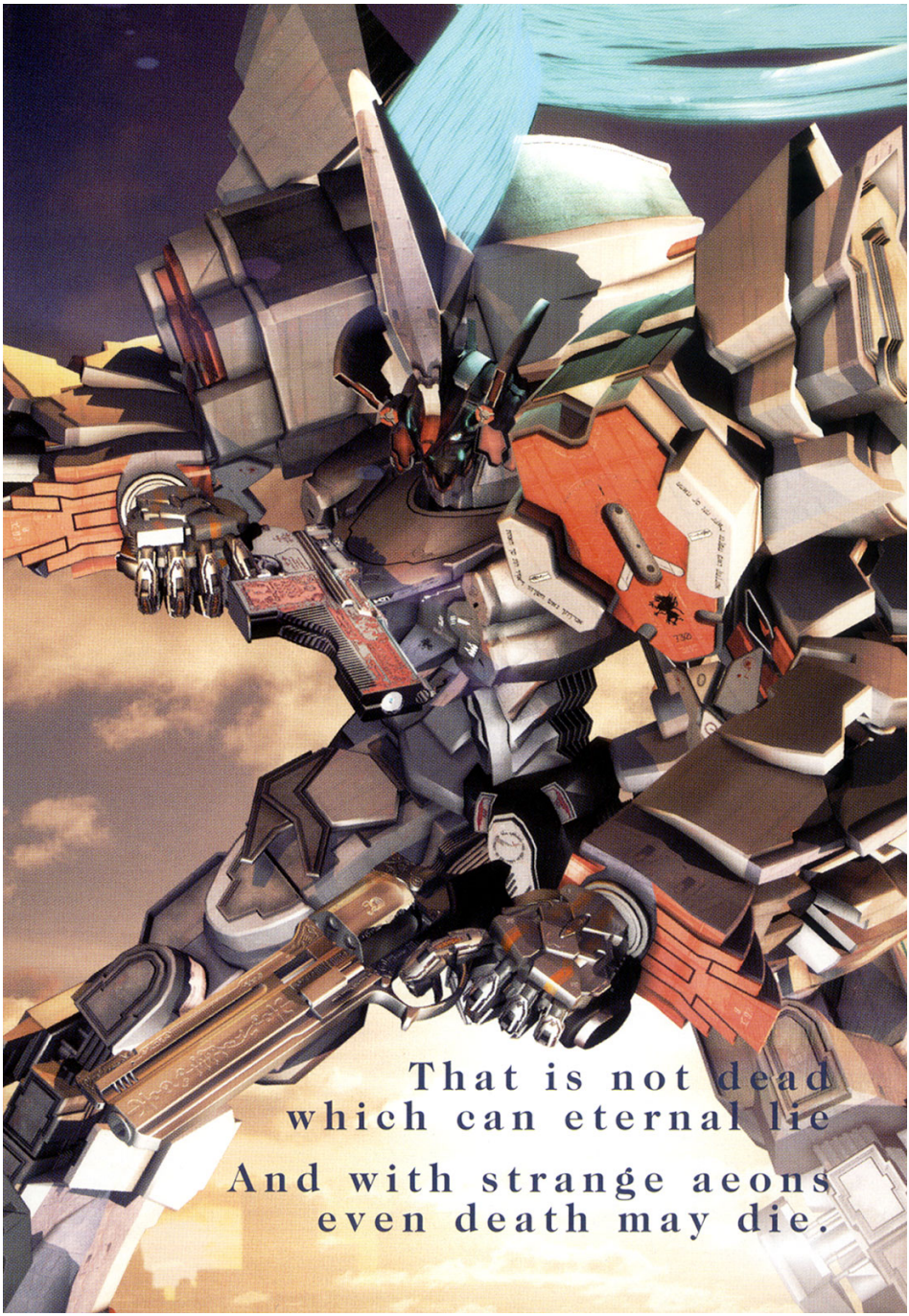
新魔大聖
デウス・マキナ・デモンベイン
DEUS MACHINA DEMONBANE
魔を断つ剣
原作：鋼屋ジン（ニトロプラス）
著：涼風涼（アジターオ）
角川スニーカー文庫

ヒラニプラ・システム発動。
言霊を暗号化。
ナアカル・コードを構成せよ!!


That is not dead
which can eternal lie
And with strange aeons
even death may die.

斬魔大聖デモンベイン

魔を断つ剣

原作：鋼屋ジン（Nitroplus）

著：涼風涼（DIGITURBO）

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

DEUS MACHINA DEMONBANE

CONTENTS

プロローグ　闇黒の絶対者――理不尽にして神聖不可侵――009

第一章　背徳者の聖域――013

第二章　正義爆臨――憎悪の空より来たる――059

第三章　断罪者――白き天使の羽根が舞う――111

第四章　勝利の凱歌を高らかに――161

第五章　鋼鉄の猛威――灼熱する水銀の血――235

第六章　君の温もりを感じて――291

エピローグ　神の摂理に挑む者達――魔を断つ剣は未だ折れず――315

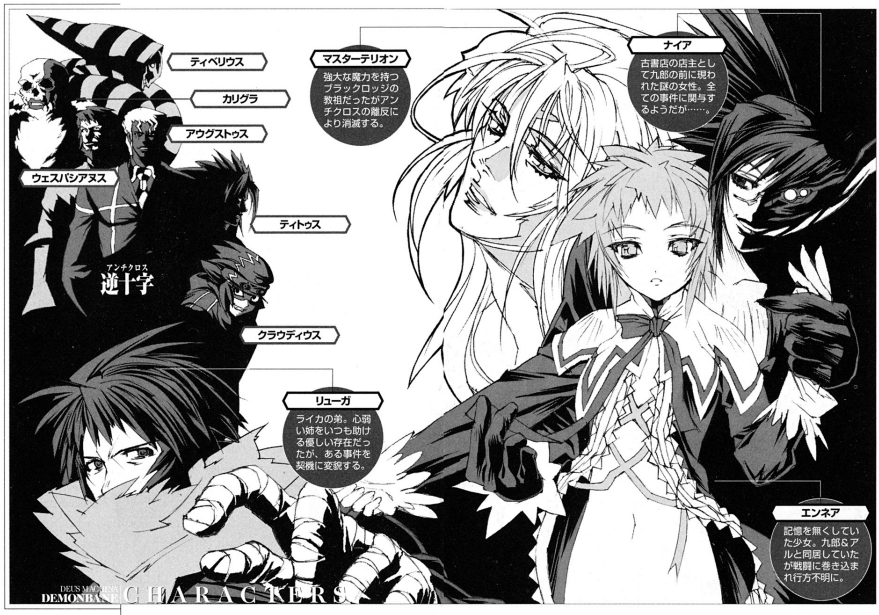
あとがき――330

解説――鋼屋ジン――332

CONTENTS

プロローグ　暗あん黒こくの絶対者―理不尽にして神聖不可侵
第一章　背はい徳とく者しやの聖域
第二章　正義爆臨―憎ぞう悪おの空より来たる
第三章　断罪者―白き天使の羽根が舞う
第四章　勝利の凱がい歌かを高らかに
第五章　鋼鉄の猛威―灼しやく熱ねつする水銀の血
第六章　君の温もりを感じて
エピローグ　神の摂理に挑む者達―魔を断つ剣は未いまだ折れず
あとがき
解説―鋼屋ジン

ライカ
街の片隅の教会で孤児院を営むシスター。九郎のよき理解者でもあるが……。
霸道瑠璃
アーカムシティに君臨する霸道財閥の主。祖父の遺志を継ぎデモンベインを完成させる。
アル・アジフ
少女の外見をしているが1000年の時を生きる魔導書。アンチクロスの襲撃により消滅。
ドクター・ウエスト
ブラックロッジのマッドサイエンティスト。九郎の行く手を阻む存在だったが……。
ウィンフィールド
霸道家に仕える忠実な執事で主の瑠璃を影から支える影のある男。ボクシングの達人。
エルザ
ウエストが開発したアンドロイド。術式魔砲「我、埋葬にあたわず」とトンファーが武器。
大十字九郎
三流探偵だったが、アルと出会い魔術師になる。鬼械神デモンベインを駆り魔を断つ。
DEUS MACHINA DEMONBANE CHARACTERS


ティベリウス
カリグラ
アウグストゥス
ウェスパシアヌス
ティトゥス
クラウディウス
逆十字
アンチクロス
マスターテリオン
強大な魔力を持つブラッククロッジの教祖だったがアンチクロスの離反により消滅する。
ナイア
古書店の店主として九郎の前に現われた謎の女性。全ての事件に関与するようだが……。
リューガ
ライカの弟。心弱い姉をいつも助ける優しい存在だったが、ある事件を契機に変貌する。
エンネア
記憶を無くしていた少女。九郎&アルと同居していたが戦闘に巻き込まれ行方不明に。
DEUS MACHINA
DEMONBANE
CHARACTERS

プロローグ

闇黒の絶対者――理不尽にして神聖不可侵

その瞬しゆん間かん、世界は白い闇やみに包まれた。

すべてを破は壊かいしつくす凶きよう暴ぼうな光は、繁はん栄えいを極きわめ、世界経済の中心とまで言わしめたアーカムシティを死の都へと一変させていく。

もはや復興など望めず、焦しよう土どと化した大地は生きとし生けるものすべてを否定し、拒こばむかのような凄せい惨さんさがあった。

実際、そこは瘴しよう気きの嵐あらしが吹ふき荒あれており、常人ならば物の数分も経たたぬうちに正気を失い、暗黒の世界へと引きずりこまれてしまうだろう。あまりにも邪じや悪あくで凶悪な怨おん念ねんが、悲鳴にも似た音を立てながら逆巻いていた。

そんな温かさを微み塵じんも感じさせない光の中に、神を模した鋼鉄の巨きよ人じんが囚とらわれている。

それは満まん身しん創そう痍いだった。

潰つぶされた四し肢し、剔えぐり取られた貌かお、軀からだには無数の傷を負い、あらゆるところから火花が散っている。かつての神こう々ごうしさは片へん鱗りんすら残さず消失し、惨むごたらしい姿を晒さらしていた。

巨人の名はデモンベイン。魔まを断たつ者と冠かんされた鬼デウ械ス・神マキナである。

だがそれは邪悪を前に、今まさに滅ほろぼされようとしていた。戦うことはおろか動くことすらかなわず、デモンベインは破壊をもたらす粗そ暴ぼうな光によってその姿を掻かき消されていく。

刹せつ那な、デモンベインを中心とした大爆ばく発はつが起きた。紅ぐ蓮れんの炎ほのおが闇を裂さき、光の粒りゆう子しとともに上空へと噴ふき上がっていく。

火山の噴ふん火かを連想させるそれが収まったとき、鋼鉄の巨人の姿は消え失うせていた。そこに巨きよ大だいすぎるクレーターだけを残して―。

デモンベインの最さい期ごを見守っていたのは、それを葬ほうむった六体の鬼械神である。それは神に等しい神気と、絶望的なまでの存在感を放ちながらそびえ立っていた。

地面に穿うがたれたクレーターを取り囲んでいた六体の鬼械神は、導き出された結果に満足したのか、一体、また一体と、その姿を闇へと溶とけこませていく。

こうして陰いん惨さんで凄惨な処しよ刑けいは幕を下ろした。

デモンベインの末路を目もく撃げきしていたのは六体の鬼械神だけではない。宙で静止し、その最期を呆ぼう然ぜんと見守る二つの影かげがあった。一つはアーカムシティの守護天使であり、清せい浄じようなる白い装そう甲こうで身を固めた白の天使・メタトロン。一方の天使は闇で塗ぬり固められたかのような黒い装甲を身にまとう黒の天使・サンダルフォンである。

その瞬間、白と黒の天使たちは互たがいの存在すら忘れていた。

だが、天使たちが動きを止めていたのは一瞬でしかない。彼らは弾はじかれるかのように距きよ離りを取ったかと思うと、瓦が礫れきの山と化したアーカムシティの上空で激げき突とつする。

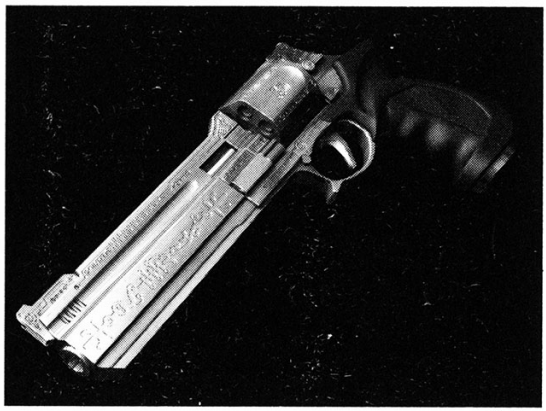
何百回、何千回、何万回と、飽あくことなく出会いと別れを繰くり返す白と黒の天使たち。

しかし、そんな愛あい憎ぞう劇げきもやがては終わりを告げる。

メタトロンの両りよう腕うでに顕けん現げんする白き剣けん。闇を浄じよう化かしながら光り輝かがやくその剣をメタトロンは一いつ閃せんさせる。神速の域に達するその一撃は、回かい避ひ行動に移っていたはずのサンダルフォンの脇わき腹ばらを切り裂いた。

サンダルフォンは体をくの字に曲げたかと思うと、鮮せん血けつをまき散らしながら錐きり揉もみ状態で墜つい落らくしていく。メタトロンはそれに一いち瞥べつすらくれず、白い軌き跡せきを残しながらアーカムシティの上空を翔かけていった。

第一章 背徳者の聖域



イタクァ

移動要よう塞さい・夢む幻げん心母。

アーカムシティ最大にして最悪の犯罪集団・ブラックロッジの本ほん拠きよ地ちの名である。

それは球体の巨大な建造物であり、ちょっとした町や村なら丸ごと収まってしまうほどだ。

だがその夢幻心母も、ブラックロッジの大グラ導ンドマ師スターマスターテリオンが提唱したＣ計画の発動によって劇的な変化を遂とげていた。神が宿り、神の肉に侵しん食しよくされた夢幻心母は、巨大な蛸たこのような姿に形を変えていたのである。

旧支配者・クトゥルー。

クトゥルフ、ク・リトル・リトル、多く頭ず龍りゆうなどとも呼ばれ、太平洋上に石造都市・ルルイエを建造し、地球に君臨していたとされる神性である。ブラックロッジは深海に沈しずんだルルイエで死の眠ねむりに就ついていた旧支配者を召しよう喚かんし、夢幻心母に宿らせていたのだ。

だがＣ計画の中心人物であったマスターテリオンは、すでにこの世に存在しない。彼に付き従う七つの頭―すなわちアンチクロスの謀む反ほんによって殺されていたのである。

（あの青あお瓢びよう箪たん、とんでもないことをしてくれたのである）

ドクター・ウェストはエレキ・ギターを担かつぎ、白衣を靡なびかせながら廊ろう下かを歩いていた。

ところどころクトゥルーの肉と融ゆう合ごうしているせいか、廊下はやけに歩きにくい。だがウェストはそれをものともせず、むしろ踏ふみつけるような勢いで歩いていく。そんなウェストの背後には彼の最高傑けつ作さくであるエルザが従っていた。

二人が向かっていた先は、夢幻心母の中心部に位置する玉座の間である。アウグストゥスをはじめとするアンチクロスたちが召しよう集しゆうをかけたからだ。もっとも彼らに呼ばれるまでもなく、ウェストはそこへと向かっていたのだが。

ほどなく二人は玉座の間へとたどり着いた。

数百人は収容できるであろう広大で荘そう厳ごんな空間には、ブラックロッジの信者が百名ほど控ひかえている。皆みな一様に不安げな表情をしており、彼らの間では様々な憶おく測そくが飛び交かっていた。細かな言げん及きゆうこそ避さけてはいるものの、C計画と一連の事件が波は紋もんを広げているのは間ま違ちがいない。

主あるじを失った玉座がやけに空くう虚きよに見える。

「うわぁ……ずいぶん人数が減ったロボ～」

エルザは目を瞬しばたたかせながら小首をかしげた。

（確かに減ってしまったであるな）

クトゥルーに食われたのだろう。信者たちの数は半数以下にまで減少していた。

（まったく、とんでもない化け物なのである……）

C計画はブラックロッジの悲願だが、クトゥルーが敵味方の区別をしているとは考えにくい。そもそも知性を有しているかどうかも怪あやしく、本能で動いているようにしか思えなかった。

玉座の間へと続く巨大な正門が音もなく開き始める。

ざわめきが止やみ、空気が張りつめて──いや凍こおりついていく。

ウェストとエルザ、そして信者たちが見守る中、息が詰つまるほどの緊きん張ちよう感かんを引き連れてアンチクロスは姿を現した。

「皆の衆、おそろいで。ご苦労、ご苦労」

　初めに入ってきたのはウェスパシアヌスである。他ほかのアンチクロスも彼に続く。

「あらあら。ずいぶんと減っちゃったみたいねん☆」

　ティベリウスは信者たちを眺ながめながらケラケラと笑っている。見た目も言動も道どう化け師しではあるが、誰だれ一人ひとりとして笑う者などいない。

「神に食われてしまったか。だが、たわいのないこと――」

　ティトゥスはつまらなそうに鼻を鳴らすと、腰こしに差した太刀たちの位置を直し、黒くろ装しよう束ぞくを翻ひるがえしながら歩いていく。

「つーかさ、てめーの身も守れねーヤツは死んじまえつーの。なあ、カリグラちゃんよー？」

　フード付きの上着に短パン姿で現れたのはクラウディウスだ。彼は軽けい薄はくそうな笑えみを浮うかべながら背後へと目を向ける。そこには派手なスーツにガウンをまとい、髑どく髏ろを模したマスクを被かぶった巨きよ軀くの男がいた。カリグラである。

　彼は義手を庇かばうかのような仕草をしたかと思うと、唐とう突とつに拳こぶしを突つき出した。それは衝しよう撃げき波はを生み出し、クラウディウスへと向かっていく。だがそれは彼にかすりもせず、代わりに十数人の信者が吹ふき飛んでいった。

「二人とも、いいかげんにしろ」

　最後に現れたのは褐かつ色しよくの肌はだを持つ痩そう身しんの男・アウグストゥスである。彼はカリグラとクラウディウスを睨にらみつけると、さらに続ける。

「ただでさえ少なくなった手て駒ごまなのだ。これ以上、おまえたちの下らない喧けん嘩かで減らすな！」

　アウグストゥスが一いつ喝かつすると、彼らは不満そうな顔をしながらもそれに従った。

（仲間を駒扱あつかいとは、ずいぶんな話であるな）

だがアウグストゥスに不信感を抱いだく者は一人もいない。少しでも不満を表せば死は免まぬかれないことを彼らは知っているのだ。

もっとも極度の緊張を強しいられている彼らである。アウグストゥスの話をまともに聞いているとも思えなかったが。

アンチクロスは玉座の前で横一列に並ぶと、信者たちへと目を向けた。

アウグストゥスが一歩、前に歩み出る。

「同どう胞ほう諸君に残念な報告がある。すでに承知のとおり、大導師・マスターテリオンは我々を謀たばかっていたのである。故ゆえに我らは反逆者である彼を断罪した！」

アウグストゥスの宣言に信者たちがざわめく。

「マスターテリオンの犠ぎ牲せいとなった同胞たちを想おもうと、私は怒いかりと悲しみで胸が張り裂さけそうになる」

アウグストゥスは大おお仰ぎような仕草で嘆なげいてみせた。白々しい台詞せりふではあったが不満の声は上がらない。

恐きよう怖ふを背景にして従わせるのはブラックロッジの十八番おはこである。アーカムシティの住人に対して行われていたことが信者へとすり替かわっただけだ。

アウグストゥスの演説は続く。

「マスターテリオンは死んだ。では、Ｃ計画は終わりなのだろうか？　我らの王国を造るという計画は、ここでついえてしまうのだろうか？」

アウグストゥスは一息つくと、ざわめき始めた信者たちを見み渡わたした。

「否。我らの悲願を無む駄だにはできない。故にアンチクロスはここに宣言する。Ｃ計画は我らが引き継つぐと！」

アウグストゥスの宣言が、再び信者たちの間に波紋を広げる。

「うまく誘ゆう導どうされてるロボね」

　エルザが感心する中、アウグストゥスの話をウェスパシアヌスが引き継ぐ。

「大グラ導ンドマ師スターはクトゥルー召しよう喚かんまでの役割を果たしてくれた。ここまでお膳ぜん立だてしてもらえれば、すでに彼の力など必要ではないのだよ。なぜなら我らは神を──クトゥルーを制せい御ぎよする術すべがあるからだ。我らの、そう、我らの力があればＣ計画を実現させることは可能なのだよ！」

　ウェスパシアヌスの話に、信者たちはにわかに活気づいてくる。

（冗じよう談だんもたいがいにするのである。あれは大導師だから成し遂とげられるのであって、すっとこどっこい連中にどうこうできる代しろ物ものではないのである）

　もともとＣ計画など興味なかったウェストだが、このような状じよう況きようでは無視もできない。だからといってアンチクロスに荷か担たんするつもりもなく、忠誠心は言わずもがな。

　ウェストを突き動かしていたのは恨うらみだった。そう。永遠のライバルと認にん定ていした大だい十じゆう字じ九く郎ろう、そしてデモンベインを断りもなく葬ほうむったアンチクロスに対し、彼は純じゆん粋すいな怒りを覚えていたのである。

「それに。それにだ。我々に楯たて突つく不届き者も、もはや存在しないのだよ。そう、そうとも。デモンベインを失った覇は道どう財ざい閥ばつに力は残されてはいないのだよ」

　徐じよ々じよに高こう揚ようしていく信者たちの感情を、ウェスパシアヌスはさらに煽あおっていく。

　恐怖という絶対的な力で縛しばりつけることはたやすかった。だがそれだけでは駒として十分に機能しない。だから飴あめを与あたえる。恐怖心でがんじがらめになった心にとって、その飴は何物にも代えがたいほど甘美であるはずだ。信者たちはそれと気づかないまま洗脳されていくのである。

　ウェストは担いでいたエレキ・ギターを手にすると、それを盛せい大だいに掻かき鳴らした。ぴんと張りつめた空気に超ちよう音おん波ぱさながらの不協和音が轟とどろく。

　アンチクロス、そして信者たちが一いつ斉せいにウェストへと目を向けた。

「待ちやがれなのであーる！」

　ウェストは胸を傲ごう然ぜんと反らせると、さらに激しくギターを掻き鳴らす。

　一通り演奏を終えた彼はギターを背に担かつぐと、アンチクロスの下もとへと向かって歩いていく。エルザもそれに続いた。

　ウェストは信者たちを蹴け散ちらしながら尊大な態度で歩いていくと、アウグストゥスの前で足を止める。

　冷れい酷こくかつ陰いん惨さんな六つの視線が一身に集まるが、ウェストの態度が改まることはない。

「うわあ、おっかねえロボ」

　エルザは目を丸くすると、素す直なおな感想を漏もらした。

　魔ま術じゆつに耐たい性せいのない人ならショック死してもおかしくはないほどの悪意に満ちた視線である。彼女の感想はもっともで、直視されたわけでもないのに何人かの信者が卒そつ倒とうしていた。

「ドクター、なんの用かな？」

「ずいぶんと好き勝手に言ってくれたであるが、いつからブラックロッジは貴様らのモノになったのであるか？」

「そのようなことを考えているわけではない。我らはブラックロッジの最高幹部である。大導師が亡なくなられた今、組織をまとめ、信者を導くのは我らの役目ではないかな？」

「なにを言うであるか！　すべては貴様らの謀ぼう略りやくではないか！　これは反逆である！」

　ウェストは一気にまくし立てる。彼の背後で控ひかえているエルザもそれに加わった。

「反逆ロボ！　裏切り者にはおしおきが必要ロボ！　博士、殺やっ

ちまうロボ！」

「そもそも貴様らごとき凡ぼん人じんに、クトゥルーなど操あやつれるわけないのである。凡人は痛い目に遭あわないうちに、とっとと尻尾しつぽを巻いて逃にげ出すのである」

　わめき散らすウェストとエルザ。そしてそれに呼応するかのように、アンチクロスとの間に不ふ穏おんな空気が漂ただよい始める。

「つまり謀む反ほん人にんたる我々には従えぬと？　あなたにそこまでの忠誠心があったとは」

　アウグストゥスは震ふるえがくるほどの冷たい声こわ音ねでつぶやいた。

「ふんっ！　忠誠心などではない。我わが輩はいは天才である。天才とは常に孤こ高こう！　何者にも媚こびぬのである！　だが、それ以前に貴様らが気に食わんのである。最高幹部だかなんだか知らないであるが、青あお瓢びよう箪たん、貴様らの好き勝手には……」

　最後まで口にする前に、ウェストの言葉は途と切ぎれた。

「もうたくさんだよ。ドクター」

　腹部が熱を帯びる。

　目を向けるとそこは真っ赤に染まっており、鋭えい利りなナイフが脇わき腹ばらに深々と食いこんでいた。

「……き、貴様……！」

　つぶやいている間にも、ウェストの白衣は見る見る赤く染まっていく。ナイフの切っ先が胃を傷つけたのか、そこに溜たまった血液が咽喉のどを伝って口から溢あふれ出てくる。

「ごふっ……」

　むせるように咳せきこむウェスト。

　その途と端たん、口内に溜まった血液が吐はき出され、アウグストゥスのスーツを汚よごした。

　ウェストは急激に意識が遠のくのを感じていた。寒気がし、体が小刻みに震える。

　だが、それも長くは続かない。全身から力が抜ぬけ落ち、神の肉と融ゆう合ごうした大理石の床ゆかに彼は沈しずんだ。

「博士？　どうしたロボ!?」

　慌あわてて寄ってきたエルザがウェストの体を引き起こす。

「ロボ!?　博士、しっかりするロボっ！」

　エルザは目を見開くと、ウェストの体を揺ゆさぶった。

（ぬかったのである……。我輩としたことが……）

　ウェストはエルザに目を向けると、逃げるように伝えようとしたのだが―思うように口が動かない。代わりに血液混じりの息が吐き出されただけだった。

「同どう胞ほう諸君に言い忘れていたことがある。大グラ導ンドマ師スターを失った我々は混乱した状態にある。少しでも早く事態を収拾するために、不穏分子は即そく座ざに処分する」

　アウグストゥスの話で、信者たちの間に緊きん張ちよう感かんが漂う。

「さて、せめてもの情けでトドメを刺さしてあげよう。ブラックロッジのために尽じん力りよくしたあなたへの、私からの手た向むけというわけだ」

　アウグストゥスの体から邪じゃや悪あくな気配が漂い始める。

　だがウェストには為なす術すべがなく、エルザにすべてを託たくすより他ほかなかった。

「させないロボ！」

　エルザはウェストの体を持ち上げ、肩かたに担いだ。彼女は懐ふところから手しゆ榴りゆう弾だんを取り出すと、それを床に叩たたきつける。

ウェストの意識は霧む散さんした。

+

小さな恒こう星せいでも誕生したかのような強きよう烈れつな光の中、エルザは爆ばく走そうしていた。

肩にウェストを担いではいたが、機動力を損そこなうほどの負担ではない。

「オラァ！　なにボケっとしてやがるっ！　さっさと追うんだよ、このボケナスどもがっ！」

背後からクラウディウスの声が聞こえてくる。

「さすが魔ま術じゆつ師しロボ。ぜんぜん効いてないロボ」

エルザは正門を蹴け破やぶって廊ろう下かに飛び出ると、脇わき目めもふらずに駆かけていく。

人造人間である彼女は疲つかれ知らずである。だがウェストの体に負担をかけるわけにもいかず、有する機能の十分の一も解放できなかった。おかげで追っ手との距きよ離りがどんどん縮まってくる。

「うざいロボ！」

エルザは立ち止まり、振ふり返ると、銃じゆう器きを片手に迫せまってくる信者たちを睨にらみつける。

「術式魔ま砲ほう『我、Ｄｉｇ　埋葬Ｍｅ　にあＮｏ　Ｇたわずｒａｖｅ』射出！」

エルザの声に反応し、前方から黒い影かげが飛来してくる。それは信者を薙なぎ倒たおしながらエルザの下もとへとやってきた。

現れたのは黒い棺ひつぎである。エルザはそれを開くと、その中から自分の体よりも大きな大たい砲ほうを手にした。

「術式魔砲『我、埋葬にあたわず』──ファイア！」

　砲ほう口こうに光が集つどい始める。それは集約し、凝ぎよう縮しゆくし、レーザーと化して信者へと襲おそいかかっていく。

　次の瞬しゆん間かん、悲鳴や怒ど号ごうが混じり合った声が聞こえてくるが、信者たちの末路を確かく認にんすることなくエルザは動き始める。

（けど、どこに逃げればいいロボ？）

次なる追っ手の気配を感じながらエルザは思案する。

夢む幻げん心母で鬼おにごっこを続けるわけにはいかない。それ

にウェストのこともある。早さつ急きゆうに治ち療りようを行わなければ、彼は確実に逝いってしまうだろう。

　エルザは振り向いて術式魔砲を撃うち、さらに廊下を走っていく。

（でもアーカムシティはぶっこわれちゃったロボ……）

　エルザは頭を抱かかえようとしたが、ウェストと術式魔砲で両りよう腕うではふさがっていた。

　そのとき、彼女の思考回路に男性の姿が表示された。

　男の名は大十字九郎。エルザの初はつ恋こいの人であり、伴はん侶りよにするつもりでいた男である。Ｃ計画が発動した際、アンチクロスの手にかかって殺されてしまったのだが──。

（そうロボ。覇道財ざい閥ばつなら博士の修理も可能ロボ）

　敵同士ではあるが、大十字九郎という接点があればなんとかなるのではとエルザは考えた。いざとなれば「婚こん約やく者しやである」とか「お腹なかに子供がいる」とか、ウェスト譲ゆずりの達者な口があることないこと並べ立てて相手を懐かい柔じゆうするはずだ。そう。愛さえあればなんとかなる──ような気がした。

「そうと決まれば、こんなとこは用なしロボ！」

　エルザはしつこく追いかけてくる信者たちへと向かって立て続けに術式魔砲を撃ち放つと、破は壊かいロボットの格納庫へと向かった。

+

　アーカムシティの地下数百メートルの位置に覇道財閥の秘密基地はあった。

　ブラックロッジとの決戦に備え、覇道財閥の初代総そう帥すい・覇道鋼こう造ぞうが極ごく秘ひ裏りに造らせたものである。そこは

アーカムシティ、そして各国の情報が集約する対ブラックロッジの前線基地であり、デモンベインのサポートも行うことができた。
もっとも肝かん心じんのデモンベインは六体の鬼デウ械ス・神マキナの猛もう攻こうによって塵ちりと化し、搭とう乗じよう者しやである大十字九郎、そして魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】もそれと運命を共にしていた。魔を断たつ剣けんは折れたのだ──。

　司令室は息苦しいほどの沈ちん黙もくで満ちていた。誰だれも口を開かず、モニターに映し出された巨きよ大だいなクレーターを呆ぼう然ぜんと見つめ続けている。皆みな、絶望感に打ちひしがれていた。

　覇道瑠る璃りは血がにじむほど唇くちびるを噛かみしめ、震ふるえるほど強く拳こぶしを握にぎりしめていた。深しん淵えんを連想させる黒い瞳ひとみは陰かげり、涙なみだをたたえているせいか潤うるんでいる。

　最後の希望であったデモンベインは敗れ、それを動かす魔術師と魔導書もこの世にはいない。もはや瑠璃に──人類に打つ手など残されてはいなかった。

　そう考えただけで意識が遠のいていく瑠璃である。

　不意に体が揺ゆらいだ。

　瑠璃の体は前のめりに倒れていくが、床ゆかに激げき突とつする直前で誰かに抱だきとめられていた。

「大だい丈じよう夫ぶですか？　お嬢じよう様さま」

　声のする方向へと目を向けると、そこには執しつ事じであるウィンフィールドの姿があった。

　彼はこの最悪な状じよう況きよう下かでも冷静さを失わず、涼すずしげな表情を崩くずしもしない。折り目の入った黒のスーツは完かん璧ぺきであり、立ち居ふるまいは優ゆう雅がで一分の隙すきもなかった。彼とてクトゥルーに驚きよう異いを感じているだろうし現状を憂うれえているに違ちがいなかったが、そんな表情はおくびにも出さない。

　瑠璃は軽く頭を左右に振ると、ウィンフィールドの助けを借りて立ち上がった。少し頭の芯しんが痺しびれていたが休んでなどいら

れない。

「大丈夫。心配かけました」

　瑠璃は強ごう引いんに笑えみを浮うかべると、ウィンフィールドにうなずいてみせた。

「でも……大十字さんは……。デモンベインは……」

　九郎に頼たよらざるを得ない状況ではあったが、彼にすべてを押しつけたことに変わりはない。助けてもらうばかりで何一つ役に立たなかった自分がのうのうと生きている。そのことに対し、瑠璃は不ふ甲斐がいなさと同時に果てない悔かい恨こんの念に苛さいなまれていた。

　瑠璃がうなだれた、そのときだった。

　司令室に常じよう駐ちゆうするオペレーターの一人が叫さけんだ。

「！　空間転移です。格納庫内に、なにかが顕けん現げんしようとしています！」

「どういうことです？」

　瑠璃の疑問にオペレーターが答える前に、司令室内に備えつけられた各種モニターが反応を示す。続いて静せい寂じやくを打ち破る甲かん高だかいアラーム音。

「状況を！」

　ウィンフィールドが指示を出すのと同時に、司令室の中央にある大型のモニターが格納庫の映像を映し出した。デモンベイン専用のカタパルトが表示される。

「全長五十メートルほどの物体が顕現しようとしています！　これは……」

　オペレーターの説明を聞くまでもない。モニターに表示された各種のステータスが、顕現しようとしているなにかを如によ実じつに物語っていた。

「デモンベイン！　デモンベインの反応がっ！」

　嬉き々きとした口調でオペレーターが叫ぶ。

「実空間にデモンベインが顕現します。衝しよう撃げき波はに備えてください」

　オペレーターが宣言するのと同時にモニターにノイズが走り始める。それは一気に激しさを増し、やがて画像は崩れて砂すな嵐あらししか映さなくなった。カメラが壊こわれたのだろう。

　そして次の瞬しゆん間かん、爆ばく音おんとともに基地内が上下左右に激しく揺れた。

　瑠璃は揺れが収まるやいなや駆かけ出していた。

+

　デモンベインの格納庫はスタジアムが丸ごと入ってしまうほどの広さがあった。

　そしてその中には広さに見合う巨大なカタパルトが腰こしを据すえている。だがそこにデモンベインの姿はない。いや、正確には存在したのだが、それと判わからぬほど形が崩れていたのである。

「ああっ……」

　瑠璃は思わず嘆なげいた。

　デモンベインはカタパルトに収まるどころか仰あお向むけに近い状態で崩れ落ちており、かつての雄お々おしい姿はどこにもない。貌かおや四し肢しが剔えぐられたりもがれたりしているせいか、ほとんど屑くず鉄てつ同然である。目を覆おおわんばかりの凄せい絶ぜつな有様だった。だがどんなに破は壊かいの限りをつくされたとしても、完全に破壊されない限りは修復可能である。

（まだだ……。まだ魔を断つ剣は折れてはいない）

絶望で彩いろどられていた瑠璃の心の中に、微かすかな希望が芽生えた。

（あとは彼らさえ無事なら……）

瑠璃はデモンベインへと向かって駆け出していた。そのあとにはウィンフィールドが続く。

「大十字さん！　いるんですか？　大十字さんっ！」

瑠璃の声が格納庫内に響ひびき渡わたる。

返事はなかったが、瑠璃はコックピットの奥で見え隠かくれしている彼の姿を確かく認にんしていた。

（よかった）

ホッと息をつく間もなく、瑠璃は九郎に声をかける。

だがそのときだ。

突とつ然ぜん、コックピットから目が眩くらむほどの光が迸ほとばしり、弾はじけた。

光は無数の光の粒りゆう子しを生み出しながら宙に散っていく。淡あわく儚はかないその粒子は、切せつなくなるほど穏おだやかで温かい。

「これは……!?」

粒子は無数の紙切れと化して舞まい下りてきたかと思うと、九郎の下もとへと集つどって一冊の大冊へと変わった。

「大十字……さん？」

状況が理解できず、おそるおそる声をかける瑠璃。

「う……ああ……あああああ……うあああああああっ！」

九郎は絶ぜつ叫きようしていた。

それは血を吐はき出さんばかりの激しい魂たましいの叫び──慟どう哭こくである。

九郎は涙なみだを流していた。人目をはばかることなく、いや、そもそも彼が瑠璃の存在に気づいてはいない。九郎は滑こつ稽けいなほど無ぶ様ざまに、ただひたすら泣き続けている。

瑠璃の魂は激しく揺ゆさぶられていた。九郎の感情が……深い悲しみと絶望が伝わってくる。

「まさか……」

瑠璃の中で最悪の事態が想定される。

泣き続ける九郎、大破したデモンベイン、舞った魔ま導どう書しよの頁ページ―。

点を線で結ぶことで一つの最悪な結論が導き出される。

ようやく灯ともった微かな希望が消えようとしていた。

そう。

アル・アジフは死んだのだ―。

+

コックピットの中は酷ひどい有様だった。

いたるところで火花が散り、爆はぜ、黒こく煙えんが上がっていた。計器類は残らず大破し、かろうじて生き残ったモニターはエラーメッセージで埋うめられている。正常に機能している箇か所しよは一つもない。

そんなコックピットの中で大十字九郎は泣き叫さけんでいた。

（どうして……なんでこんなことになっちまったんだ……）

九郎は古びた魔導書を抱だきしめながら涙を零こぼし続ける。

魔導書からは力の片へん鱗りんすら感じられなかった。その証しよう拠こに、九郎は魔術師マギウスとしてのスタイルから私服へと

戻もどっている。

【アル・アジフ】の力は失われたのだ。

　そして、それが意味することとは―。

（こんなのって……こんなことってあるかよっ！）

　怒いかりや悲しみなど、ありとあらゆる感情が胸中に去来する。激情が理性を押し流していく。あとに残ったのは絶望的なまでの後こう悔かいである。

（……いや、違ちがう。目を逸そらすな、大十字九郎！）

　九郎は歯がみし、己おのれの行動を振ふり返る。

（すべて俺のせいだろう？　落ちこんでグズグズしてたから……。戦いから逃にげていたから！）

　エンネアを助けることができず、絶望し、戦いから逃げてしまった九郎である。アルに励はげまされて立ち直ってはいたが、結果がこれでは意味がない。

（なんにも変わってないじゃねえか。逃げるな、卑ひ怯きよう者もの！　学習しないのか、この馬ば鹿か野や郎ろうは！）

　九郎は自分自身に容よう赦しやのない罵ば声せいを浴びせかける。

（俺がしっかりしてれば、アルは死なずにすんだかもしれないのに！）

　三流探たん偵ていが生き残り、世界を救う力を秘ひめたアルは死んでいた。逆だったほうが、どんなにか世界の役に立っただろう。そう思うと、やりきれなくなる。

　立ち上がろうとする九郎の目に二挺ちようの拳けん銃じゆうが飛びこんできた。黒と紅を基調にした自ク動ト式ウ拳グ銃アと銀一色の回転式イタ拳銃クアである。九郎は両手の甲こうへと目を向けるが紋もん様ようは浮うかんではいない。魔術師としての力を失ったためだろう。

九郎は二挺の魔ま銃じゆうを拾い上げ、魔導書を小こ脇わきに抱かかえた。

たったそれだけのことで、悲鳴を上げかねないほどの痛みが脳天を突つき抜ぬけていく。あらためて体を眺ながめてみると、打だ撲ぼくや裂れつ傷しようなど、様々な傷が肌はだに刻まれていた。

だが、かまってなどいられない。九郎は体を引き起こすと、コックピットから這はい出していく。

格納庫には瑠璃とウィンフィールドの姿があった。彼女たちが無事でいられたことに安あん堵どする間もなく、九郎は足場を見つけてそれに飛び移ろうとする。だが体は応こたえてはくれなかった。下半身に力が入らず、地面を蹴けり飛ばすことができない。気持ちと上半身だけは前方へと飛び出していたが、下半身が置き去りになっていた。九郎は装そう甲こうの上を転がり落ちていく。

「ぐっ……」

装甲に叩たたきつけられる度たびに、気を失いそうなほどの激痛が体を駆かけめぐる。魔銃が手からこぼれ落ちるが、魔導書だけは手放さない。

「大十字さんっ！」

「いけない！」

瑠璃が悲鳴を上げるのと同時に、ウィンフィールドは行動に移っていた。

彼は翔かけるかのごとく跳とび上がると、中空で九郎の体をキャッチする。彼の動きには無む駄だがなく、着地時の衝しよう撃げきもなかった。

「ふぅ。危ないところでした」

ウィンフィールドは九郎の体をそっと床ゆかに下ろした。

「酷い怪け我がを……。ウィンフィールド、救護班を」

だが連れん絡らくするまでもなく、覇道財ざい閥ばつの医い療りようチームが駆けてくるのが判わかった。すでにウィンフィールド

が手を打っていたのだろう。

　しかし、のんびりと治ち療りようなど受けてはいられない。九郎は床に転がった魔銃を拾い上げる。体がふらつき、視界が奇き妙みようなほど歪ゆがんでいた。とうの昔に体は限界に達しているようで、九郎は精神力だけで体を支えていた。

　そんな九郎の姿を見かねたのか、瑠璃とウィンフィールドが体を支えようとする。だが彼はそれを振り払はらった。瑠璃とウィンフィールドは互たがいの顔を見合わせ、それぞれ困こん惑わくの表情を浮かべる。

「すまねえな。あとにしてくれ……。今は、やらなきゃならねえことがある」

　脂あぶら汗あせを浮かべながら宣言した九郎の顔は青白く、誰だれが見ても危険だと判る状態である。

　だが彼の目は死んでなかった。そこには憎ぞう悪おが―アルの命を奪うばったアンチクロスへの憎にくしみが燃え盛さかっている。

「そんな体で……いったいなにを!?」

「決まってる！　ブラックロッジを……アンチクロスをぶち殺す！」

「む、無茶なことを言わないでくださいまし。今の大十字さんが出ていったところで……」

「うるさいっ！」

　思わず九郎は怒ど鳴なっていた。

　瑠璃は叱しかられた子供のように身を縮め、「なぜ？」とでも言いたげな顔をする。怒鳴られるいわれなどないのだから当然だ。

　気まずい空気が辺りに漂ただようが、感情の暴走は止まらない。

「アルは……。アルは俺を庇かばって死んだんだっ！　そんなのって、そんなのってありかよ！　許せるか!?　許せるわけねえだろ！　俺は……俺は奴やつらをぶっ潰つぶさなきゃならねえんだよっ！」

　九郎の魂たましいの叫さけびが格納庫内に響ひびく。

「じゃあ……やっぱり……」

　瑠璃は腫はれ物にでも触さわるかのような慎しん重ちようさで訊たずねてくる。

　九郎は黙だまってうなずいた。

「すまない、姫ひめさん。もうデモンベインは動かせない。ここにいるのはしがない三流探偵だ」

　叫ぶだけ叫んで落ち着き始めていた九郎は、冷静に告げていた。

「でも……でもな。それでも……こんな俺だけど、アルが救ってくれた命なんだ。だから、だから戦わないわけにはいかねえんだよ！」

　九郎は小脇に抱えた魔ま導どう書しよを抱だきしめた。

「大十字様。どうかご自愛を。アル様が救った命、粗そ末まつにしてよいはずがありません。耐たえることもまた戦いなのですよ」

　ウィンフィールドの話は理解できる。だが、感情はついてはいかなかった。胸を焦こがすほどの焦しよう燥そう感かんが九郎をがんじがらめにしている。

「それにブラックロッジは撤てつ退たいしました。今ここを出ていかれても、まったくの無駄です」

「くそっ！」

　九郎は吠ほえると、デモンベインの装甲を力任せに殴なぐった。その衝撃は骨の髄ずいにまで響くほどだが、焦燥感を打ち消すことはできない。

　観念して治療を受けようかと思い立ったときである。胸をざわめかせるような発信音が聞こえてきたのは。その発信源はウィンフィールドであり、彼はスーツの内ポケットから携けい帯たい電話にも似た通信機を取り出していた。

「どうしました？」

　ウィンフィールドが応じると、通信機から微かすかながら相手の声が聞こえてくる。

『夢む幻げん心母より破は壊かいロボットが一機、降下してきます！』

　九郎は魔ま銃じゆうのグリップを握にぎりしめると、猛もう然ぜんと駆かけ出していた。

「だ、大十字さん！」

「大十字様!?」

　背後から瑠璃とウィンフィールドの声が聞こえてくるが、九郎は振ふり返りもしない。ひたすら走っていく。

（ブラックロッジ―。絶対に許さねえ！　俺の……俺のすべてを賭として、てめえらを全否定してやる！）

+

　地上は焦しよう土どと呼ぶに相応ふさわしい有様だった。

　そこにかつての栄えい華がはない。

　天高くそびえていた摩ま天てん楼ろうは残らず地に落ち、他ほかの建物も意味をなさないガラクタとなっている。

　そこには生命など存在しないし、存在などできはしない。

　徹てつ底てい的に破壊の限りがつくされ、生きとし生けるものすべてが死に絶えてしまったかのような地じ獄ごくが地平の彼方かなたまで続いている。

　そして上空には、夜空を覆おおわんばかりの異様な物体が浮うかび上がっていた。見る者の心を凍こおらせ、壊こわし、狂くるわせかねないその姿は、地獄と化した世界を象しよう徴ちようするかのような怪かい異いである。

　傷ついた体に鞭むちを打ち、地上へと飛び出した九郎は、上空から降下してくる破壊ロボットを睨にらみつけた。それは瓦が礫れきを吹ふき飛ばし、派手な騒そう音おんと衝しよう撃げき波はを周囲にまき散らしながら着陸した。爆ばく弾だんでも投下されたかのような盛せい大だいな粉ふん塵じんが巻き上がる。

　九郎は両手に握りしめた魔銃のグリップを握り直すと、破壊ロボットの下もとへと駆けていく。

　破壊ロボットのハッチが開いた。

　九郎は即そく座ざに銃を構える。

　ハッチから出てきたのは見覚えのある少女だった。

「ダーリン!?　生きていたロボか！」

　少女は満面の笑え顔がおを浮かべると、手を振ってきた。

「エルザか!?」

　見み間ま違ちがえるはずもない。そこにいたのはドクター・ウェストに付き従っている少女だった。

　九郎は安あん堵ど し、溜ため息いきをつきかけるが、すぐに表情を強こわ張ばらせる。

（こいつだってブラックロッジの手下には違ちがいない）

　マスターテリオンやアンチクロスと違って邪じゃ悪あくだとは思えなかったが、敵は敵だ。九郎は自ク動ト式ウ拳グ銃アの銃じゆう口こうを彼女へと向けた。

「動くなっ！」

　九郎は吠えると、威い嚇かくのために上空へと向かって銃を撃うった。

　エルザは怯おびえとも悲しみとも取れる複雑な表情をするが、すぐに立ち直って真しん摯しな目を向けてきた。

「ダーリン！　敵同士なのは承知の上でお願いするロボッ！」

エルザが悲鳴にも似た叫さけびで訴うつたえかけてくる。その表情、その仕草、どれを取っても人工の生命体とは思えないほど豊かだ。

「博士を……博士を助けてほしいロボ！」

「なんだって？」

よく見ると、エルザは誰だれかを肩かたに担かついでいた。意識を失っているのか、うつむいているので顔をうかがい知ることはできない。だが気絶してもなお手放さないエレキ・ギターから、彼が何者なのか瞬しゆん時じに理解できた。

「ウェスト!?」

+

ドクター・ウェストは瀕ひん死しの重傷だった。

腹部の刺さし傷きずは深く、出血量も普ふ通つうではなかったのだが―。幸か不幸か内臓は被ひ害がいを免まぬかれており、なんとか命を取り留めていた。

ウェストは秘密基地の中にある医い療りよう施し設せつへと搬はん送そうされ、今は様々な機器に囲まれながら安らかな寝ね息いきを立てている。

九郎自身の怪け我がはというと、想像よりは酷ひどくはなかった。酷い打だ撲ぼくこそあったが骨に異常はなく、安静にさえしていれば直じきに回復するだろう。

「大十字さん。どうしてこの人を助けたのです？　彼もブラックロッジの信徒に変わりはないのですよ？」

治療室の隣となりにある控ひかえ室しつでウェストの様子をうかがっていた瑠璃は、その隣にいる九郎へと目を向けた。彼女の顔には困こん惑わくの色が浮かんでおり、気のせいか目は吊つり上がっている。助けた相手がブラックロッジの信徒であり、しかもあの

ウェストなのだから当然の反応だろう。

（さんざん破壊ロボで街を壊しやがったからなあ。恨うらまれても当然だけど）

　なぜウェストを助けたのかは九郎自身にも解わからない。ほとんど直感だった。

「こんなヤツでも見捨てたら後味悪わりぃしさ。それにこいつはとんでもない悪党だけど、アンチクロスのクソ野や郎ろうどものような悪党じゃないと思う」

　実際、破は壊かいロボットは街の一部を壊すだけで人の命を取ることはなく、その前にメタトロンに破壊されていた。

　ロボットの性能は一流だが操縦者は三流だった、ということかもしれない。

「甘いですね。甘すぎです。それが大十字さんの良いところでもあるのかもしれませんが……」

　瑠璃は小さく嘆たん息そくすると、肩をすくめる。

「それでも、少しは警けい戒かいしてくださいましね」

「了りよう解かい。気をつけるよ」

　九郎が片手を上げて了りよう承しようの合図を送った、そのときだった。

「ダーリン！　ありがとう！　ありがとうロボ！」

　突とつ然ぜん、背後からエルザに抱だきしめられた九郎は、断だん末まつ魔まの叫びにも似た悲鳴を上げた。

「い、いてぇぇっ！　抱きつくな、馬ば鹿か者ものぉ！」

「そうです！　なれなれしいですわよ！　この機械人形！」

「エルザとダーリンは愛し合っているロボ。これは愛情表現の一つロボ」

「ずいぶん偏かたよった愛だな、おい」

「愛があれば受け止められるロボ」

「おまえの愛とやらで俺を殺す気か！」

　死と紙かみ一ひと重えの大だい胆たん不ふ敵てきな愛の確かく認にんにげんなりしながらも、九郎は体からエルザを引きはがそうとする。だが愛が確認できないせいか、彼女はなかなか離はなれようとしない。

「漫まん才ざいはそれくらいにして、さっさと離れなさい！」

　瑠璃の叱しつ責せきで、エルザは渋しぶ々しぶながら九郎の体から離れた。

「まったく、緊きん張ちよう感かんもなにもあったものではありませんわね……」

　瑠璃は額ひたいに手を当てると、やれやれとばかりに溜ため息いきをついた。

「こうしている間にも、世界は刻一刻と破は滅めつへと向かっているのですよ？　もう少し自覚を持っていただきたいものですわ」

　賛同しかけた九郎だが、自分も含ふくまれていることに気がついて口をつぐんだ。

「なんにせよ、私たちは有益な情報源を得ることができました」

　瑠璃の側そばに控えていたウィンフィールドが冷静に告げた。

（執しつ事じさんの言うとおりだ）

　九郎とて善意でウェストを助けたわけではない。ブラックロッジの情報を得ることは、この絶望的な現状を打破するには不可欠である。

　九郎はエルザと向かい合った。

「エルザ、ギブ・アンド・テイクだ。ただで助けてもらおうだなんて思ってないよな？」

「解ってるロボ……。エルザのこと、好きにしていいロボ」

　そう言うと、エルザは頬ほおを赤らめながら身につけている衣服を脱ぬぎ始めた。

「脱ぐなーっ！」

「まったく破は廉れん恥ちですわね、このポンコツは！」

「ロボ～」

　渋々ながら着衣を正すエルザを横目で眺ながめながら、九郎は溜め息をついた。瑠璃の言うとおり緊張感の欠片かけらもなかったからである。

　それでもなんとか気持ちを立て直すと、エルザへと向き直った。

「ブラックロッジの状じよう況きようはどうなってる？　なんでウェストが刺されてんだ!?　いろんなことがありすぎて状況が把は握あくできねえ。エルザ、おまえが知ってることを全部話せ」

「了解ロボ」

　エルザの話は、ほぼ九郎の想像どおりだった。

　Ｃ計画。クトゥルーを魔ま術じゆつ的物質で構成された器うつわに降臨させ、意のままに操あやつる恐おそるべき計画である。ブラックロッジの大グラ導ンドマ師スターマスターテリオンを中心に進められた計画だが、土ど壇たん場ばのところで彼はアンチクロスに裏切られていたのである。もっとも彼らに忠義など存在するか疑問であり、元よりそのつもりでいたのかもしれないが……。

　現在、ブラックロッジはアンチクロスの私物と化していた。ともあれ驚きよう異いが去ったわけではなく、絶望的な状況に変わりはない。

（結局、俺たちにはどうすることもできないのか……）

　情報を入手したまではよかったが、それだけだ。それを基もとに作戦を練るにはいたらない。それにブラックロッジに対たい抗こうするための手段がなかった。

（クソッ。まごついてる場合じゃないってのに！）

　九郎は大声でわめき散らしたくなるのを懸けん命めいに堪こらえた。

+

　アーカムシティの住人は地下に設けられたシェルターへと避ひ難なんしていた。

　このような事態を想定して建造された施し設せつではあったが、住人の大半が避難しているせいか中は狭せまく、混乱していた。

　日常的にブラックロッジの脅きよう威いにさらされ続け、それでもめげることなく生活を営んできた住人たちではあるが、さすがに今回は規模が違ちがいすぎる。マスターテリオンの宣言は全員が知るところであり、上空に邪じや神しんが居座っていることも承知していた。

　パニック状態におちいっても不思議ではなかったが、暴動にいたるような混乱はない。それは破壊ロボットにも負けない不ふ屈くつの精神の賜たま物ものだったが、警官やボランティア、そして覇道財ざい閥ばつの職員が彼らを励はげまし続けていたおかげだった。生活に必要な備品や食料品が十分であったことも、必要以上の混乱を抑おさえた要因の一つである。

　九郎はシェルターの中を歩いていた。

　先に脱だつ出しゆつさせたライカと子供たちの様子が気になったからだ。

　シェルター内は怪け我が人にんで溢あふれていた。医い療りようスタッフやボランティアが走り回り、市民も駆かり出される有様だ。

　患かん者じやの呻うめき声、叫さけび、そして悲鳴――。

　親を探し求める子供の叫びも聞こえてくる。

現状を憂うれい、未来に絶望し、泣きわめく人もいた。

だが絶望せず、希望を胸に抱いだいている人も同じ数だけ存在している。

そんな人々の姿を見つめながら、九郎は歩き続けていた。

（俺も最初は、ただ巻きこまれただけだった）

口の悪い魔ま導どう書しよのペースに飲みこまれて、うやむやのうちに戦うハメになっていたのだ。

そんな九郎が戦いを決意したのは、純然たる怒いかりからだった。

マスターテリオンに出で逢あったあの瞬しゆん間かん、彼だけは──あの邪悪だけは許してはおけないと思ったからだ。

（だけど戦い続けることができたのは、きっと──）

気がつくと、九郎はライカたちが避難している区画へとたどり着いていた。

「九郎ちゃん!?　よ、よかった。無事だったんですね!?」

子供たちをあやしていたライカだが、いち早く九郎の姿に気づいて駆け寄ってくる。

さっそく九郎は慌あわてるが、彼女は意に介かいすことなく両手を広げて突とつ進しんしてきた。ライカは九郎に体をぶつけてくると「よかった」を連呼する。

「よかった。本当によかった……」

少し気き恥はずかしかったが、ライカを悲しませずにすんでよかったと九郎は思う。

ひとしきり互たがいの無事を喜んだあとだった。

「ところで、アルちゃんは？」

何気ないライカの問いに、九郎は思わず息を飲む。当然の質問ではあったが、動どう揺ようせずにはいられない。

　九郎はおそるおそるライカの様子をうかがった。

「今は……ちょっといないんだ。心配すんな。あいつがそう簡単に死ぬわけねえだろ」

　口にしてから失敗したと思ったが、後の祭りである。

「まさか、アルちゃん……」

　もはや隠かくし立てに意味はない。

　九郎は自分の迂う闊かつさを呪のろうと、意を決して話し始めた。

「あの馬ば鹿か、俺を庇かばって……。余計なマネしやがって……！」

「そんな……」

　ライカは、ほとんど泣き顔だった。九郎も思わずつられそうになるが、グッと堪える。

「九郎ちゃん、これからどうするつもり？　アルちゃんがいないなら、もう……」

　ライカの言うとおり、アルがいない以上、デモンベインを動かすことはできない。

　だが立ち止まるわけにはいかなかったし、立ち止まるつもりもなかった。

「まだ、やれることはあると思う」

「そんな……。九郎ちゃん、無茶しないで。もう十分すぎるくらい、やったんだから……。誰だれも九郎ちゃんを責めたりしないよ」

　しかし、それでは九郎が納なつ得とくできない。アルの死を弔とむらう意味でも、ブラックロッジを──アンチクロスの野望を粉こな微み塵じんにしなければならなかった。

「大だい丈じよう夫ぶだよ」

　九郎は断言する。

　それは根こん拠きよのない自信でしかなかったが、迷いはない。そしてそれは笑え顔がおとなって表れていた。自分でも驚おどろくほどの晴れやかな笑みである。

「九郎ちゃん……」

「大丈夫。あんな連中に正義の味方が負けるわけねえだろ？」

　九郎はちゃかすように言うと、一つうなずいてみせた。

　そんな彼の姿に、ライカは形容しがたい複雑な表情を返してくる。

「じゃあ俺、そろそろ行くわ」

　九郎は励はげますようにライカの肩かたを軽く叩たたくと、彼女に背を向けて歩き出した。

（……そうとも。俺が戦い続けられたのはきっと、大切だと思える人たちが側そばにいたからだ）

　その人たちが苦しむ顔を見たくはなかった。

　そしてなにより後味の悪い思いをしたくはなかったのである。

　九郎はアーカムシティが好きだった。

　生きることに貪どん欲よくで、前向きな、パワー溢あふれるその街が――愛して止やまない人たちが住むアーカムシティが好きだった。

（アル。おまえも同じなんだろう？）

　九郎はシェルター内を進みながら、今は亡なきアルへと問いかける。

（俺が――俺たちが愛した人たちだ。俺たちが愛したアーカムシティだ。だから俺は戦う。剣けんが折れたのなら、それを括くくりつけてでも戦ってやるさ）

　闘とう志しは衰おとろえてはいない。それどころか激しさを増し

ていた。

（そのためには、まず……）

　九郎の足は、それを求めて歩き続ける。

+

　アーカムシティの全域をカバーするだけあって、シェルターの規模は尋じん常じようではなかった。一通り見て回るだけでも数日はかかるだろう。

　九郎は黙もく々もくと歩いていた。

　行き先は決まっていたが、場所は解わからない。だが足は自然とそちら側へと向かっているようだ。そのことは気配で判わかる。

　とにかく奥へ奥へと進んでいくと、やがて覇道財ざい閥ばつの関係者のみが立ち入れる区画へとたどり着く。目的地はそこにあった。

「魔ま導どう研究所、か」

　覇道財閥がデモンベインを開発したのであれば、基地内に必ず魔術関係の施し設せつがある。そう踏ふんでいたのだが、案あんの定じようである。

　しかし一つだけ問題があった。九郎の行く手を阻はばむかのように巨きよ大だいな隔かく壁へきがそびえていたからである。

　九郎は少し思案するが、臆おくすることなく足を運ぶ。

　隔壁の表面には魔術文字が印しるされており、その中央部には覇道のシンボルとも言える紋もん様ようが刻まれていた。

　九郎は紋様へと掌てのひらを重ねる。

「―我はI am 神意Proviなりdence.」

言こと霊だまを紡つむぎ出した途と端たん、紋様は光を帯び、やがて溢あふれんばかりのおびただしい閃せん光こうを発した。

九郎が目を細める中、隔壁は緞どん帳ちようのようにゆっくりと上がっていく。

九郎は隔壁を抜ぬけて先へと進む。

そこには用よう途と別に分かれた部屋が用意されていた。

錬れん金きん術じゆつ研究所、魔術儀ぎ礼れい室しつ、図書館、コンピュータールーム、武器庫など、覇道鋼造の意気ごみがひしひしと伝わってくる。なにより空気が違ちがった。ここには冥くらい闇やみの臭においが満ちている。そのおぞましい気配に肌はだが粟あわ立だつが、それと同じくらい力強さも感じた。

「さすがだぜ、覇道の王様よ」

さっそく九郎は図書館へと足を運ぶ。

蔵書数は目を見張るものがあった。ちょっとした図書館ほどの広さがあるそこには、何千冊もの本ほんが整然と並んでおり、魔導書やそれに通じる書物が収められている。有名どころではゴールデン・ゴブリン・プレスより出版された【無名ネーム祭祀レス・書カルツ】、ハワード・フィリップス・ラヴクラフトの【アウトサイダー及およびその他ほかの物語】、海魔について言げん及きゆうされたガントレイの【水すい棲せい動物】、エドワード・ピックマン・ダービイが十八歳の時に出版した狂くるった詩集【アザトースその他の恐きよう怖ふ】など、目にした者を恐怖と絶望に駆かり立てずにはいられない書物が山ほど積まれていた。

（デモンベインを動かせそうな魔導書は……なさそうだな）

どれもそこそこの力はあったが、鬼デウ械ス・神マキナを動かせるレベルではない。

（当然だよな。俺に魔導書の依い頼らいをするくらいだし）

だが魔導書であるからには多少の魔力を秘ひめている。これを利用しない手はなかった。

九郎は魔導書を数冊ほど拝借して図書館を出た。

　続いて足を運んだのは錬金術研究所である。化学実験室のようなそこには、得体の知れない薬やく剤ざいや溶よう液えきなどが大量に置かれている。

　九郎は持参した【アル・アジフ】に目をとおす。

[イブン・カズイの粉薬の製法]

・二百年以上に亘わたって遺体の埋まい葬そうされた墳ふん墓ぼの塵ちりを三の量とるべし

・微み塵じん化かした不アマ凋ラン花スを二の量とるべし

・木き蔦づたの葉を砕くだいて一の量とり、細さい粒りゆうの塩を一の量とるべし

[イブン・カズイの粉薬] は霊れい的存在の物質化を促うながす霊薬である。弾だん丸がんに流用し、魔ま銃じゆうと組み合わせることで、その力は最大限に発揮されるはずである。

　薬剤が置かれている棚へと目を向けると、イブン・カズイの粉薬を作るために必要なものが一通りそろっていた。

「さすが。全部そろってやがる」

　九郎は材料をすべて手にすると、それを持って魔術儀礼室にこもり、さっそく [イブン・カズイの粉薬] の作製に着手する。

　手に入れた材料を乳にゆう鉢ばちで丁てい寧ねいに混ぜ合わせ、調合された粉薬の上でヴーアの印いんを結ぶ。最後に粉薬をコスの記号を刻みこんだ鉛なまりの小こ筒ばこへと封ふう入にゆうした。

「これでバッチリ……のはず」

【アル・アジフ】を参考にしたのだから間ま違ちがいはないが、初めてのことなので不安がよぎる。

　だがのんびりもしていられない九郎は、今度は小筒を手にして武

器庫へと向かう。

武器庫には古今東西の武器が置かれていた。

大別すると二種類である。剣けんや槍やり、鎧よろいなど、古来の武具が置かれた区画。そして重火器とその弾だん薬やくが収められた区画の二種類である。

九郎は重火器が置かれている区画へと進んでいく。

お目当ての代しろ物ものはすぐに見つかった。拳けん銃じゆうの銃弾である。九郎は弾たまを手にすると、それを弾頭と薬やつ莢きようへとバラし、火薬に [イブン・カズイの粉薬] を混ぜて元に戻もどす。弾丸が一マガジン分そろったところで、今度はそれに魔術文字を刻みこんでいく。刻む文字はそれぞれ『The minions of Cthugha』と『Wendigo the Blackwood』。

何気なく使っていた魔銃ではあるが、尋じん常じようではない力の根こん元げんはそれに秘められた名で判わかる。クトゥグアは旧支配者の名であり、フォマルハウト星に棲すまう炎ほのおの神性である。イタクァはイヌイットの伝承でウェンディゴの名で伝わる旧支配者のことだ。魔銃が驚きよう異い的な力を発現するのも当然と言えば当然である。

あとは弾丸を魔銃に装そう塡てんすれば、魔術師になれなくともそれなりの威い力りよくを発揮するだろう。

九郎は [イブン・カズイの粉薬] がなくなるまで弾丸を作り続けた。

弾丸を作り終えた九郎は、武具が置かれている区画へと足を向ける。

アンティークな武具がずらりと並んでいるが、飾かざりとして置いているわけではないだろう。九郎は片かたっ端ぱしから武器を調べ、黒い布に包まれた三日月形の刀を見つけ出した。

「バルザイの偃えん月げつ刀とう……」

それを手にして振ふるってみると、それは振るった本人にすら見えないほどの速さで空気を切り裂さいていく。

（間違いない。バルザイの偃月刀だ。しかし……）

あらためて周囲を見み渡わたした九郎は、その充じゆう実じつ度どに嘆たん息そくする。

これだけの物がそろっているのは、ミスカトニック大学を除けばここくらいだろう。

覇道財ざい閥ばつの力を考えればそれもうなずけるが、覇道鋼造がブラックロッジに抱いだいていた強い想おもいがそうさせたのかもしれない。

「けど、なんだろうな。この感じは」

九郎はつぶやくと、ここにたどり着くまでの一連の現象について思いを巡めぐらせた。

そもそも魔導研究所の存在など九郎は知らなかった。あってもおかしくはないと考えたが、見つけたのは偶ぐう然ぜんである。それだけなら確率の問題ですませられる問題だったが、魔導研究所への道を塞ふさいでいた隔かく壁へきの説明にはならない。さらには研究所内のこともある。そこには九郎を待ち受けていたかのように、欲ほつした物が見事なまでにそろえられていた。

九郎は自分がいたった答えに苦く笑しようを禁じ得なかったが、もしかしたらとも考えていた。相手は覇道鋼造である。千里眼のような力を用いて予期していても不思議ではなかった。

「だとしたら、あれもあるはずだよな」

九郎は周囲を見渡すと、棚のフックにひっかけてあった黒いマントに目を留めた。

（ここまで都合よくそろってると、なんか気味悪くなるな）

　苦笑しながらも九郎はマントをはおった。

　一応、魔術師らしくはなったが、特に魔術の力が増したわけではない。気持ちの問題だったが、今の九郎には大切なことだった。

（しかし、すごい姿だな……）

　自ク動ト式ウ拳グ銃アと回転式イタ拳銃クア、それにバルザイの偃月刀を所持し、両りよう脇わきには【アル・アジフ】を含ふくめた魔導書を抱かかえていた。

　一通り装備を調ととのえて満足した九郎は、コンピュータールームへと足を向けた。

　そこには端たん末まつが設置されており、九郎が入室するのと同時にモニターに明かりが灯ともった。

（俺を待っていた？……んなわけねえか）

　苦笑いしながらも端末の前へと歩み寄ると、椅い子すに腰こしかけて端末を操作する。と言ってもコンピューターに明るいわけではないので、眺ながめる程度だったのだが。

　モニターを見るともなしに見つめていた九郎だが、そこには様々な情報が表示されていた。それはアラート号の遭そう難なん事件に始まり、プロヴィデンス在住の青年彫ちよう刻こく家か・ウィルコックスが見た夢について詳しよう細さいな記録、石造都市・ルルイエ、そしてニューオリンズの沼しよう沢たく地で押おう収しゆうされた石像など、どれもクトゥルーに関係する出来事についての言げん及きゆうである。覇道鋼造もクトゥルーの調査を行っていたのだ。

（アーカムシティがクトゥルーの脅きよう威いにさらされることも予知していた？　だとしたら、とんでもない化け物だ）

　デモンベインについても言及されていた。当時、冒ぼう険けん家かだった覇道鋼造がアリゾナ砂さ漠ばくを旅しているときに発見したのがデモンベインの基もととなる機体だったのである。覇道財閥は一からデモンベインを造ったわけではなかったのだ。だとしたら、それを造ったのは誰だれなのかという疑問が出てくるのだが、

そこまでは記き載さいされていない。搭とう乗じよう者しやも不明である。

（しかし……。なにからなにまで都合よく進んでるよな）

　覇道鋼造がデモンベインの基となる機体を見つけていなければ、抵てい抗こうすることなくアーカムシティは陥かん落らくしていただろう。タイミングを見み計はからったかのような印象すら受けるほどだった。

「さてと」

　九郎は掛かけ声とともに立ち上がると、踵きびすを返す。

「さあ、行こうか──」

第二章

正義爆臨——憎悪（ぞうお）の空より来たる

トンプソン

瑠璃はデモンベインの格納庫にいた。

そこには屍しかばねにも似た無む惨ざんな姿を晒さらしているデモンベインが横たわっている。それは悪夢にも似た絶望的な光景であり、戦いの激しさを雄ゆう弁べんに物語っていた。

現状ではブラックロッジに勝てない。

防ぼう御ぎよはそれなりにできるだろうが、守っているだけでは戦いに終しゆう止し符ふを打つことはできなかった。

積極的に打って出る必要があったが、デモンベインは倒たおされている。

だが瑠璃は絶望してはいなかった。

現在、格納庫ではデモンベインの修復作業が急ピッチで行われている。それに当たっているのは『トイ・リアニメイター』と呼ばれる小型のロボットだった。それはちょこまかと忙せわしなく動き回り、デモンベインを復元しようと懸けん命めいに働いている。

『トイ・リアニメイター』は優ゆう秀しゆうだ。二十四時間態勢でフル稼か働どうさせれば、数日後にはデモンベインを起動可能なレベルまで回復させるだろう。

デモンベインの修理に疑問を抱く者もいた。デモンベインを起動させるための魔ま導どう書しよは失われており、新たな魔導書を探し出す時間もない。スクラップ同然の機体に無む駄だな時間を費ついやすより、もっと他ほかにやることがあるはずだと。

彼らの言い分は理解できるが、それでもデモンベインは修理しなければならなかった。

（デモンベインは常に万ばん全ぜんでなければならない。なにが起きてもいいように──お爺じい様さまがそうしていたように）

デモンベインはアーカムシティに残された最後の希望である。

それは正義の体現であり、常に雄おヶおしく、絶対的な存在として敵の野望を打ち砕くだかねばならなかった。

（新たな魔導書が見つかる可能性だってある。それに……。あの古本娘むすめは死んだふりをしているだけかもしれない。明日になれば、わたくしたちの前に現れるかもしれない）

そのときデモンベインが壊こわれたままだとしたら、どのような悪態をつかれるかは火を見るよりも明らかだ。

瑠璃は思わず苦く笑しようする。

まだ希望は消えてはいない。

風前の灯ともし火びにも等しい弱々しさだったが、それは瑠璃の中で確かに灯ともっていた。

+

エルザは昏こん々こんと眠ねむり続けるドクター・ウェストの傍かたわらに立っていた。

体は順調に回復しているようだ。青白かった顔も輸血で生気を取り戻もどしている。ほどなく意識も戻るだろう。

ウェストのしぶとさを熟知しているエルザである。なにより運の良さは折り紙つきだ。破は壊かいロボットで負け続けているにもかかわらず、今も生きているのがなによりの証しよう拠こである。

運の良さと言えば、夢む幻げん心母からの脱だつ出しゆつ劇げきもそうだ。鉄てつ壁ぺきの要よう塞さいであり、クトゥルーを宿している夢幻心母からの脱出は不可能に近かったのだが―。簡単にはいかなかったものの、なんとか逃にげ切ることができた。命令系統の乱れなど、様々な理由が絡からんではいるのだろうが、結局はツキがウェストの味方をしていたのだろう。

ただウェストを取り巻いている状じよう況きようは最悪である。

覇道側へ亡命したまではよかったが、そこはすでに壊かい滅めつ寸前だった。

ほんの少し生きながらえるだけかもしれなかったが、自分が信じた道である。

それに死んだと思っていた九郎も生きていた。悪いことばかりではない。少なからず希望も残されていた。

「博士……しっかりするロボよ」

エルザは健すこやかな寝ね息いきを立てているウェストに向かって囁ささやいた。

+

ウェストは微睡まどろみの中にいた。

深い眠りに落ちているらしく、意識は混こん濁だくし、ぼやけている。コンピューターにも似た正確で完かん璧ぺきな頭脳も、今は一ひと桁けたの足し算ですら怪あやしいほどの演算能力しかなかった。

体が重い。体内に鉛なまりでも仕込まれたかのようだ。腹部は熱を持っており、鈍にぶい痛みを感じる。

自分の身になにか起きたようだが、判然としない。

夢か現うつつかさえも定さだかではなく、結局のところ考えるだけ無駄なのだという結論にいたった。

ウェストは瞼まぶたに意識を集中する。強ごう引いんに力をこめると、薄うす目め程度の視野を確保することができた。ただ世界は激しく歪ゆがんでおり、自分がどこにいてどのような状況にあるのか理解できない。世界は白一色に染まっており、その中心に見覚えのある少女の姿があった。

「博士……しっかりするロボよ」

　ドロドロとした汚お濁だくのような世界の中で、その声だけがやけに鮮せん明めいだ。それはウェストの心を和なごますには十分すぎた。

　ウェストはその声を耳にしながら再び夢の中へと落ちていく。

　いつしか彼の意識は過去へと向かっていた。

+

　ミスカトニック大学の医学部に在ざい籍せきしていたウェストは、そのころから変人で通っていた。彼が行っていた『死者の蘇そ生せい』の研究は誰だれからも理解されず、結果としてそのような認にん識しきが広まったのである。

　そんなウェストだが理解者もいた。彼の同期であるエルザだけは研究を理解し、その助手を買って出たのである。

　ただそれは永えい劫ごうとも言える後こう悔かいの始まりだったのだが……。

　結果から言えば『死者の蘇生』は成功していた。

　冥めい界かいへと旅立った者を現げん世せへと呼び戻し、生命活動を再開させる。理論は完璧であり、それに基もとづいて作られた蘇生液は死者を蘇よみがえらせていた。ただ心を失うという致ち命めい的な欠けつ陥かんがあり、それが最悪の事態を招くことになったのだが―。

　エルザは蘇った死者に殺され、彼女を生き返らせるために用いた蘇生液で、さらなる悲劇が起きてしまう。彼女は怪かい異いとして蘇り、病びよう棟とうに隔かく離りされたのである。

　ウェストは研究を止やめた。中断ではない。綺き麗れいさっぱり手を引いたのである。

完璧な『死者の蘇生』が行えたとしても、隣となりで喜んでくれる人がいなくては空むなしさが増すだけだ。

ウェストはミスカトニック大学を辞やめた。医学部部長であるアラン・ホールシィ博士が形だけ引き止めてはいたが、それだけである。

ウェストの手元には何一つ残らなかった。夢も希望もなく、エルザさえも失った彼は抜ぬけ殻がら同然だったのである。

だが生きている以上、腹も減る。ウェストは安さだけが取り柄えの切きり妻づま造づくりの屋根裏部屋を借り受け、そこで新たな生活を始めていた。

その部屋は〈魔ま女じよの家〉と噂うわさされる家屋の中にあり、広さはそこそこである。ただ緩ゆるやかに傾けい斜しやする壁かべや床ゆかなど、構造上に難がある欠陥住宅だったのだが。安さを優先させた結果がこれである。文句は言えなかったが、大家宅に怒ど鳴なりこむほどでもない。

生活費は医者の真似まね事ごとをすることで捻ねん出しゆつできた。患かん者じやの大半は血けつ気き盛さかんな若者であり、その治ち療りようが仕事のすべてである。それだけでも生活は成り立ち、食うには困らなかったのだが……。

（空しいのである）

力を持て余し、燻くすぶり続ける日々。

それは刺し激げき的すぎる日々を送ってきたウェストには拷ごう問もんにも等しい毎日である。

そんな生活を数ヶ月ほど送ったある日のことだ。

チャーチ・ストリートにある茶さ店てんをあとにしたウェストの前に、一人の少年が姿を現した。

その瞬しゆん間かん、ウェストの時は凍こおりつく。

夕日を背負い、ゆっくりとした歩調で近づいてくる少年から目が離はなせない。

ウェストの目は釘くぎ付づけになり、彼以外の映像が視野から排はい除じよされていく。

華きや奢しやな体を呪じゆ術じゆつ的な礼服で包みこみ、男とも女とも取れるような中性的な容姿をした彼は、凄せい絶ぜつなまでに美しかった。その美しさは人外のものであり、神が創つくり出したのではないかとさえ思える完璧さである。

彼は金色の髪かみを靡なびかせながら、ウェストの下もとへと近づいてきた。

（なんで……なんであるか!?）

ウェストは寒くもないのに震ふるえていた。両りよう膝ひざは奇き妙みようなほど笑っており、立っていることすらままならないほどである。

恐きよう怖ふだ。本能的な恐怖が呼び覚まされているのだ。その原因となっているのは彼の瞳ひとみである。光を宿さぬ金色の瞳の奥には宇宙規模の暗黒が広がっており、絶望して自殺しかねないほどの狂きよう気きが横たわっていた。

（に、逃にげるのである……）

本能が警告を発していたが、すくんでしまった足は動かない。

ウェストが脂あぶら汗あせを流している間にも、金色の瞳を持つ少年は近づいてくる。いっそのこと一思いに殺してもらったほうが、どれほど幸せだろうと思わずにはいられない。

だが逃げることも死ぬこともできないまま、少年はウェストの前

に立った。

「だ、誰であるか？」

　ウェストの声は無む惨ざんなほど震えている。

「余よか？　余はマスターテリオン」

　少年は人を惹ひきつけて止まない魅み惑わく的な声こわ音ねを発した。だが、その根底に流れているのは絶対的な恐怖である。

（マスターテリオン？　聞き覚えのある名前であるな……）

　だがウェストが答えを導き出す前に、少年は彼の疑問に答えた。

「ブラックロッジの大グラ導ンドマ師スター、と言えば解わかりやすいか」

　ウェストは失神しそうになっていた。

　ブラックロッジと言えば泣く子も黙だまる犯罪者集団である。それを束たばねるマスターテリオンは最悪の魔ま術じゆつ師しであり、ブラックロッジの象しよう徴ちようだった。

（まさか実在するとは……）

　少年が嘘うそをついているわけではない。そのことは彼が発する異常な気配で判わかる。

　だが理解できないこともあった。伝説に近い人物が、なぜ自分の目の前にいるのかと言うことだ。二人の間に接点はない。

（戯たわむれで人でも殺しに来たのであるか？　で。たとえば我わが輩はいが被ひ害がい者しやになったりするのであるか？）

　想像力を豊かにした挙あげ句く、泣き顔になるウェスト。

「貴公を殺したところで、余が得することはなにもない」

「！」

　ウェストは顔を引きつらせた。

（さすがは魔術師である）

　などと悠ゆう長ちようなことを考えている場合ではない。

　だが、なにか手が打てるかと言えばそうでもなかった。心を見み透すかされている以上、なにをしようが──あるいは、なにもしないことでさえ見み抜ぬかれてしまうだろう。

　慌あわてることも、じっとしていることもできなくなったウェストは、笑いながら涙なみだするという離れ業わざを披ひ露ろうし、道どう化け師し以上の滑こつ稽けいな姿を晒さらしながら硬こう直ちよくしていた。

　マスターテリオンは手て櫛ぐしで前まえ髪がみを掻かき上げると、穏おだやかな口調で口火を切った。

「貴公は有能だ。その力、余のために振ふるってみる気はないか？」

「それはつまり……」

「類たぐい希まれなるその力を、ブラックロッジのために使ってはみぬか、と言うことだ」

　早い話が勧かん誘ゆうだったのだが、ウェストは躊ちゆう躇ちよした。正義感があるわけではない。死者の蘇そ生せいという非人道的な実験を行ってきたウェストではあるが、積極的に犯罪に関かん与よしたいとも思わなかった。

　だがマスターテリオンは犯罪者としてウェストを迎むかえ入れるつもりはないようだ。あくまで科学者としての能力を見込んでいたのである。

　それはウェストの心に激しい揺ゆさぶりをかけてきた。単調な日々を送ってきた彼である。心おきなく実験ができるのであれば言うことなしだった。

　ただ『死者の蘇生』については二度と行わないと決めたウェストである。おそるおそるそれを宣言するが、マスターテリオンは気にもしなかった。

（だとしたら、我輩になにを求めているのである？）

考えている暇ひまはなかった。

マスターテリオンの無言の圧力に晒されていたウェストは、決断を迫せまられていたのである。

しかし、選せん択たくの自由など存在しなかった。拒きよ否ひなどありえず、させてもくれないだろう。申し出を断ったときに訪おとずれる惨さん劇げきは想像するまでもない。とは言え、退たい屈くつすぎる日々は真ま綿わたで首を絞しめられるようなものだ。

ウェストの気持ちは固まった。

強要されたからではない。自みずから乗りこむのだ。それに必要とされて悪い気はしなかった。

「結論は出たようだな」

マスターテリオンは涼すずしげな表情で囁ささやいたかと思うと、その姿を黄こ金がね色に染まった世界へと溶とけこませた。

凍こおりついた時間が、再び時を刻み始める。

「夢でも見ていたのであるか……」

ウェストは惚ほうけた顔で自分の頬ほおをつねり、すべてが現実であることを知った。

+

アーカムシティの外れに『焼野』と呼ばれる閉へい鎖さ区画がある。

そこは街が認にん定ていした十三番目の閉鎖区画であり、魔ま力りよく炉ろの暴走によって呪じゆ術じゆつ的に汚お染せんされ、人が住めなくなった死の大地だった。

だが、そんな場所に住まう者たちがいる。怪かい異いではない。人間である。

「まさか『焼野』にブラックロッジの本ほん拠きよ地ちがあるとは思わなかったのである」

『焼野』には彼らの活動の拠点である夢む幻げん心母があった。

　ほぼ球形のそれは建造中ではあったが、圧あつ倒とう的な迫はく力りよくは嫌いやというほど伝わってくる。

　建造が終わり、それが機能し始めたらどうなるか。

　考えただけでも鳥とり肌はだが立ち、震ふるえがくる。

　それはすでに犯罪者集団などという小さな枠わくで括くくれるものではない。もっと邪じゃ悪あくで、もっと悪意に満ちたなにかを感じずにはいられなかった。

　ウェストは夢幻心母の異様な姿を見上げながら、自分の運命が流る転てんし始めるのを感じていた。

+

　夢幻心母での生活はウェストの理想そのものだった。

　特に制約もなく、ひたすら研究に没ぼつ頭とうできる環かん境きようというのは、ウェストが欲ほつしてやまなかったものである。しかも専用の研究室まであてがわれ、必要な機材はすべてそろえることができた。まさにいたれりつくせりである。

　だが問題もあった。

　ウェストが廊ろう下かを歩いていたときのことだ。

「大導師は何故なぜこのような下げ賤せんな輩やからを迎え入れたのだろう」

　前方から歩いてきたアウグストゥスは、すれ違ちがう間ま際ぎわに独り言にしては大きすぎる声でつぶやいた。

「ちょいと待つのである。そこの青あお瓢びよう箪たん。下賤な輩

とは我輩のことであるか？」

　ウェストは目くじらを立てると、鼻息を荒あらくしながらアウグストゥスの下もとへと進んでいく。

「ははは。これは失敬。心の中でつぶやいたつもりが、ついつい口に出てしまったようですな」

「その口か、その口が減らず口を叩たたくのであるか！」

　慇いん懃ぎん無礼なアウグストゥスの態度に、ウェストの鼻息はさらに荒くなる。

　なにが気に入らないのか、事あるごとにアウグストゥスはウェストに絡からんできた。

　もっともウェストはウェストでアウグストゥスの高こう慢まんさが鼻につき、毛け嫌ぎらいしていたのでお互たがい様さまではあるのだが。

「とにかく、邪じゃ魔まとなるようなことだけは避さけていただきたいものですな。では、失礼」

　アウグストゥスはウェストに背を向け、歩き出した。

「その態度、あらためさせてやるのである」

　それからすぐのことだ。ウェストが破は壊かいロボットの製作を始めたのは。

　それはやがてブラックロッジを象しよう徴ちようする脅きよう威いとしてアーカムシティの住人の心に刻みこまれることになるのだが、それでアウグストゥスの態度があらたまることはなかった。

+

「アウグストゥスのあんぽんたんめ。破壊ロボットの威い力りよくをおみまいしてやるのであーる！」

　ベッドから跳はね起きたウェストは、空気が震えるほどの大声を張り上げた。

　張り上げたのだが──。

「ところで、ここはどこであるか？」

　ウェストは首をかしげながら辺りを見み渡わたした。

　そこは破壊ロボットのコックピットでもなければ研究室でもない。そもそもベッドにいること自体が不自然で、周囲に並べられた医い療りよう機器はさらに謎なぞである。腕うでには点てん滴てきがつけられていたようだが、飛び跳ねた際の勢いで外れていた。

「博はか士せっ！　もう大だい丈じよう夫ぶロボ？　痛くないロボ!?」

　声の方向へと顔を向けると、エルザが目を瞬しばたたかせていた。

「おお、エルザよ。ところで、ここはどこであるか？」

「覇道財ざい閥ばつの秘密基地ロボ」

　さらりと答えるエルザ。

「ＨＡＨＡＨＡ。は？」

　瞬しゆん間かん的にウェストの思考は停止し、続いて顔面から血の気がひいていった。

「なぜ？　なぜに敵の本拠地にいるのであるか!?」

「博士、目覚めたフリして寝ねぼけてるロボ？　一発、ぶちかましたほうがいいロボ？」

　エルザは答えを待つまでもなくウェストの頬を引っぱたいた。

　たったそれだけだったが、ウェストは鼻血を周囲にまき散らしながらベッドの中に沈しずんだ。

「……そ、そういえば我わが輩はい、アウグストゥスに……」

「思い出したロボ？　やっぱりエルザは優ゆう秀しゆうロボ」

　エルザの一いち撃げきが記き憶おくを呼び覚ましたわけではない。単に思い出しただけのことだ。

　ただアウグストゥスに不覚を取ってからの記憶は綺き麗れいに抜ぬけ落ちていた。

　そのことをエルザに告げると、彼女はウェストが気を失っていたあとの経けい緯いを話し始めた。破壊ロボットで夢む幻げん心母を抜け出したこと、亡命したこと、大十字九郎が生きていたことなどである。

「あの男、生きていたのであるか。しぶといのである」

　だが、それも当然だった。

　生しよう涯がいのライバルとして認めた男が簡単に負けてしまっては、自分の目が節穴だということになる。

「ところで、デモンベインはどうなったであるか？」

「大破したロボ」

「木こっ端ぱ微み塵じんであるか？」

「鉄てつ屑くずみたいなものロボ。あれなら博士のポンコツロボのほうが役立つロボ」

「ポ、ポンコツ……。我輩のライフワークがポンコツ……」

　ウェストはうなだれるが、それでも気を取り直してベッドから抜け出した。

「博士、まだ休むロボ。傷口が開くロボよ？」

「これしきの傷で我輩を止めることなどできないのである。そう。これは科学の申し子たる我輩がスポットライトを浴びるチャンスなのである。そして一気にスターダムに……」

「……死線をさまよっただけあって、言ってることが意味不明ロボ」

　呆あきれるエルザをよそにウェストは駆かけ出していたのだが、すぐにエルザの下へと舞まい戻もどった。

「道案内を頼たのむのである」

+

　デモンベインの格納庫へと足を運んだウェストは、その姿に呆ぼう然ぜんとなった。

　鉄屑という表現は大げさではなく、デモンベインのために用意された言葉ではないかとさえ思えるほどだ。

「こっぴどくやられたであるなあ……」

「これくらい、たいしたことないロボ。メタトロンが破壊ロボをぶっ壊こわすときは、もっと徹てつ底ていしてるロボよ？」

「……確かに」

　ウェストは『十字スラツ・断シユ・罪クロス』を思い出して身み震ぶるいした。

「しかし効率が悪いのである」

　ウェストはデモンベインの修理に当たっている『トイ・リアニメイター』に目をやった。

　効率が悪いわけではない。正確で的確、動きも素す速ばやかった。だが、それだけだ。一いつ般ぱん的な修理ロボットに比べれば速いそれも、ウェストにとっては欠伸あくびが出るほどの鈍にぶさである。リミッターでも仕込まれているのだろう。

「のんびりしている間に、攻せめこまれたらどうするつもりであるか」

　大破しても数時間で復活できるくらいでなければ実用性はない。

　修理ロボットなど壊れたところで問題はなかった。肝かん心じん

なのは、いかに早く正確に修理できるかということだ。それは数限りなくメタトロンに負けてきたウェストの教訓でもある。

「えっと……。エルザの計算によると、デモンベインの復活まで一週間と数時間ロボ」

「すっとこどっこい連中が一週間も放置するわけないのである」

「どうするロボ？」

「あの修理ロボに、もっともっと頑がん張ばってもらうのである」

　九郎が復活した以上、デモンベインに無様な姿を晒さらさせておくわけにはいかない。ライバルはライバルらしくあるべきだった。

「博士、デモンベインを直せるロボ？」

「なななな、なんと。我輩のことを疑っているのであるか!?」

　ウェストは今にも泣き出しそうな顔をしながら、さらに続ける。

「もちろんである。当然である。この超ちよう絶ぜつ大天才であるウェスト様に、そのような疑問を投げかけること自体、大おお間ま違ちがいなのであーる。エルザよ、おまえもそろそろオーバーホールの時期であるな？」

　さっそくウェストはエルザの服に手をかけたのだが―。

　次の瞬しゆん間かん、エルザが放ったアッパーカットをモロに食くらい、ウェストの体は天てん井じようへと向かって飛んでいった。

「ダーリンがいる以上、博士に体を許すわけにはいかないロボ。エルザの我が儘ままを許してほしいロボ」

　頬ほおを赤らめながら体をもじもじさせているエルザを上空から眺ながめながら、ウェストは不可思議な感覚に囚とらわれていた。

（……不思議なものである）

　ブラックロッジに入らなければ、そしてそこで破は壊かいロボットの製作に着手しなければ、デモンベインの修理などできなかった

だろう。そう考えると、すべて必然性があったのではないかとさえ思えてくる。

（我輩は……デモンベインを修理するこの瞬間のために……？）

　覇道のネットワークに侵しん入にゆうし、デモンベインの機密に触ふれていたウェストである。それすら予定されていたとしたら笑うしかない。

「……って、笑ってられないのであーる」

　ウェストは手足をばたつかせながら急降下し、床ゆかに激げき突とつした。

+

　九郎は格納庫へと向かって歩いていた。

　最悪の状じよう況きようではあるが、やれるだけのことをやっていたせいか表情に悲ひ壮そう感かんはない。それどころか滾こん々こんと湧わき出る泉のごとき闘とう争そう心しんが体中から表出している。

（手間取っちまったな……。そろそろ夜明けってところか）

　時計がなかったので勘かんに頼たよらざるを得なかったが、作業量を考えるとそれくらいである。

　幸いブラックロッジは攻めてはこなかったが、夜明けと同時に再開される可能性は高い。

（だから、その前に……）

　九郎は歩調を速め、格納庫へと向かって突つき進んでいく。

　そこへと向かっていたのには、もちろん理由がある。エルザが乗ってきた破壊ロボット。それが目当てだった。

（あれを使えば夢む幻げん心母に乗りこめる）

操縦法など知らなかったが、ウェストでさえ扱あつかえる機体である。なんとかなるはずだと九郎は考えていた。いざとなればエルザから聞き出すだけである。

この計画は瑠璃には話してなかった。止められるのが目に見えていたからだ。

（俺は……俺にできることをやるだけだ）

アーカムシティの上空に鎮ちん座ざするクトゥルーは、完全には覚かく醒せいしていない。最悪の事態を招く前に一気にケリをつけなければならなかった。

（最悪でもアンチクロスの誰だれかを道連れにできれば……。姫ひめさんたちの戦いも楽になる）

全員、始末するつもりではいるのだが、それは高望みでしかない。

だから一つでも多くの不安材料を排はい除じよする。

それが今の九郎には精せい一いっ杯ぱいだった。

+

格納庫へとたどり着いた九郎は我が目を疑った。

動転しすぎて言葉も出ない。ただ呆ぼう然ぜんと立ちつくすのみである。

（これは……）

九郎は自分でも呆あきれるほどの間ま抜ぬけ面づらを晒しながら、それを見上げていた。

「デモンベイン……」

目を擦こすり、あらためてその雄ゆう姿しを確かく認にんする。

カタパルトに収められているそれは、はりぼてなどではない。全身から放たれる絶対的な存在感は、鬼デウ械ス・神マキナのみに与あたえられた神気である。

デモンベインの周囲には整備用の小型ロボットが狂くるったような勢いで修復作業に当たっている。その作業スピードは尋じん常じようではなく、文字どおり目にも留まらぬ猛もう烈れつな勢いである。暴走しているのではないかと心配になるほどだ。

だがそれは確実にデモンベインを修復していく。剔えぐられた貌かおも、もがれた四し肢しも、剝はがされた鋼はがねの鎧よろいも、見事なまでに復活を遂とげている。完かん璧ぺきな仕事だった。

（しかし、こいつはいったい……）

覇道財ざい閥ばつの技術がいかに優すぐれていようと、これは尋常ではない。大破したデモンベインを数時間で復活させてしまうなど、常識外れにもほどがある。

そのときだ。

どこからともなく激しいギターの調しらべが聞こえてきた。

（……やべえ。ヤツだ。ヤツが来る）

九郎の脳のう裏りにイカれたサイコ野や郎ろうの姿が浮うかび上がる。

だが彼は今、瀕ひん死しの重傷を負って死線を彷徨さまよっているはずだ。このような場所にいるわけがない。

それでも九郎は自ク動ト式ウ拳グ銃アへと手を伸のばし、そのグリップを握にぎりしめた。

（幻げん聴ちようだ幻聴。幻聴ってことにしておけ）

九郎は切せつに願ったのだが、眩暈めまいがするほどの不協和音と絶望的な魂たましいのシャウトが九郎を奈な落らくの底へと突き落としていく。

「今夜、独りぼっちかーい？　今夜、僕がいなくて寂さびしくない

かーい？　別れたことを後こう悔かいしているかーい♪」

　デモンベインの裏側から現れたのは、流しのギター弾ひきを気取ったウェストである。

　ギターを掻かき鳴らしながら登場した彼は、デモンベインの爪つま先さきに背を預けながら、うんざりするようなパフォーマンスを繰くり広げている。

　さっそく九郎はこめかみに青筋を浮かべると、問答無用で自動式拳銃の引き金を引いた。

「ぐおおおおおっ！　き、貴様っ！　今、殺やる気満々だったね!?」

　ウェストの眉み間けんに風穴を開けるつもりだったのだが、弾だん丸がんは彼の横を通過し、髪かみの毛をわずかに散らしただけだった。

「弾たまが無む駄だになっちまったじゃねえか！　おとなしく逝いっとけばいいものを……っていうか、くたばっちまったんじゃねえのか!?」

「ふはははははは！　我わが輩はいのしぶとさとしつこさとウザったさを甘く見るなよ衆しゆう愚ぐ！　そんなにも甘いのがお好みなら、サッカリン等を大量に摂せつ取しゆするがいいさ！　存分に貪むさぼりつくせ、夜明けまで！」

「人間の言葉でしゃべれ」

　再度、ウェストに銃じゆう口こうを向けた九郎だが、苦労して作った貴重な弾丸を無駄にはできない。九郎は魔ま銃じゆうをホルスターに戻もどすとウェストを睨にらみつける。

「てめえ……。デモンベインになにしてやがる！　離はなれろっ！」

「おやぁ？　いいのかな？　そんな口を利きいても」

　ウェストは不敵な笑えみを浮かべている。

「いったい、誰がデモンベインを修復したと思っているのである」

「！　まさか……」

「そのまさかである」

　ウェストは傲ごう然ぜんと胸を反らした。

「なかなか優すぐれた修理ロボではあるが、我輩からしたらイマイチなのである。そこでだ。ちょちょいのちょいと改良してやったのである。嗚呼ああ、さすが我輩。完璧すぎる手て際ぎわのよさに失禁寸前である」

　九郎はウェストには目も向けず、デモンベインの整備に勤いそしんでいる修理ロボットへと目を向けた。

（あのトチ狂った作業スピードはウェスト譲ゆずりだったわけだ）

　なるほどと納なつ得とくした九郎だが、それはつまり彼の能力を認めたことでもある。性格は破は綻たんしていたが技術力はピカイチだ。大天才を自じ称しようするだけのことはある。

「しかし、よく姫ひめさんがデモンベインに触ふれることを許したな……」

「我輩は我輩の信念を基もとに行動しているだけである。よって許可など得るわけもなく」

　ウェストはニヤリとする。

「そんなわけで、作業員の皆みなさまには残らず眠ねむってもらったのである。うむ」

　九郎は額に手を当てると、肩かたを落とした。

　だが問題はそれだけではない。

「ところでドクター・ウェスト……」

「なんであるか？」

「てめえ、なにを企たくらんでやがるんだ？」

　問題はそれである。

　昨日までは敵同士という間あいだ柄がらだ。亡命したとはいえ、簡単に気持ちは切り替かわらない。スパイである可能性も否定はできなかった。

（そんな器用さがあるとも思えんが……）

　ギターを掻き鳴らしながら嘆なげき悲しむウェストを眺ながめながら、九郎はげんなりとしていた。

「疑うかね？　我輩を疑っているのかね!?　あー、嫌いやだ嫌だ。貴様の心は、すでに少年時代の純じゆん粋すいさを失ってしまったもよう」

　ウェストの演奏はより激しさを増していく。

「解わかった、解ったから、話を先に進めれ」

「うむ」

　突とつ然ぜん、ウェストは神しん妙みような顔をしたかと思うと、演奏を止やめて九郎へと向き直った。

「ようするにであるな、今や我輩にとってもアンチクロスは憎にくむべき怨おん敵てきなのである」

　忌いま々いましげにつぶやくと、ウェストは包帯が巻かれた脇わき腹ばらへと手を添そえた。

「そこでだ。我輩からの提案である」

「提案？」

「貴様と組みたい」

「俺と？　おまえが？」

「我々はライバル同士ではあるが、アンチクロスを倒たおすという点において方向性は一いつ致ちしている」

「……断ったら？」

「にゃ、にゃにおう!?」

　一いつ瞬しゆん、ウェストは慌あわてるが、すぐに真顔に戻った。

「我わが輩はいの頭脳と技術は、貴様にとって損になるものでもあるまい？　その証しよう拠こは貴様の目の前にある。いかに貴様の目が汚よごれていようが、目の前にある現実からは逃にげられまい？」

　デモンベインを数時間で復活させたウェストの技術力に、今さら異論を挟はさむことはない。

　しかしデモンベインが復活しても、それを起動させる術すべがなかった。アルはいないのだ。

「こいつを動かすことは……できないんだ」

　九郎はデモンベインを見上げた。

「魔ま導どう書しよの話は聞いているのである。ついてくるのである」

　ウェストは挑ちよう戦せん的な笑みを浮うかべたかと思うと、カタパルトに備えつけられたステップを上がっていく。九郎も彼のあとに続く。

　ウェストはデモンベインのコックピットの前で足を止めると、親指でその中を指し、顎あごを使って覗のぞいてみろというジェスチャーをした。

「これは……」

　コックピットへと目を向けた九郎は感かん嘆たんの声を発した。

　そこは徹てつ底てい的に改造されており、様々な計器類が整然と配置されていたのである。

「魔術師マギウスになれなくとも、デモンベインを動かせるようにしてやったのである。もちろんナビゲーターつきであるぞ」

　ナビゲート席にはエルザが座していた。彼女の体には様々なコード類がつながれており、それらすべてはデモンベインとリンクしている。

「魔導書は持っているであるな？」

「ああ」

　九郎はうなずくと、小こ脇わきに抱かかえていた魔導書をウェストに見せた。

「魔導書の情報はエルザを通してデモンベインへと伝えられる」

「それってつまり……」

「アル・アジフがいなくとも、デモンベインは起動できるということである」

「……」

「さあ、あとは貴様次し第だいであるぞ、大十字九郎」

　九郎は黙だまって魔導書を抱だきしめた。

（アル……。また、おまえと一いつ緒しよに戦えるんだな）

　そう考えただけで、九郎は強くなれる気がした。

「さあ、見せてやるのである、大十字九郎。貴様と我輩の頭脳とデモンベインの三さん位み一体を！」

+

　東の空が白み始めていた。

　いつもなら一いち番ばん鶏どりがわめき散らす時刻だが、今日は不気味なほど静まり返っている。

　アーカムシティは巨きよ大だいな廃はい墟きよと化していた。特に都心部は惨さん状じようと呼ぶに相応ふさわしい有様である。建物は残らず倒とう壊かいし、瓦が礫れきですら粉ふん砕さいされているほどだ。跡あと形かたもないとはこのことである。

　地面は月面に近かった。舗ほ装そうされ、整備されていたそこには大小様々なクレーターができており、いたるところに破は壊かい

ロボットの残ざん骸がいが転がっている。辺りには硝しよう煙えんとオイル、そして死し臭しゆうとが混じり合い、なんとも表現しがたい悪臭が漂ただよっていた。

被ひ害がいは郊こう外がいにまで及およんでいた。都心部ほどではないが、爆ばく風ふうや流れ弾だまで家屋は倒壊し、ほぼ壊かい滅めつしている。炎えん上じようし、黒こく煙えんを上げている建物も少なくない。

地平線の彼方かなたから太陽が昇のぼり始める。

その光はアーカムシティを──そしてクトゥルーの異様な姿を浮かび上がらせた。

突然、クトゥルーの足あし下もとの空間が歪ゆがむ。そしてそこから這はい出すように、百機ほどの機き影えいが出現した。ウェストが量産し、無人でも動くように設計された破壊ロボットである。それは合図すらないまま一いつ斉せいに稼か働どうを開始した。静せい寂じやくが打ち破られ、重なり合った駆く動どう音が超ちよう音おん波ぱにも似た振しん動どうを伴ともなって拡散していく。

破壊ロボットは地表から数十メートルの位置まで降下していくと、地面へと向けて地中バン貫通カー型誘バス導爆弾ターを発射した。その直下に覇道財ざい閥ばつの秘密基地があるのだ。

噴ふき上がる火柱、轟とどろく爆ばく音おん──。

アーカムシティは一いつ瞬しゆんにして焦しよう土ど化していく。抵てい抗こうはない。

そんな一方的な侵しん略りやくを眺ながめている男がいる。ティトゥスだ。彼はクトゥルーから生えた触しよく手しゆの先に立ち、眼下で繰くり広げられている破壊活動を冷ややかな目で見つめていた。

「フン……。つまらぬ」

マスターテリオンは死に、デモンベインが消しよう滅めつした今、アンチクロスの前に立ちはだかる者は存在しない。覇道財閥は張り子の虎とらであり、障害にすらなりはしなかった。この調子でいけば彼らの基地も直じきに陥かん落らくするだろう。

もはやティトゥスの渇かつ望ぼうを満たす者は存在しない。

（いや……）

ティトゥスは考えをあらためる。

「……ウィンフィールドとか言ったか、あの執しつ事じ」

ティトゥスは覇道邸ていを襲しゆう撃げきしたときのことを思い出していた。人でありながらアンチクロスと―自分と互ご角かくに渡わたり合った拳けん闘とう士しのことを。

ウィンフィールドが放つ拳こぶしの一つ一つが鮮せん明めいに蘇よみがえってくる。目で追うことすらできぬ神速の拳の数々。人間でありながらそれを超ちよう越えつした彼の業わざは、まさに神業と呼ぶに相応しい。それは称しよう賛さんに値あたいし、同時にティトゥスの心を戦せん慄りつさせた。

思わず武む者しや震ぶるいをする。恐きよう怖ふ心しんが体を蝕むしばんでいくが、そんな中にあって彼は笑っていた。暗い光を宿した双そう眸ぼうを爛らん々らんと輝かがやかせながら、凄せい絶ぜつな笑えみを浮うかべている。

全身から暗い闘気が放たれた。

「この程度の攻こう撃げきでやられてしまうお主ぬしでもあるまい？」

ティトゥスは喉のどを鳴らしながら笑うと、眼下へと目を向けた。

地中バン貫通カー型誘バス導爆弾ターを撃うち終えた破壊ロボットが新たな爆弾の準備に入る。再び地上へと向けて爆弾が撃ち放たれた。爆音が炸さく裂れつし、粉ふん塵じんが上空へと舞まい上がる。あとはその繰り返しだった。

六回目の投下準備が整ったときだ。

破壊ロボットは爆弾の投下を止やめた。攻撃が中止されたわけではない。攻撃方法が変へん更こうになったのである。

破壊ロボットの顔は地表を向いてはいない。全機そろって別のと

ころへと向けられていた。

（―何事か）

　ティトゥスの目は郊外へと向けられていた。

　そこには倒壊を免まぬかれているビルがあったのだが―。それは縦に裂さけたかと思うと、左右へと押し広げられていった。そしてその下から巨大な孔あなが現れる。

　次の瞬間だ。

　ティトゥスが見守る中、それは出現した。

「……莫ば迦かな！」

　ティトゥスは目を剝むき、困こん惑わくの表情を浮かべる。現れてはいけないものが出現したからであり、彼の思考は瞬間的に機能を停止していた。だが即そく座ざに思考は切り替かわり、顔に狂きよう気きで彩いろどられた笑みが浮かび上がる。

「皆みなの者、外を見てみろ。面おも白しろいものが見られるぞ」

+

　司令室は緊きん張ちようと混乱の坩堝るつぼと化していた。

　秘密基地への直接攻撃が始まり、各員、その対処に追われていたのである。

　破壊ロボットの波状攻撃は凄すさまじく、貫通型誘導爆弾は着実に基地の装そう甲こうを剔えぐり続けていく。それでも基地が無事だったのは、そこが地中深くにあったこと、そして何重もの装甲で固められているおかげだった。

　とは言え、長くは持たない。早さつ急きゆうに攻撃へと転じる必要があったのだが……。破壊ロボットに対たい抗こうしうる武器がなかった。

守りに徹てつするか、それとも私設軍を派は遣けんするか。

他ほかに選せん択たく肢しがあればよかったのだが、幅はばを広げられるだけのカードが手元にない。

（デモンベインさえ動けば……）

口くち惜おしさを感じずにはいられない瑠璃だが、それが無い物ねだりであることも知っていた。

断続的に続く振しん動どう、鳴り響ひびく警報音、モニターに映る無数の機き影えい。

緩ゆるやかながらも、最悪の結末へと向かって確実に進み始めている。

（どうする？　どうしたらいい!?）

全員、司令官である瑠璃の命令を待っている。彼女が発する起死回生となる命令を―。

悩なやみに悩み抜ぬき、それでも結論を出せずにいた瑠璃が苦し紛まぎれの一言を発しかけたときだ。

「ほ、報告しますっ！」

オペレーターの一人が驚おどろきの声を上げる。

「十二番区画の昇しよう降こう機が勝手に動作していますっ！」

モニターが十二番区画を映し出す。

その瞬間、誰だれも彼もがモニターに釘くぎ付づけになっていた。

アーカムシティに何十ヶ所も存在するデモンベイン専用の昇降機。ビルという形態を取り、巧たくみに隠いん蔽ぺいされていたそれが稼か働どうしていた。

ビルが中央から左右に分かれ、そこからゲートが表出する。

そしてそれは姿を現した。

全身に朝日を浴び、後光にも似た光をまとったそれは鋼はがねの巨きよ人じんである。

それは正義の代行者にしてアーカムシティの守護神。

魔まを断たつ剣けん。

―デモンベイン。

（なぜデモンベインが……）

デモンベインは修理中である。その修復には一週間程度の時間が必要との報告が入っていた。多少、前まえ倒だおしになったとしても、いくらなんでも早すぎる。そもそも魔導書がなかった。

瑠璃の頭上で疑ぎ問もん符ふが乱らん舞ぶする。

「大十字さん!?　大十字さんなのですか!?」

瑠璃はデモンベインへの通信回線を開いて叫さけんでいた。デモンベインからの返答はなかったが、代わりに鋼の巨人は親指を立ててみせた。

「大十字さん……デモンベイン……」

瑠璃は体が、そして魂たましいが震ふるえるのを感じていた。

やがてそれは闘とう志しへと変わり、鋼の意志を形成していく。

（まだだ。まだ絶望するには早すぎる。戦いは、これからだ）

+

玉座の間で破は壊かいロボットを見守っていたアウグストゥスは、突とつ如じよとして現れた理り不ふ尽じんな存在に驚きよう愕がくしていた。

「なぜだ、なぜデモンベインが！」

思わずアウグストゥスは叫んでいた。

完全に冷静さは失われていた。そのせいか他のアンチクロスが向けてくる冷れい笑しようも気にならないほどだ。

（デモンベインは我らが―いや、私がレガシー・オブ・ゴールドで滅めつしたはず）

あれが幻げん想そうだったとは思えない。

だがデモンベインは間ま違ちがいなくそこに存在していた。

「あの状じよう況きようから逃のがれたということは―。つまり、つまりだ。瞬しゆん間かん移動ということだろう。【ネクロノミコン】ならば可能やもしれんが……。うぅむ」

ウェスパシアヌスはアウグストゥスの傍かたわらで顎あご鬚ひげをなでつけながら、興きよう味み津しん々しんとでも言わんばかりの表情をしていた。

だがアウグストゥスとしては悠ゆう長ちように構えてなどいられない。

確実に始末した相手である。奇き跡せきの復活劇など認めてはならなかった。

アウグストゥスは歯ぎしりをする。

「ならば、今度こそ完全に息の根を……」

「待ってクレ。せっかく生きのびてくれタのだ。今度こそ借りを返しタい」

カリグラは義手を振ふり上げながら呪じゆ詛そにも似た声を吐はき出した。

そんな彼の目は闘とう争そうの予感を敏びん感かんに察知し、歓かん喜きと狂きよう気きの色を覗のぞかせている。大十字九郎への復ふく讐しゆう以上に、戦いという名の麻ま薬やくがカリグラに悦よろこびを与あたえているのだろう。

「また返り討うちにあうんじゃねーの？」

　おどけるクラウディウスに対し、カリグラは目を細めた。

「黙だまレ……」

　腹の底に響く重低音の恫どう喝かつがキッカケとなり、カリグラとクラウディウスの間に不ふ穏おんな空気が流れる。またいつもの喧けん嘩かが始まりかけたが、そうなる前にウェスパシアヌスが割りこんだ。

「しかし、あれからは以前のような強い魔ま力りよくを感じぬぞ？　そもそも【ネクロノミコン】の気配がとても希き薄はくで、なんのプレッシャーも感じない。どういうことだろう？」

　ウェスパシアヌスは少し考える素そ振ぶりをすると、さらに続ける。

「戦っても肩かたすかしを食くらうかもしれないぞ？」

「おほほほほっ☆　最後の悪あがき？　必死に強がってる感じよね～。なんか、可愛かわいいわあ♪」

　ティベリウスは体を揺ゆさぶりながらケラケラと笑っている。

「フン。だったら、気がすむまで嬲なぶり殺しにするだけダ」

　そう言い放つカリグラは、すでに戦う準備が整っている。

解き放たれる闘気、そして充じゆう実じつしていく精神、彼のやる気がうかがえた。

そんな彼の姿を横目で眺ながめながら、アウグストゥスは考えていた。

無理に引き留めてカリグラとの間にわだかまりを残すよりも、彼を利用し、デモンベインを始末させたほうが得策ではないかと。

それにウェスパシアヌスが話したとおり、デモンベインからはなんの威い圧あつ感かんも感じなかった。【ネクロノミコン】の力は畏い怖ふすべきものではあるが、神の力を手に入れようとしているアウグストゥスにとって、その程度の力は問題にもならない。

「いいだろう。カリグラ、遊んでくるがいい」

+

昇しよう降こう機を使って地上へと吐き出されたデモンベインを待ち受けていたのは、百機もの破壊ロボットだった。

それは一いつ斉せいにデモンベインの上空へと飛来してきたかと思うと、即そく座ざに砲ほう撃げきを開始する。砲ほう弾だんは土ど砂しや降ぶりの雨より激しく降り注ぎ、デモンベインを容よう赦しやなく打ち据すえていく。

コックピットに断続的な振しん動どうが伝わってくるが、計器類はすべて正常値を示していた。

九郎はデモンベインを操あやつりながら、バルカン砲の射程圏けん内ないに入ってくる破壊ロボットを片かたっ端ぱしから撃げき墜ついしていく。地道な作業ではあったが確実に破壊ロボットの数は減っていった。

しかし、以前ほど戦闘に幅はばがない。メインで使えるのがバルカン砲だけでは、やはり無理があった。破壊ロボットが高度を上げ、射程外へと逃れてしまったら打つ手はない。

加えてデモンベインの動きは鈍にぶかった。行動に支障はなかったが、反応が微び妙みように遅おくれている。エルザを介かいして魔ま導どう書しよの力を行使しているため、僅わずかなタイムラグが発生しているのだろう。

それでも懸けん命めいに機体を操り、攻こう撃げきを加えていく

ことで、どうにか破壊ロボットの数を半数にまで減らすことができた。

　だが九郎は不安を感じずにはいられない。破壊ロボットの殲せん滅めつに不安要素はないが、問題は鬼デウ械ス・神マキナである。僅かなミスが命取りとなる鬼械神同士の戦いにおいて、反応の鈍さは致ち命めい的だった。

　その危き惧ぐを胸に抱いだいたときだ。

　足あし下もとが脈打ち、胎たい動どうするかのように揺れ始めた。

「地じ震しんか!?」

　だが、それとも違ちがうようだ。地下に膨ぼう大だいな水が流れを感じるのと同時に、異様な気配をも九郎は察知していた。

　空気が張りつめ、強制的に恐きよう怖ふ心しんが植えつけられていく。

　地面が盛り上がり、水柱が上がった。

　高層ビルよりも高く噴ふき上がった水柱は、円を描えがくように一本、また一本と立ち上っていく。

　計六本の水柱が立ったとき、地面に魔ま法ほう陣じんが浮うかび上がった。

「ちっ！　さっそくお出ましだ」

　魔法陣が輝かがやき始め、それと同時に水柱の勢いが増した。とてつもなく巨きよ大だいな魔力が湯水のごとく溢あふれ出してくる。六本の水柱がねじ曲がり、絡からまり合いながら巨大な一本の水柱と化した。やがてそれは爆ばく砕さいし、アーカムシティにスコールのごとき雨を降らせた。

　そしてその中心に、巨大な質量を持った物体が顕けん現げんする。

　―鬼械神・クラーケン。

　無骨で剛ごう健けんなフォルムをしたそれは、圧あつ倒とう的な存在感を放ちながら威い圧あつするかのようにそびえ立っている。

『ゲェハハハハハハッ！』

　カリグラの笑い声が聞こえてきたのと同時に、クラーケンの二本の腕うでが伸のびてくる。大だい蛇じやにも似たそれはデモンベインへと牙きばを剝むき、空気を切り裂さきながら迫せまってきた。

　デモンベインは地面を蹴けってクラーケンの下へと一気に跳ちよう躍やくする。鋼鉄の爪つめがデモンベインの肩かた口ぐちをかすめていく。装そう甲こうに軽い罅ひびが入るが問題はない。デモンベインは勢いを保ったままクラーケンに飛び蹴りを食らわした。クラーケンは後方へと弾はじけ飛び、崩ほう壊かい寸前のビルを何なん棟むねか巻きこみながら倒たおれこむ。

『き、キサマ……ッ！』

　瓦が礫れきを振ふり払はらいながらクラーケンが身を起こす。そして完全に体勢を立て直したところで動きを止めた。

　クラーケンはデモンベインの動きを注視している。

　二、三百メートルほどの距きよ離りを空け、睨にらみ合う二体の鬼械神。

「ダーリン、解わかっていると思うけど、エルザは魔導書というオペレーターを代行するシステムにすぎないロボ。魔導書のデータを電算化して魔術回路に送ることで魔導書の存在を誤ご認にんさせる、言うならばダミーとしてのシステムロボ。だから魔力を必要とする行動には自おのずと制限がつくロボ」

「ぶっちゃけた話、デモンベインを動かすだけでも精せい一いつ杯ぱいってわけだ」

「自ク動ト式ウ拳グ銃アや回転式イタ拳銃クア、バルザイの偃えん月げつ刀とうも使えないロボ。使える武器はデモンベインに初めから搭とう載さいされているものに限られるロボね。バルカンやレムリア・インパクトロボ」

「上等だ。それだけあれば釣つりがくる」

九郎はモニターに映るクラーケンを睨みつけた。

膠こう着ちやく状態は長くは続かない。

駆かけ引ひきが苦手なのか、それとも端はなからそのつもりもないのか、クラーケンが再び腕を伸ばして襲おそいかかってくる。

（筋肉バカが。やることが一つ覚えなんだよ！）

九郎はニヤリとすると、デモンベインを疾しつ駆くさせるべく脚きやく部ぶへと力を溜ためる。そしてそれを解放させようとしたときだ。後方から飛来してきた破は壊かいロボットが特とつ攻こう隊たいよろしく体当たりしてきた。デモンベインの体勢が崩くずれる。

「ちいっ！」

舌打ちしながらデモンベインの姿勢を制せい御ぎよした九郎は、続いて回かい避ひ行動へと移っていく。だが彼の反応速度にデモンベインがついていかない。見た目には判わからないほどの誤差ではあるが、紙かみ一ひと重えでかわせるはずだった鋼鉄の爪がデモンベインの肩口の装甲を削けずり取っていく。

（危ねえ……）

九郎は冷ひや汗あせを流した。鋼鉄の爪に捕つかまりでもしたら、一気に勝負は決まるだろう。

『ガハハハハ！　どウした!?　動きが鈍にぶイぞっ！』

鋼鉄の爪は縦じゆう横おう無む尽じんに動き回り、あらゆる方向からデモンベインへと襲いかかってくる。まるでそれ自身が意思でも持っているかのような動きだ。

デモンベインはクラーケンの攻こう撃げきを避さけ続ける。ほとんど根気比べだった。双そう方ほうとも一いつ瞬しゆんの隙すきを狙ねらっている。相手を叩たたき潰つぶすには、それだけで十分なのだ。

（焦あせるな。勝機をうかがえ──。必ずチャンスはやってくる）

九郎は耐たえた。そのときが訪おとずれることを信じて耐えに耐

える。

（一瞬だ。ほんの一瞬でいい……）

　必ひつ滅めつの一いち撃げきであるレムリア・インパクトを決めるには、それだけの時間があれば十分だった。

『ヌガアアアアア！』

　カリグラが雄お叫たけびを上げる。クラーケンの腕が波打ちながら迫せまってきた。

　デモンベインは即そく座ざに回避行動に移る。攻撃は厳しいがパターン化しているので意外に避けやすい。

　デモンベインは腰こしを落とし、下半身に溜めこんだ力を一気に吐はき出した。のたうつかのような鋼鉄の腕が足あし下もとを通りすぎていく……はずだった。それは突とつ然ぜん、垂直方向へと軌き道どうを変え、デモンベインの足首に爪を立てる。

『捕まえタぞ……！』

　クラーケンは腕を振るうと、デモンベインを地面へと叩きつけた。

　天地がひっくり返るほどの激しい衝しよう撃げきが全身を突つき抜ぬけていく。

「ぐあああああああっ！」

「きゃあああああっ！」

　九郎とエルザの悲鳴がコックピット内に木こ霊だまする。

　地面へと倒れこんだデモンベインに対し、クラーケンがトドメを刺さしにきた。

　鋼鉄の爪が眼前に迫る。

（や、やべえ！）

　慌あわてて横に転がろうとするが、間に合いそうにない。

《十字スラツ・断シユ・罪クロス！》

　突然、眼前を横切る白い閃せん光こう。

　それが収まったとき、クラーケンの右みぎ腕うでは斬きり落とされ、地面へと落ちた。それは周辺の建物を巻きこみながら、蜥と蜴かげの尻尾しつぽのようにのたうつ。

　九郎はカリグラが怯ひるんでいる隙にデモンベインを立たせると、身構えた。

「メタトロン！」

　デモンベインとクラーケンの間に浮うかんでいたのは白の天使である。

　メタトロンは板状の翼つばさを広げ、フレアを噴ふき上げたかと思うと、クラーケンへと向かって突とつ撃げきしていく。

『メタトロン！　邪じや魔まヲするナぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』

　クラーケンは残された腕を振ふり回してメタトロンを叩き落とそうとするが、相手が悪すぎた。メタトロンはあまりにも小さく、そして機動力に優すぐれている。クラーケンはメタトロンの動きに翻ほん弄ろうされ、それが撃うち放つビーム砲ほうを立て続けに食くらっていた。

《いいのか？　私にばかり気を取られていて。戦いの中で敵を忘れているぞ》

『ナニ!?』

　ふと、クラーケンが動きを止める。

（メタトロンの言うとおりだ。カリグラ、てめえはやっぱり筋肉バカだ！）

「ダーリン！」

「おう！」

　エルザの叫さけびに九郎が応じる。彼女が言わんとしていること

が彼には解った。

　ついにきたのだ、その瞬しゆん間かんが。

　九郎はクラーケンに必滅の一撃を加えるべく、速すみやかに行動を開始する。

　クラーケンの頭上へと跳とんでいたデモンベインは、急激な勢いで降下していく。

　クラーケンが頭上を振り仰あおぐが、今ごろ気がついても遅おそすぎる。

「光射さす世界に、汝なんじら闇あん黒こく、棲すまう場所なし！」

　デモンベインの右の掌てのひらに組みこまれた機関が覚かく醒せいしていく。

『なぁぁアアアアぁぁぁ――――にいいいいいいい!?』

　驚おどろきの声を上げるカリグラに対し、九郎は審しん判ぱんを下すかのように高らかと宣言する。

「渇かわかず、飢かつえず、無に還かえれ！」

　デモンベインの右手に凶きよう暴ぼうな獣けものが宿る。

「レムリア・インパクト！」

　クラーケンを押し潰すかのように突き出された右の掌から、すべてを滅し、昇しよう華かしていく膨ぼう大だいな熱量が放出される。

『アアアアアアアアアアアアーッ！』

　咎とが人びとの断だん末まつ魔まの叫びが響ひびき渡わたるが、それもすぐに九郎の雄叫びで掻かき消されていく。

　世界は目が眩くらむほどの光に包まれ、やがて静せい寂じやくだけが残された。

+

その瞬間、司令室は歓かん声せいに包まれた。

圧あつ倒とう的に不利な状じよう況きようを覆くつがえし、デモンベインは高らかと勝ち名乗りを上げている。

その姿は雄お々おしく、そして神こう々ごうしい。

東の地平から姿を現した陽光が、まるで祝福するかのように光り輝かがやいていた。

瑠璃の心の中に、再び希望という名の炎ほのおが灯ともった。

（まだだ。まだわたくしたちは敗れてはいない！）

確かな自信、そして希望を感じながら、瑠璃はデモンベインへと目を向ける。

（メタトロンがいる。それにデモンベインも復活した。わたくしたちは―人類は、まだ戦える！）

「……ウィンフィールド」

「はい、お嬢じよう様さま」

「魔まを断たつ剣けんは、まだここにあります」

「無論でございます。敗北も、そして絶望も、我々にはまだ遠すぎます」

瑠璃はうなずきを返した。

+

九郎の心は信じられないほど晴れやかだった。

　希望すら抱いだくことができず、絶望という色で塗ぬり固められた世界の中に、一筋の光が射しこんできたかのようだ。

　そう。地平の彼方かなたから上ってきた太陽のような光が。

（終わらない夜はない。邪じや神しんに冒おかされたこの不ふ浄じような大地にも朝はやってくる。やってくるんだ）

　クラーケンを相手に勝利をもぎ取っていた九郎だが、勝算があったわけではない。相手は鬼デウ械ス・神マキナである。アルがいない以上、勝つ可能性はかなり低かった。

　だが―。

（俺は……俺たちは勝った）

　勝てる可能性は低かったが、負ける要因も見つからなかった。一見、矛む盾じゆんしているようではあるが、デモンベインには大勢の人の想おもいが託たくされている。それに守られ、そして励はげまされ……復活を遂とげたデモンベインに負ける要素など一つもない。

「やったロボ！　鬼械神に、アンチクロスに勝ったロボ！」

「あったりまえだ。負けるわけねえだろ……。こいつには、みんなの願いがこめられてるんだ」

（姫ひめさんの。執しつ事じさんの。ライカさんや子供たち、街のみんなの。そしてきっと、エンネアも……。それに―）

　九郎は、そっと目を伏ふせる。

「アル……」

　目の前に、翡ひ翠すい色の瞳ひとみをした銀ぎん髪ぱつの少女の姿が浮うかび上がってくる。

（そうだ。今だって俺たちは一いつ緒しよに戦ってる。そうだろう？）

　九郎の問いにアルが答えることはない。

だが実感があった。共に戦っているという確かな実感が。

それを感じ取れただけでも十分だった。一人ではないと気づくことが重要だったのである。

――一人で抱かかえこむな。苦痛も悲しみも後こう悔かいも、すべて我ら二人で分かち合おう。

アルの声が聞こえた気がして、九郎は苦く笑しようする。

（つまりは、そういうことだ）

九郎は確かな自信を胸に、瞼まぶたを開いた。

眩まばゆいばかりの朝日が、邪神に汚けがされ、冒され、壊こわされた世界に広がっていく。あまりにも残ざん酷こくな傷きず痕あとは、目を背そむけてしまいたくなるほどだ。

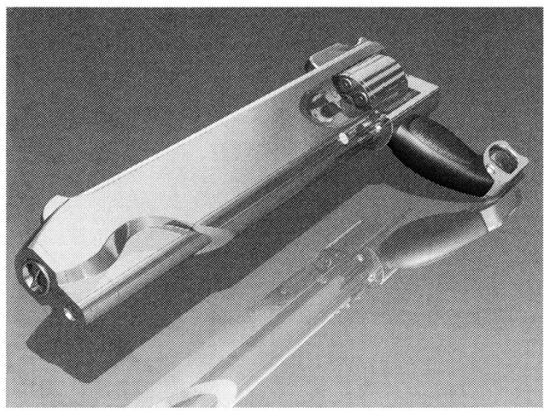
悪夢は覚めたわけではない。むしろ本当の悪夢、本当の戦いはこれからだった。

（どうだ、見ているか？　ブラックロッジ！　これがおまえらを滅ほろぼす刃やいばの煌きらめきだ。てめえらは、この魔を断つ剣がぶった斬ぎる！）

九郎は彼方に確かく認にんできるクトゥルーを見み据すえる。

そんな彼の気持ちに応こたえるかのように、デモンベインが吠ほえた。

第三章 断罪者——白き天使の羽根が舞う



エルザ用トンファー

　勝ち名乗りを上げるデモンベインの雄ゆう姿しを、メタトロンは遠くから見つめていた。

　九郎ならやってくれる。

　そう信じてはいたが、必ずしも勝算があったわけではない。魔ま導どう書しよを失った九郎が勝てる可能性など万に一つしかなかったからだ。

（まだ絶望するには早すぎる。確かな希望がここにあるのだから）

　メタトロンが翔かけようとしたそのときである。

　視界の中に黒い影かげ―サンダルフォンがたたずんでいることに気がついた。

「□□□□！」

　メタトロンはためらわなかった。

　術式を編み上げ右みぎ腕うでを砲ほう身しんへと変化させると、サンダルフォンへと向けてビーム砲を撃うち放つ。それは正確にサンダルフォンへと向かっていくが、彼は怯ひるむ様子すらみせずに悠ゆう然ぜんと構えている。

《フンッ！》

　サンダルフォンは気合いとともに右の拳こぶしを突つき出した。ビーム砲は拳で迎げい撃げきされ、粒りゆう子しとなって四散する。

《メタトロン！》

　サンダルフォンは双そう翼よくを展開し、爆ばく発はつ的な速度で突とつ撃げきしてくる。

メタトロンも応じる形で彼へと突とつ進しんしていく。

超ちよう高こう速そくで飛ひ翔しようする二人の天使―。

メタトロンの両腕にビームセイバーが顕けん現げんし、サンダルフォンの拳には闇やみがまとう。

白と黒の天使が空中で交こう錯さくした。

+

空は分厚い雲に侵おかされていた。

光は拒きよ絶ぜつされ、昼時にもかかわらず辺りは暗い。雲は絶えず蠢うごめき、形を変えながらも流れていく気配はなかった。その雲はかれこれ数週間も居座り続けており、一時間ほど前からは雪まで降り始めている。それは少しずつ、しかし確実に降り積もり、うらぶれた町並みに微かすかな彩いろどりを与あたえていた。

キングスポート。それがこの町の名前であり、アーカムシティの東部に位置する寂さびれた港町である。その歴史は長い。三百年ほど前に南方からやってきた者たちが植民地化した町であり、かつては漁業で栄えたこともあった。だが現在の住民数は百人にも満たないほどであり、その大半が老人だった。

そんなキングスポートの中心部にある小高い丘おかの頂に、町で唯ゆい一いつの教会は建っていた。町を興おこした当初に建てられたそこは、三百年という歳さい月げつを経てもなお揺ゆらぐことはなく、町を見守るかのように鎮ちん座ざしている。

そんな教会の中で外の景色を眺ながめている少女がいた。少し癖くせのあるブロンドの髪かみ、そして金茶色の瞳ひとみが印象的な少女である。十歳にも満たない幼子ではあるが、同年代の子供よりも華きや奢しやで、雪のような白い肌はだは神秘的ですらあった。その姿は教会に舞まい降りた天使のようだが、憂うれいを帯びた表情は妙みように大人びており、どこか疲つかれていた。

少女の名はライカ・クルセイド。教会で暮らしている孤こ児じの

一人である。

　さして暖かくもない礼拝堂の中で、ライカはしんしんと降りしきる雪と、眼下に臨のぞめるキングスポートの町並みを見るともなしに眺めていた。

（ここに来て、もう一年になるのかあ……）

　ライカは子供とは思えないほどの深刻な顔で溜め息いきをついた。

（あの日も雪が降っていたっけ）

　ライカと彼女の弟・リューガが教会に来たのは、ユールの日から数日後だった。心さえも凍こおりつくほどの寒さの中、二人は互たがいの手を握にぎりしめながら教会の扉を叩たたいたのである。

　ライカとリューガに身寄りはない。二人は両親に捨てられていたのである。

　ライカには不可思議な力があった。

　いつから発現するようになったのかは定さだかではない。物心がついたころには共にあった能力である。それは窓や電球の破は砕さいという些さ細さいな現象から、人に怪け我がを負わせるようなものまで様々だった。感情が高ぶったり身体的な危機に直面した際に顕けん著ちよに現れ、なぜそのような力が身についたのかは皆かい目もく見当がつかない。彼女の両親にそのような力はなく、リューガにもない。ライカだけが特別だった。そしてそれは彼女に過か酷こくな運命を背負わせることになる。

　ライカの精神状態が不安定になる度たびに、周囲の人間は被ひ害がいを被こうむった。死人こそ出なかったが、彼女を疎うとみ、畏い怖ふするようになるまで時間はかからなかったのである。

　彼らはライカを迫はく害がいし、危害を加えることで心に住みついた恐きよう怖ふ心しんを振ふり払はらおうとした。そしてその度に彼女は傷つき、被害が拡大していくという最悪の悪あく循じゆん環かんが形成されたのである。

　ただライカにとっての真の不幸とは、守ってくれるはずの両親が敵に回ったことである。

度重なる暴力、そして監かん禁きん―。

畜ちく生しようのような扱あつかいを受けた挙げ句、ライカは捨てられたのである。リューガを一いつ緒しよに捨てたのは、彼もいつか不可思議な力を発現するのではという恐怖心からだろう。
リューガには申し訳ないことをしたと思うライカだが、彼がいたおかげで絶望せずにすんでいたのも事実である。

ふと気がつくと、ライカに寄り添そうようにしてリューガが立っていた。艶つやのあるブラウンの髪に茶色の瞳。ライカより一回り小さなリューガだが、その目には彼女にはない意思の力を秘ひめている。

まだ大人としての成長が始まっていないせいか、年子の二人はとても似ていた。もっとも似ているのは外見だけで、性格は正反対である。内向的でおとなしいライカに比べてリューガは快活だった。

どちらからともなく二人は手をつなぐと、窓の外へと目を向ける。

雪はしばらく止やみそうになかった。

+

とてつもなく深い闇やみがキングスポートを侵しん食しよくし始めていた。

質量でもあるかのようなその暗闇は、蠢き、這はいずり、膨ぼう張ちようし続けながら町中へと拡散していく。ユールの日とは思えぬほどの邪よこしまな気配が町を包みこんでいた。

そんな重苦しい闇が横たわる中、民家の灯あかりが一つ、また一つと消えていく。それは速すみやかに町全体へと波は及きゆうし、やがては道に点在する角かく灯とうだけが唯一の光源となった。

その一部始終を窓辺で眺めていたライカは、胸中に芽め吹ぶいた不安感に顔をしかめた。

日常的に感じていた微かなざわめきが、今日はハッキリと感じ取れる。その正体は不明だが、とにかく嫌いやな予感がした。わけもなく鼓こ動どうが速まり、掌てのひらにうっすらと汗あせが浮うかぶ。

教会へと至る曲がりくねった道へと目を向けたライカは、それをたどって歩いてくる百名ほどの群衆の姿を確かく認にんした。大半は老人たちだが、二、三十代の若者も交じっている。彼らはキングスポートの外から来た者たちのようで、そのことは着衣から判断できた。きちんと縫ほう製せいされたメーカー製の服は、閉とざされ、忘れ去られたキングスポートではありえない代しろ物ものだからだ。

彼らの顔には表情がなく、行動も均一で、まるで主体性がなかった。彼らは教会を目指して黙もく々もくと歩くと、礼拝堂の中に次々と飲みこまれていく。

（なにをしてるんだろう？）

教会に隣りん接せつした離はなれで様子をうかがっていたライカは、礼拝堂ですし詰づめになっている彼らの姿を想像して首をかしげる。確認したくなったが、今日は特別の日であるとの理由で神父に立ち入りを禁じられていた。

（……覗のぞいちゃっても平気かな？）

教会でなにが行われているのか。

それまで気にもならなかったことが急に気になり始めた。

（とにかく行ってみよう）

好こう奇き心しんに抗あらがえず、ライカが行動を起こしたときだ。

彼女の隣となりで不安げにしているリューガと目が合った。彼は黙だまってライカと手をつないだ。自分も付き合うという意思表示だろう。

二人はうなずき合うと、そっと部屋を抜ぬけ出した。

+

外に出た途と端たん、身を切るほどの厳しい冷気が襲おそいかかってきた。

幸い雪は止んでおり、海から吹ふきつけてくる湿しめり気けを帯びた寒風もない。

見上げると雲の切れ間から夜空が覗いており、教会の尖せん塔とうの真上には赤く輝かがやくアルデバランの怪あやしげな光を確認できた。

リューガが手に力をこめてくる。ライカはそれを握にぎり返すと、雪を踏ふみしめながら教会へと向かって歩き出す。キュッキュッと足あし下もとで雪が鳴くような音を立てた。

二人は教会の入り口へと歩を進める。木製の扉とびらはキッチリと閉じられており、リューガはそこに耳をつけて中の様子をうかがった。ライカも彼を真似まねて扉に耳をつけたのだが物音一つ聞こえてこない。

（あんなにたくさんの人が入っていったのに……）

ライカは首をかしげると、扉に手をかけて中を覗きこんだ。

内部は薄うす暗ぐらく、全体を見通すことはできなかったが、それでも異変には気がついた。礼拝堂には人っ子一人いなかったのである。そこにあるのは廃はい屋おくにも似たうらぶれた空間だけで、人の気配はない。

「神父さまたち、どこに行ったんだ？」

リューガの問いにライカは首を傾かしげて応こたえると、扉に手をかけた。そして中へと一歩、足を踏み入れる。

鼓動が速まり、気分が高こう揚ようしていく。言いつけに背そむくという行こう為いがライカを興奮させていた。

玄ナル関テツ間クスを抜け、会衆席へと進んでいく。前方には薄うす明あかりの中で祭さい壇だんが浮かび上がっており、礫はりつ

けにされた聖者がだらしなく頭こうべを垂れている。見慣れているはずの光景だったが、なぜかライカは得体の知れない禍まが々まがしさ、そして漠ばく然ぜんとした不安感を覚えていた。

　不意にライカは腐くさった生物のような臭においを感じた。それは微かすかな空気の流れに乗って鼻び孔こうを刺し激げきしてくる。鼻をヒクヒクさせながら臭いの方向へと注視すると、そこには説教台があった。

　ライカは説教台へと足を運んでいく。見ると、説教台と祭壇の間に地下室へと向かう穴がポッカリと口を開けていた。臭しゆう気きはそこから流れてきた。

　ライカは穴の奥へと目を向けた。深い深い深しん淵えんのような闇で満たされたそこには、本能的な危機感を煽あおるなにかが横たわっているように感じられる。

（あの人たち、ここに入ったんだ……）

　ライカとリューガは躊ちゆう躇ちよしながらも地下へと続く石造りの階段を下り始めた。一段一段、足下を確認しながら、ゆっくりと闇やみの中へと身を投じていく。腐ふ臭しゆうはいよいよ強くなっていた。

　闇の中からフルートにも似た音が響ひびいてくる。それは脳のう髄ずいを冒おかすほどの不快な音色だった。もっともメロディラインなど存在せず、ひたすら気分を害すだけの不快な調べである。

　やがて階段は終わりを告げ、目の前に巨きよ大だいな空間が広がった。丘おかをくり貫ぬいたような天然の洞どう窟くつである。そこは緑色の灯あかりで照らされていた。光源となっているのは、洞窟の中心部で猛たけり狂くるっている巨大な火柱である。なにを燃やしたらあのような色になるのか見当もつかなかったが、その炎ほのおに神聖さはなく、驚おどろくほど汚けがれている。

　神父たちはそこにいた。彼らは天てん井じようまで噴ふき上がる巨大な火柱の前に立ち、一心不乱に祈いのりを捧ささげている。儀ぎ式しきめいた禍々しいその光景に、ライカは卒そつ倒とうしかねないほどの脅きよう威いを感じていた。

　それだけでもどうにかなってしまいそうだったのだが、さらに決

定的なモノを見てしまう。

「あ……あああああっ」

　ライカとリューガは悲鳴にも似た声を発した。

　二人は喘ぜん鳴めいにも似た息いき継つぎをしながら、それを凝ぎよう視しする。形が定まらぬ不定形をした名状しがたき生命体は、フルートにも似た音色を発しながら暗闇の中で横たわっている。

　ピシッと、心のどこかで罅ひびが入る。全身から力が抜け落ち、二人はどちらからともなく地面にへたりこむと、つんざくような悲鳴を上げた。それは洞窟内の壁かべという壁に反はん響きようし、半ばトランス状態で祈りを捧げていた者たちが一いつ斉せいに顔を向けてきた。

　ライカは顔を引きつらせ、リューガは崩くずれ落ちそうなほど体を震ふるわせていた。本能が逃にげろと警告していたが、体が動かない。完全に腰こしが抜けていた。生命いのちにかかわるほどの窮きゆう地ちに立たされているという事実にライカは慄りつ然ぜんとした。

　神父、そして町の住人たちは、体を不規則に揺ゆらしながらライカたちの下もとへと近づいてくる。彼らの顔は能面のようで、精気も欠落していた。まるで傀儡くぐつである。

（こんなことなら……来るんじゃなかった）

　後の祭りだが悔くやんでいる場合ではない。今は現状を打破せねばならなかった。ライカとリューガは地面に腰を落としたまま後ずさるが、じわりじわりと彼らとの距きよ離りは詰つまってくる。

　もう駄だ目めかもしれないと、リューガの体を抱だきしめたときだ。

　カツンカツンと、背後から乾かわいた足音が響いてきた。現れたのは見知らぬ中年の紳しん士しである。仕立ての良い白のスーツに身を包んだ彼の姿は、明らかに場ば違ちがいな印象だ。外がい套とうをまとっているせいか貴族のようにも見え、右手に持ったデザイン重視のか細いステッキが彼の優ゆう雅がさに華はなを添そえている。

彼は口元に笑えみを浮うかべながらライカの側そばまで歩を進めると、神父たちへと目を向けた。

「これはこれは、変わったお出で迎むかえだなあ。お邪じや魔まだったかな？」

彼は調ととのえられた顎あご鬚ひげをなでつけながら苦く笑しようする。この異様な状じよう況きようにも動じる様子もなく、ごく当たり前の光景として受け入れているような感じだ。

「いやはや、これがユールの儀式とは。まったくもってして悪あく趣しゆ味みだとは思わないかね？」

男は臆おく面めんもなく言ってのけると、ステッキの先で地面を軽く叩たたいた。

その途と端たん、地面に亀き裂れつが生じ、大きく左右に裂さけ始める。

突とつ然ぜん、大きく口を開けた地面に、神父、そして町の住人たちは次々と飲みこまれていく。彼らは悲鳴を上げることもなく、折り重なるようにして地中深くへと消えていった。

ライカはその様子を呆ぼう然ぜんと見守っていた。なにが起きたのか、まるで理解できない。

「さてさて。邪魔者もいなくなったかな？　これでやっと、やっと話ができるというものだ」

男はライカへと向き直ると、彼女の手を取って一方的に握あく手しゆを交かわした。

+

ライカが冷静さを取り戻もどしたとき、神父、そして住民たちは残らず姿を消していた。

調子の狂った調べを奏かなでていた不定形の生命体も、どこかへ

と消え失うせている。残されたのは勢いを失っていく緑色の火柱とライカたちだけだった。

「ライカ・クルセイド。私は君を、そう、君を迎えにきたのだよ」

　暗く、静まりかえった洞窟内に、男の穏おだやかな声が響き渡わたる。

「私を？　どうして!?」

「それは、それはとても簡単な理由だよ。私が君を必要としているからだ。君の力を私に貸してほしい。どうだね？　悪いようにはしない。約束しよう」

（私の力……？）

　思い当たるのは、自分が忌いみ嫌きらっている不可思議な能力だけである。

「君の力は魔ま力りよくと呼ばれるものだよ。私が使ったのも同じものだ。神が与あたえたもうた天てん賦ぷの才と言ったところかな？」

「……」

「不安かね？　なに、怖こわがることはない。君と私は同じ力を持つ者同士。仲間―いや、家族みたいなものではないかね？　そうだ、そうだとも。家族だとも。それに私の施し設せつには、君と同じ能力を持つ女の子たちが何人もいる。辛つらい目に遭あってきたのだろう？　もう、二度と苛いじめられることもない」

　彼の話はライカを驚きよう愕がくさせた。自分と同じような力を持つ者がいるとは思わなかったからだ。ライカは素す直なおに嬉うれしく思ったが、同時に得体の知れない不安感をも感じていた。

　今まで会ってきた大人の中で、彼は誰だれよりも優やさしい。だがその瞳ひとみの奥に見え隠かくれする暗い気配をライカは見み逃のがさなかった。

　とは言え、このキングスポートが呪のろわれた町であるということを知った以上、ここに居続けるわけにはいかない。だとしたら仲間と暮らしたほうが、まだ幸せになるのではないかとライカは考え

た。

　彼にどんな思おも惑わくがあるにせよ、必要とされるだけマシだと彼女は思う。十年にも満たない短い人生の中において、必要とされたことなどなかった。衣食住に困らず、しかも自分と同じ境きよう遇ぐうの子供たちと暮らせるのであれば、ここに止とどまる理由などない。なにより生きやすかった。

（けど……）

　彼は君を迎えにきたと話していた。つまりリューガは頭数に入ってはいないのである。そのことに気づいているらしく、彼は酷ひどく狼ろう狽ばいしていた。ライカとしてもリューガを残して施設に行くわけにはいかない。だからライカは男に一つの提案をした。

「リューガと一いつ緒しよなら……。ダメですか？」

　ライカが問いに男は顎鬚を愛めでながら思案顔をすると、リューガへと目を向けた。彼はリューガを凝ぎよう視しし、なにやらブツブツとつぶやいたあと、彼女へと向き直った。

「よろしい。二人とも私が面めん倒どうをみよう」

+

　その男が管理する施設は、病院のような外観をしていた。

　周囲に民家はなく、地平線すら確かく認にんできるほどの広大な土地の真ん中に建つ白い建物は、実際、病院に似ている。内部は水を打つ静けさで、汚けがれを知らぬ神聖な気配にくるまれている。空気はひんやりとしており、森林の中にでもいるかのような爽そう快かいさがあった。

　なにより特とく徴ちよう的なのは白という色である。白を基調とした清潔な外がい壁へきと内壁、白大理石の床ゆかには塵ちり一つ落ちてはいない。

　見み渡わたす限かぎりの白、白、白──。

それはあまりにも眩まばゆく、ライカは思わず目を細めてしまう。

ライカとリューガに宛あてがわれた部屋も白一色だった。白い壁かべ、白い床、白い天てん井じよう、白いベッド、白いシーツ、白いカーテン。ありとあらゆる物が白一色で統一されている。ライカとリューガも白いスモックを着せられ、二人を部屋に案内した研究員も白衣を身に着けていた。

そこにはライカを蔑さげすみ、畏い怖ふし、好こう奇きな視線を送ってくる者はいない。なにもなさすぎて落ち着かなくなるほどだ。部屋は極きよく端たんなほど無機質であり、外的な刺し激げきが欠落しているせいか感情が起き伏ふくしない。心は限りなく落ち着いていたが、良くも悪くも平へい坦たんになっていた。

「思ってたところより、いいところみたいだ」

リューガは少し警けい戒かいしながら室内を見渡している。

ライカは彼の姿に微び笑しようしながら、穏やかな光が射さしこんでくる窓辺へと向かう。

錠じようを外して窓を開けた彼女は、すぐに自分たちの扱あつかいに気がついた。そこに鉄の格こう子しがはめこまれていたからである。ご丁てい寧ねいにも、それにまで白の彩さい色しきが施ほどこされていた。

白い牢ろう獄ごく。そんな言葉がしっくりとくる感じだった。

ライカは溜ため息いきを漏もらすと、気を取り直して窓の外へと目を向ける。施設の四階に位置するその部屋からは、圧あつ倒とうされるほどの広大な大地を眺ながめることができた。

だが、そこにさえ白い世界は広がっている。降り積もった雪が景色を銀世界へと変えていたからだ。ただキングスポートとは違ちがい、その雪は光り輝かがやく陽光を受けて煌きらめいていた。

見上げると、そこには雲一つない抜ぬけるような青空が広がっている。

「綺き麗れいだなぁ……」

ライカは素直な気持ちを吐と露ろすると、憧あこがれにも似た眼まな差ざしを青空へと送った。

+

ライカとリューガは三人の少女に引き合わされた。

歳としは七、八歳くらいで、ライカと同年代の女の子たちである。施設の職員に説明されるまでもなく、ライカは彼女たちが何者かを理解した。直感でしかなかったが、少女たちから自分と同じ暗い気配を感じたのである。そして数日後、新たに三名の少女が仲間に加わることになる。

七人の少女たちは不可思議な能力を有していた。その能力は様々で、千里眼や発火能力など、強力ではないにしろ忌き諱いされる力を持っていたのである。もっともそれだけで、あとはどこにでもいるような普ふ通つうの少女たちだった。

子供たちはすぐに打ち解けた。同じ運命を背負った彼女たちである。仲間意識が芽生えるのは当然の成り行きだった。

施し設せつの職員たちによる教育が始まったのは、それからすぐのことである。

算数や国語などの一いつ般ぱん的な学習は当然として、カードの絵え柄がらを当てるテストや様々な紋もん様ようが現れては消える奇き妙みような映像の視し聴ちようなど、解げせないテストや訓練もあった。やることは意外に多く、肉体的な負担もそれなりにあったが、挫くじけるほどでもなかった。苛いじめられたりすることもなく、それどころか過か剰じようとも思えるほど大事に扱われていたのである。それこそ入院患かん者じやのように──。

午前中のカリキュラムを消化したライカがベッドで微睡まどろんでいたときのことだ。

「……ライカ。ほら、起きて」

体を優やさしく揺ゆさぶられたライカは、ゆるやかに現実世界へ

と引き戻もどされていく。

　ゆっくりと瞼まぶたを開くと、そこには幼い少年の顔があった。リューガである。ライカは小さな欠伸あくびをすると、上半身を引き起こした。少しだけ眩暈めまいを感じるのは、午前中に受けた投薬が原因だろう。それはリューガも同じはずだったが、彼は健康そのものだった。

「こんなにいいお天気なのに、いつまでも寝ねてたらもったいないじゃないか」

　リューガはニコリと笑うと、格子がはめこまれた窓へと目を向けた。

　窓からは穏おだやかな午後の日差しが射さしこんでおり、そこから微かすかに緑の匂においが漂ただよってくる。

　ライカはリューガに笑えみを返すと、彼と一いつ緒しよに窓辺へと足を運んだ。

　眼前に広がる白以外の世界。

　地平線の彼方かなたまで続く一面の緑の絨じゆう毯たん。

　そして―。

「ほら、ライカ。見てごらんよ。綺麗な青空だよ……」

　リューガは満面の笑みを浮うかべると、上空を指差した。青く澄すみ渡わたる空には雲一つ存在せず、まだ見ぬ大おお海うな原ばらをライカに連想させる。すべてが白に閉とざされたこの世界において、あの青空はなによりも鮮せん明めいだ。ライカとリューガは飽あくことなくそれを眺め続けた。

「いいなあ……」

　リューガは目を輝かがやかせると、溜め息とともに言葉を紡つむぎ出した。彼の視線の先を追いかけていくと、青空の中、小鳥が自由気ままに飛び回っていた。リューガが憧れる気持ちはライカにも解わかる。なにものにも束そく縛ばくされない真の自由がそこはあった。

（いつか……いつか、ここを飛び出せるかなあ？）

　自由を手に入れることができるだろうかと、ライカは思う。だが積極的に行動を起こすことはないだろう。そのような勇気はない。籠かごの中の鳥にできることなど限られている。この閉ざされた世界の中で生き続けるしかないのだと、ライカは確信に近いものを抱いだいていたのである。

+

　月日が流れるにつれ、ライカたちの生活に変化が生じ始めた。

　その最たるものはカリキュラムである。当初は同じカリキュラムを受けていた子供たちだが、個々の適性に合ったカリキュラムが組まれるようになっていたのだ。

　ライカは射しや撃げき場にも似た広いスペースにいた。所定の位置に立って身構えると、前方から人ひと形がたをしたベニヤ板が五枚、起き上がる。急所部分にターゲットが描えがかれているその板は、射撃訓練用に用いられるものだった。

　右みぎ腕うでを前方に差し出したライカは、掌てのひらに意識を集中させていく。そのときだ。ターゲットの頭や心臓など、致ち命めい傷しようとなる箇か所しよに穴が開いた。五枚同時に、である。再び人形のベニヤ板が出現する。今度は男の形をしたものが三枚に女の形をしたものが二枚だ。再びライカが意識を集中させると、男の形をしたベニヤ板に風穴が開く。

「よし、そこまで！　試験体４号、部屋で休んでもいいぞ」

　白衣を着た研究員の合図で、ライカは体から力を抜ぬく。

　試験体４号。それが施設内でのライカの呼こ称しようだった。試験体５号はリューガである。他ほかの少女たちにも番号がふられ、名前で呼ばれることはめったになかった。

　ライカたちは待たい遇ぐうの良いモルモットでしかなかったのである。

+

今日も空は陰かげることなく、無限とも思えるほどの深く澄んだ青空が広がっている。

午前中のカリキュラムを終えたライカとリューガは、施設内にある中庭へと足を運んでいた。

テニスコートほどの広さがあるその庭には芝生しばふが一面に敷しき詰つめられており、柔やわらかな午後の日をいっぱいに浴びて青々とした葉を茂しげらせている。木々や草花、そして中央には小さいながらも池が備えられており、庭として十分すぎるほどの機能があった。

ライカは木こ陰かげに腰こしを下ろすと、リューガへと目を向ける。彼は竹ひごに紙を貼はりつけただけの簡素な飛行機を手にしており、それをゆっくりとしたモーションで前方へと押し出した。

飛行機はリューガの周囲を旋せん回かいしたあと、風を捕つかまえて上空へと舞まい上がっていく。それは緩ゆるやかだが、しかし確実に青空へと向かっていった。

ライカとリューガは、その姿を羨せん望ぼうの眼まな差ざしで眺ながめ続ける。意識は飛行機と同化し、それと一緒に大空を自由に羽ばたいていく。どこまでも、どこまでも──。

「ほら、うまくいっただろ？」

リューガは飛行機から目を外すと、ライカへと向き直った。彼の表情には達成感のようなものが浮かんでいる。

「うん。すごいねえ……。あんなに高くまで……」

少しだけ身を乗り出し、手をかざして空を見上げる。リューガが解き放った飛行機は、もはや点のようにしか見えなくなっていた。

リューガは器用だ。あの紙飛行機も彼の設計である。初めは研究員が用意した模型飛行機を組み立てて満足していた彼だが、すぐに

物足りなくなって自分で設計し始めたのである。市し販はんのキットを徹てつ底てい的に研究した結果があの飛行機であり、実際、それよりも数段、高性能だった。

（やると決めたら絶対に実現させちゃうからなあ……）

　飛行機はさらに高度を増し、やがては太陽と重なり合っていく。そして、その姿を消した。

　もう二度と戻もどってくることはないというのに、ライカとリューガの表情は妙みように晴れやかだ。それは自分たちの代わりに自由を得たものへの喜びの表れだった。

「作り方次し第だいで、あんなに高く飛べるんだ」

　誇ほこらしげなリューガの表情がライカには眩まぶしい。

「だから、きっとぼくたちだって簡単に飛べるんだと思う。そうさ。きっと飛べるんだ！」

　力強くうなずくリューガの姿を、ライカはまじまじと見つめた。

「……リューガ？」

「空から見下ろしたら、きっとこの施し設せつも小さく見えるんだ。そのとき、ぼくたちはあんなちっぽけな場所で、ちっぽけなことで悩なやんでたんだなあって、きっとバカらしく思うに決まってる」

　リューガはさらに続ける。

「だから、なにも辛つらいことなんかないんだ。そうだろ？」

　ライカは口に手を添そえると、目を大きく見開いた。

（気づいてたんだ……）

　リューガは見通していたのだ。彼女の苦しみや悲しみを。この施設を毛け嫌ぎらいし、憎にくんでいることを。ひた隠かくしにしてきたはずだったが、ちゃんと承知していたのである。

　ライカは目元が熱くなるのを感じたが、かろうじて涙なみだは零

こぼさずにすんでいた。

「それが正しいって証明するために、いつかあの青空へつれていくよ」

　リューガはライカに微笑ほほえみかけると、再び青空へと目を向ける。

「いつかぼくが、ここからつれ出してみせるから。空へとつれていくから……」

　夢見るようなリューガの瞳ひとみに青空が映りこむ。そこには強きよう靭じんな意志が感じられた。

「―約束するよ」

　リューガの心は遥はるか彼方かなたへと向かい、大空を優ゆう雅がに飛び回っているかのようだった。

+

　大事件が勃ぼつ発ぱつしたのは、施設に来て三、四年ほど経たったときのことだった。

　一部始終を目もく撃げきしたわけではない。待機を命じられたライカは部屋から動けず、すべて憶おく測そくの域を出なかったのだが……。彼女はそのすべてを正しく理解していた。

　ムーンチャイルド計画。男が進めているプロジェクトの名めい称しようであり、人間と魔ま導どう兵器を融ゆう合ごうさせ、超ちよう戦士を造り上げる計画だった。もっともそれは表向きであり、実際は『Ｃ計画』の要かなめであるＣの巫み女こを造り出すための計画だったのである。その証しよう拠こに、施設に集められた子供たちは全員少女だった。神に捧ささげられる生いけ贄にえは、例外なく乙女おとめなのだ。

　そしてＣの巫女に選ばれたのが試験体１号の少女だった。彼女の適性調査のためにＣ、すなわちクトゥルーとの接せつ触しよく実験

が行われたのである。それは来きたるべきクトゥルーとの融合に備え、選出したＣの巫女に邪じや神しんの念波を浴びさせ、感応力を強化するための実験だった。

その日、施設は異様な雰ふん囲い気きに包まれていた。ライカたちが住む居住区は何事もなかったが、別べつ棟むねにある研究室からただならぬ空気が漂ただよってきたのである。

それだけではない。研究員の悲鳴や怒ど号ごう、鳴りやまない銃じゆう声せい、立て続けに聞こえてくる爆ばく裂れつ音と破は砕さい音―。術式が紡つむがれていくのも解わかった。それは試験体１号が編み上げる、世界を混こん沌とんへ導く破は滅めつ的な術式だった。

ライカは部屋の隅すみで縮こまると、目を閉じ、耳を塞ふさいで嵐あらしが過ぎ去るのをひたすら待った。

だが五感を遮しや断だんしようが、それを凌りよう駕がする超感覚が彼女に状じよう況きようを逐ちく一いち報告してくる。その度たびにライカの心は病やみ、傷つき、冒おかされていく。彼女に施ほどこされた実験の数々が瞬しゆん時じに状況を把は握あくさせ、知りたくもない情報を与あたえ続けたのである。

試験体１号はクトゥルーがもたらした圧あつ倒とう的な神気に耐たえられずに暴走していた。Ｃの巫女として調整された彼女にして、この有様なのである。ライカは実験の恐おそろしさ、そして自らが置かれた境きよう遇ぐうに戦せん慄りつし、嘆なげいた。

（こんなことになるなら……。教会で暮らし続けていたほうがよかった）

だが後あと戻もどりなどできないし、それが許されることもないだろう。

時間にして一時間ほどで試験体１号の暴走は収まったが、施設内の一部は瘴しよう気きと邪じや気きで汚お染せんされつくし、隔かく離りされた上に封ふう印いんを施されていた。

結局、試験体１号を止めるために研究員および警備兵が数十人ほど犠ぎ牲せいになったのである。

もちろん、その事実はライカたちには知らされない。試験体１号

は事故死したとだけ伝えられ、翌日には普ふ段だんどおりのカリキュラムが始まっていた。

それは精神的、魔ま術じゆつ的、霊れい的、さらに他ほかの要素が複雑に絡からみあったデリケートな構造を持つ試験体に、無用な不安を与えぬためである。研究員が過か剰じようとも思えるほど子供たちを大事に扱あつかった理由はそこにあった。

（いつか私も彼女みたいに……）

心を失い、狂きよう気きに支配されたまま、まるで物でも扱うかのように処分される。試験体１号が失われた以上、次のＣの巫女が少女たちの中から選ばれるのは確実だった。それがいつ行われるのか、誰だれが選ばれるのか──。

ライカたちは恐れおののきながらも逃にげる術すべを知らず、また施設の外で生きる術も知らないまま緩ゆるやかに絶望していった。

それから数年後のことだ。

ライカがＣの巫女の候補として選ばれたのは──。

+

リューガが戦せん闘とう訓練を行っていたとき。彼の耳にあの男の声が聞こえてきた。

「そうか。そうだな。やはりＣの巫女には試験体４号を充あてることにしよう。あの娘むすめは優ゆう秀しゆうだ。きっと、きっと私の期待に応こたえてくれるだろう」

それは男と研究員の密議だった。

（ライカをＣの巫女に!?）

それは彼に数年前のおぞましい出来事を想起させた。

試験体１号の暴走──。

彼女が極ごく秘ひ裏りに処理されたことは、施し設せつにいる子供なら誰もが知っていることだった。

（冗じよう談だんではない。あんなおぞましいことに、ライカをかかわらせてたまるか！）

少年の面おも影かげを残してはいるが、今や立派な青年となったリューガは、その顔を苦痛と怒いかりで歪ゆがめた。弱々しかった少年の姿はそこにはない。流線型のしなやかな肉体には無む駄だな筋肉など一つもなく、すべてが緻ち密みつな計算に基もとづいた完かん璧ぺきなものだった。

（あの恐きよう怖ふに彼女を晒さらさせてなるものか！　恐怖の彼ひ岸がんに彼女を渡わたらせてたまるか！）

リューガは唇くちびるをかみしめる。鮮あざやかな赤い液体が、彼の口の端はしを伝っていく。

（オレは……オレは許しはしないぞ。この白い世界の背信を！）

心が黒い感情で支配されていく。

（オレの力も、そしてこの施設も、ライカを守るために存在する。ただそのためだけに、オレは牢ろう獄ごくのようなこの白い世界を受け入れたのだ）

その施設がライカに対して牙きばを剝むこうとしていた。

（だとしたら、もはやこの世界に価値はない）

リューガは拳こぶしを握にぎりしめる。体の芯しんは紅ぐ蓮れんの炎ほのおのごとく熱くなり、狂気にも似た感情が芽生え始めていた。瞳ひとみには凶きよう暴ぼうな光が宿り、口元には凄せい絶ぜつなまでの笑えみが貼はりついている。そこには人間性の片へん鱗りんもない。凶暴な獣けものである。

「世界のすべてを破は壊かいしてでも、オレはライカを守ってみせる。そしてあの日の約束──そう、あの誓せい約やくを果たそう。天上に広がる無む窮きゆうの青空の下もとに、オレたちはたどり着くのだ」

リューガは夢想する。ライカの手を取り、大空へと飛び立つその瞬しゆん間かんを。

「ライカ。一いつ緒しよにここを出ていこう。約束どおり、あの青空につれていく」

そう決意した瞬間、リューガは走り始めていた。

+

ライカは廊ろう下かを全速力で走って一いや、走らされていた。

彼女はリューガに腕うでを引かれており、白一色で染め上げられた廊下を限界以上の力で疾しつ駆くしている。

リューガは跳はねるような感じで先へ先へと走っていく。その動きに迷いはなく、それが定めだとでも言わんばかりに一心不乱に走っている。

静せい寂じやくに包まれていた廊下に警報音が鳴り響ひびいた。等とう間かん隔かくで設置されている赤色灯が灯ともり、明めい滅めつを始める。途と端たんに辺りは騒さわがしくなり、あちらこちらから足音が近づいてくるのが解わかった。

（……苦しい……）

全力を超こえたレベルで走り続けているせいか、ライカの心臓は早はや鐘がねのごとく打ち鳴らされており、今にも暴れ出しそうだった。胸が切り刻まれそうなほど痛んでいる。意識が遠ざかっていくのをライカは感じていた。

一ライカ。一緒にここを出ていこう。約束どおり、あの青空につれていく。

部屋に駆かけこんできたリューガは、啞あ然ぜんとしているライカの手を取り、そう告げたのである。

（私がＣの巫み女この候補に選ばれたことを……）

だからこそ、リューガは行動に移ったのだろう。それ以外、考えられなかった。

息が切れている。足はもつれ、転んでしまいそうだ。もはやどこを走っているのかさえ判らない。

警報音は激しさを増し、血を想起させる赤色灯が、心的な圧あつ迫ぱく感かんを強めていく。

前方から武装した数名の警備兵が走ってくる。彼らはライカとリューガの前に立ちはだかると、肩かたに担かついでいたマシンガンを構えた。

「止まれっ！　４号！　５号！」

警備兵が引き金に指をかける。

リューガは立ち止まり、ライカはその場でへたりこむ。

彼は獣じゆう性せいを剝き出しにし、挑いどむような目つきで警備兵を睨にらみつけた。体からは洗練された激しい闘とう気きが湯気のように立ち上っている。

「邪じゃ魔まだっ！」

リューガは身構えると、床ゆかを蹴けり飛ばして走り出す。

一瞬で警備兵の前へと移動した彼は、凶きよう器きと化した拳で次々と彼らを倒たおして──いや、殺害していく。彼の拳は警備兵の頭部を粉ふん砕さいし、胴どう体たいを突つき破やぶり、肉にく片へんや内臓を周囲へとぶちまけていった。辺りは血の海と化し、塵ちり一つなかった白い廊下は汚お物ぶつで汚よごれていく。むせ返るほどの血の臭においが廊下内を満たし、それを吸いこんだライカは吐はき気けを堪こらえきれずに吐いていた。

「行こう、ライカ」

リューガは全身に血の飛沫しぶきを浴びていた。その顔には凄絶なまでの笑えみが浮うかんでいる。彼はライカの前へと歩を進めると、血で染まった右手を彼女に差し出した。

「つれていくよ。あの青空へ」

リューガは怯おびえるライカの手を取ると、力任せに引き起こした。

再び二人は走り出す。廊下を疾しつ走そうし、階段を駆け下り、立ちふさがる敵はリューガが片かたっ端ぱしから始末していく。

そんなことを繰くり返しているうちに、前方に出口が見えてきた。不思議なことに警備兵は配置されておらず、物理的にも呪じゆ術じゆつ的にも強固な扉とびらは開け放たれている。

（おかしい。なにかある……）

嫌いやな予感がしたが、心が麻ま痺ひしているのか深く考えることができなかった。

二人は光で満ち溢あふれている扉を潜くぐり抜ぬけ、外へと飛び出す。

だが―。

「えっ……!?」

ライカは声を失った。

雲一つない澄すんだ青空の下、無数の兵士が待機していたのである。

彼らは銃じゆう器きを手にしており、対魔ま術じゆつ用に特化した装備で身を固めていた。しかも彼らの背後には装そう甲こう車まで配備されており、そこはさながら戦場だった。

（私たちのために、こんなにも大勢の人が……）

だが、体に施ほどこされた数々の実験や訓練のことを考えると、その配備も当然なのかもしれない。

警備兵たちの前には白いスーツに身を包んだ男性が立っていた。彼は溜ため息いきをつきながら顎あご鬚ひげをなでつけた。

「やれやれ、いったいどこへ。どこへ行こうというのだね、ここを出たところで、君たちが生きていける世界などありはしないのに」

　彼は動どう揺ようすらせず、いつもと変わらない穏おだやかな笑みを浮かべている。その姿に腹を立てたのか、リューガは牙きばを剝むき出しにして彼を睨みつけた。

「おまえはオレたちを裏切った！　許さない」

「裏切った？　裏切ったとは!?　なんだね、藪やぶから棒に。私が、この私がなにを裏切ったというのだね？　なにが気に食わないのだ」

「うるさいっ！　もう、ここに用はない。オレたちは出ていく。邪魔するなら──殺す」

「やれやれ。難しい年とし頃ごろだなあ」

　男は苦く笑しようすると、肩をすくめた。

「しかし、しかしだ。君たちの悩なやみを聞いてあげられるほど時間的な余よ裕ゆうがあるわけでもないのでね。どれどれ。みんな、少し彼らにお灸きゆうを据すえてやってはくれないかね」

　彼が指をパチンと鳴らすと、警備兵たちは一いつ斉せいに行動を開始する。彼らは手にした銃を構えると、その引き金に指をかけた。

「やれるものなら、やってみろ！」

　リューガは吠ほえるのと同時に行動を開始する。

　その場から姿を掻かき消した彼は、次の瞬しゆん間かんには警備兵たちの直ただ中なかにいた。目にも留まらぬとはこのことで、実際、彼らはリューガの動きを認にん識しきすることすらできなかったはずである。

　警備兵の頭はリューガによって次々と割られ、赤く濡ぬれた華はなを開花させていく。

「ほう。これはこれは」

　男が意外そうな表情をしている間にも、リューガによる一方的な虐ぎやく殺さつは続けられていた。血ち飛沫しぶきが上がり、青空は瞬またたく間まに赤く染まっていく。

（私は……私は、こんな色の空にたどり着きたかったわけじゃない……）

　そのときライカはリューガに怯え、嫌けん悪おしていた。ためらうことなく人を殺し続ける彼に対して恐きよう怖ふを感じていたのである。

「素す晴ばらしい！　素晴らしいぞ、試験体５号！　君はもののついでの軽い実験のつもりだったのだが、なかなかどうして。興味深い。興味深いぞ、試験体５号！」

　彼は手を叩たたきながら絶賛する。

「おまえも砕くだけろ！」

　リューガは叫さけぶと、悠ゆう然ぜんと構える男へと襲おそいかかっていく。リューガは無防備な彼へと拳こぶしを突き出した。それは絶対的な破は壊かい力りよくを秘ひめた必ひつ滅めつの一いち撃げきであり、彼の胴体に風穴が開く──はずだった。だがリューガが放った拳は、男が手にしているステッキの先せん端たんで受け止められてしまう。

「おっと、危ない危ない」

　彼は事もなげに言うと、ステッキでリューガの拳を軽くいなした。

「しかし、しかしだ。無む鉄てつ砲ぽうなところが、まだまだ若いな」

　男はステッキの先でリューガの胸を軽く突ついた。

　たったそれだけのことだったが、彼は軽く百メートルほど吹ふき飛び、地面の上で何度もバウンドしながら転がっていく。

「ぐっ……！　く、クソがっ!!」

　常人なら即そく死ししてもおかしくはない衝しよう撃げきにもかかわらず、リューガは立ち上がってきた。だが体は不規則に揺ゆれており、膝ひざは笑っている。身構えてはいたが、それすらもやっとであるのは一いち目もく瞭りよう然ぜんだった。

「我が儘ままはこのへんにして、私の下もとへ帰ってきてはどうかね？　なあ、ライカ？」

　突とつ然ぜん、話を振ふられたライカは、びくんと体を痙けい攣れんさせる。

「ここを出たところで、君たちが生きられる世界などないよ。そのことは君たちが、そう、君たちが一番よく知っているのではないかね？　君たちは人間ではないのだから。君たちは魔ま人じんなのだから。そうとも。君たちは在るだけで悪なのだよ。生きているだけでも罪なのだ。そうだろう、ライカ？」

「あ……あああああっ……」

「さあ、帰ろうではないか。悪人たちの園そのに。愛いとしき我が家に！」

「耳を貸すな、ライカ！」

　どこにそのような力が隠かくされていたのか、リューガは再び男へと襲いかかった。

　だが結果は先ほどと同じである。男はステッキでリューガの攻こう撃げきを受け止めると、彼の体をはねのけてしまう。

「オレたちが生きる世界がないというのなら、それでもかまわない。オレたちを認めない世界なら壊こわしてしまうまで。壊して壊して壊しまくって真っ平らにして、すべてをなくしてしまえばいい。なんら問題はない」

「それができるのはＣ計画だけだよ」

　男はさらりとつぶやく。

「くだらない」

　リューガは吐はき捨てると、右手を天にかざし、左手を地に下ろす。天地上下の構えである。

　その途と端たん、大気が、そして大地が震ふるえ始めた。

　空気が激しく振しん動どうしている。溢あふれ出した力が渦うず

を巻き、リューガの周囲の空間を歪ゆがませた。

「素晴らしい。本当に素晴らしいぞ。試験体５号。ムーンチャイルド計画の意図からは外れてしまうが、君が見せてくれた結果は実に有意義なものになりそうだ」

「いや、死人には関係ないものだろうさ！」

　リューガは大地を蹴けり、疾しつ風ぷうと化して男へと迫せまる。彼は拳を振り上げると、極限にまで高められた力を解放させた。

　全身全ぜん霊れい、生命力すら削けずり取って放たれた必滅の一撃は、男の体を灰かい燼じんに帰すはずだった。だがリューガの拳は彼には届かず、突然、二人の間に発生した爆ばく砕さいによって阻はばまれてしまう。

　とてつもなく強大で巨きよ大だいな質量を持ったなにかが、前まえ触ぶれもなく頭上に出現する。

　そしてそれが空間にもたらした反動は衝しよう撃げき波はへと変わり、圧縮された空気の塊かたまりがライカへと襲いかかってきた。彼女の体は軽々と宙を舞まい、地面へと叩きつけられた。激しい衝撃に体が悲鳴を上げ、口から呻うめき声が漏もれる。

　だが今は自分の身よりもリューガのことが心配だった。ライカは地面から体を引き起こすと、爆ばく心しん地ちへと目を向ける。

　そこから少し離はなれたところにいた彼女でさえ酷ひどい有あり様さまだ。中心部にいたリューガの身に降りかかったであろう悲劇は想像を絶する。魔導兵器となるべく訓練されてきたとはいえ、あの衝撃に耐たえられるとは思えなかった。

　ライカの胸中で最悪の事態が想定されていく。不安感が心を蝕むしばみ始め、体が震え出した。

「リューガ……」

　爆心地へ目を向けようとしたライカは、頭上に浮うかぶ巨大な影かげの存在に気がついた。それは蜘蛛くもにも似た円えん盤ばん形の巨大な鋼鉄の塊だった。胴どう体たいからは四本の脚あしが伸のびているが、それを脚と呼べるかどうかは疑問が残る。ちょっとし

たマンションほどの大きさがあるからだ。全身を考こう慮りよに入れると、その大きさは計り知れない。

「な……なんなの、これ……」

　その人ひと形がたの鋼はがねは神気のごとき圧あつ倒とう的な存在感と重圧を地上へと放っており、ライカの体はごく自然に震えていた。思わずその場で平へい伏ふくし、許しを乞こいたくなるほどである。

「これは神だよ。機械仕じ掛かけの神。そう、鬼デウ械ス・神マキナだ」

「鬼械神？」

「そう。そうだ。【エイボンの書】によって召しよう喚かんする私の鬼械神。これがサイクラノーシュだ」

　男は耳みみ障ざわりな笑い声を発すると、両りよう腕うでを左右に広げた。

「どうだ。どうかな？　素晴らしいだろう？　これが魔ま術じゆつ師しの力、これが魔導書の力なのだよ。残念ながら、まだ使いこなせてはいないが……。だが、私はこの程度では終わらんよ。ムーンチャイルド計画の成果が認められれば、私はアンチクロスの地位を得て獣けものの頭──そう。ウェスパシアヌスを名乗ることができる。さらなる位階クラスへ、さらなる境地へ。そしていずれは、いずれは大グラ導ンドマ師スターを、マスターテリオンを……。そのためには君たち、そう、君たちの力が必要なのだよ。解わかるね？　解ってくれるね？　ライカ。我が娘むすめよ」

　男の目が酒気でも帯びているかのような陶とう然ぜんとした色に染まる。顔は愉ゆ悦えつのためか醜みにくく歪んでおり、その卑いやしい姿は目を覆おおわんばかりだ。そこにいるのは人間ではない。人間の皮をまとった邪じや悪あくだった。

　ライカは泣き出したくなるのを必死に堪こらえていた。平静を保つことができない。もはや恐きよう慌こう状態に近く、心の中は攪かく拌はんされたかのようにグチャグチャだった。ライカは頭を掻かきむしると、救いを求めるかのようにリューガへと目を向ける。

「あっ……あああああっ……」

　ライカの口内から喘あえぎとも呻きとも取れる声が漏れた。リューガは爆心地でうつぶせに倒たおれており、ピクリともしない。生きているのか、それとも死んでいるのか……。どちらにせよ、致ち命めい傷しように近いダメージを被こうむっているのは間ま違ちがいない。彼を中心に円形に広がっていく血液の量は尋じん常じようではなく、リューガはその中で溺おぼれているかのようだった。

「気になるのかな？　弟が気になるのかな？　まあ、あの程度で死ぬとも思えんし、死ぬようでは私自身の研究にも影えい響きようするというものだが……。さてさて。どうしたものかな」

　男は鬚ひげをなでつける。

「これ以上、おいたをされてはかなわないし、どうする？　なあ、ライカ。このまま始末したほうがよいと思うかね？」

　ライカは目を見開くと、わなわなと体を震わせた。

　男は彼女に問うてはいたが、その実、ただの脅おどしでしかない。だが今のライカに抗あらがう術すべなどなかったし、その気力も残されてはいなかった。

「私は賢かしこい子が好きなのだよ。君なら私の気持ちを察してくれると思うのだが。違ちがうかね？」

　決定的だった。ライカには、もはやどうすることもできない。

（私はリューガとは違う。戦えないし、そんな勇気もない……。おしまいだ。なにもかも）

　ふとライカの頬ほおを涙なみだの滴しずくが伝った。

（青空なんか、なかったんだ……）

　ライカに残されていたのは閉とざされた白い世界―白い牢ろう獄ごくだけである。

+

脱だつ走そう劇げきから数ヶ月の時が流れた。

施し設せつへと連れ戻もどされたライカだが、罪に問われることもなく、今までと同じような扱あつかいを受けていた。リューガがどうなったのか定さだかではないが、死んではいないようだ。姉きよう弟だいの絆きずなか、それとも魔ま導どう兵器としての性能なのか、施設内のどこかで幽ゆう閉へいされていることが感覚で理解できた。

まるで何事もなかったかのような日々が再び始まるかのように思われたが、決定的に変わったことがある。ライカに課せられたカリキュラムだ。彼女は当初の予定どおりＣの巫み女ことなるべく調整され始めたのである。

ライカの体に施ほどこされていく方術、そして施せ術じゆつの数々。

感応力に特化した結果、暴走、処分された試験体１号の教訓を活いかし、精神の侵しん略りやくを防ぐ術式を何重にも重ねていく。

それはライカの心に被かぶさる薄うすい膜まくのようなものだ。一つ術式を重ねるごとに、彼女の心は閉ざされていった。そして三十三もの術式を重ねた結果、ライカの自じ我がは封ふう印いんされてしまう。

だがライカにとっては好都合だった。空うつ蝉せみの世界は彼女にとってつらいことばかりである。だとしたら己おのれの殻からの中に閉じこもっていたほうが、まだ心は平和だったのである。

＋

心を閉ざしたライカは、今日も手術台の上で白い天てん井じようを眺ながめていた。

その部屋は研究棟とうにある手術室の一つである。部屋の外には数人の研究員が強化ガラスの向こう側からライカの様子をうかがっ

ていた。

　ライカは目を開けてはいたが、そこにはなにも映してはおらず、金茶色の瞳ひとみは陰かげって色を失っている。表情はなく、呼吸に合わせて胸が微かすかに上下しているだけで身じろぎ一つしない。

　研究員が新たな術式を施そうと作業を始めたときだ。

　突とつ然ぜん、けたたましい警報音が鳴り響ひびいた。

　赤色灯が激しく明めい滅めつを繰くり返し、周囲はにわかに騒そう然ぜんとなる。

「なんだ！　なにが起こったっ！」

　研究員の一人が叫さけぶ。

　電話で連れん絡らくを取り始めていた別の研究員は、顔を真っ青にして叫んだ。

「試験体５号が！　５号が暴走をっ！」

+

　光すら射ささぬ暗い闇やみの中で、手足に枷かせをつけられた一人の男が壁かべに磔はりつけにされていた。リューガである。あのあと彼は瀕ひん死しの状態で運びこまれ、治ち療りようすらされないまま幽閉されていた。

　だが、それから数週間の時が流れている。リューガの体は完全に再生していた。

　一筋の光すら存在しない部屋の中に、闇より暗い色をした靄もやが浮うかび上がる。彼は手足につけられた枷を軽々と引きちぎると、拳こぶしを振ふり上げて前方へと突つき出した。それは鋼鉄製の堅けん牢ろうな扉とびらを突き破やぶり、吹ふき飛ばしていく。

眩まばゆい光が部屋に浸しん入にゆうしてくる。その白く輝かがやく光は、部屋の中で仁に王おう立だちするリューガの姿を浮かび上がらせた。

リューガは目の前に広がる白の世界へと足を踏ふみ入れる。

警報音が鳴り響き、赤色灯が白の世界を冒おかした。

前方から数名の警備兵が走ってくる。彼らは驚きよう愕がくと恐きよう怖ふをない交ぜにしたような表情を顔に貼はりつけたまま、手にした銃じゆう器きをリューガへと向けた。引き金が引かれ、リューガへと向かって銃じゆう弾だんの雨が降り注ぐ。だが、すでに彼の姿はそこにはない。リューガは一いつ瞬しゆんにして警備兵との距きよ離りを詰つめると、彼らを血祭りに上げた。

「ライカ……」

リューガはつぶやくと、廊ろう下かを歩き始める。彼女の位置は確かく認にんするまでもなかった。

警備兵は次から次へとやってくる。だがリューガを抑おさえることはできない。

（ライカ……見てみろ、解わかっただろう？　こんな狭せまくてちっぽけな世界なんか、オレの手にかかればいつだって壊こわせるんだ。オレを……オレたちを止めるなど誰だれにもできはしない）

リューガは薄く笑った。

ふとリューガは自分と同種の存在が接近してくるのを感じた。

「なんだ、君たちも来たのか」

立ち止まり、前方へと目を向けたリューガは、そこに見知った少女たちの姿を見つけた。五名の少女たちは、幼いころから一いつ緒しよに生活し続けてきた仲間たちである。

だが少女たちはリューガに与くみすることなく油断なく身構えると、臨戦態勢に入った。

「そうか。君らも同じなのか。こんなくだらない場所に執しゆう着ちやくして……。情けない」

　少女たちが一いつ斉せいに動き出す。その動きは目で追えるものではなく、人を軽く凌りよう駕がしていた。強さは警備兵の比ではなく、攻こう撃げきは正確無比である。

　だが、そんな彼女たちですらリューガの相手ではなかった。彼のほうが速く、強い。そして正確だった。リューガは少女たちを一人、また一人と血祭りに上げていく。ためらいはない。行く手を阻はばむのであれば、仲間だろうが関係なかった。例外なく殺すだけである。

　五人の少女を葬ほうむったリューガは、さらに廊下を歩いてゆく。

+

　手術台に寝ねかしつけられていたライカは、緩かん慢まんな仕草で顔を横へと動かした。

　彼女は死魚のような瞳を隣りん接せつする別室へと向ける。そこでは首を失った数人の研究員が倒たおれており、世界を赤で染め上げていた。

　ぴちゃりぴちゃりと、水たまりの中を歩くような足音が近づいてくる。やがてそれは姿を現した。白い世界を破は壊かいしつくし、赤く塗ぬりつぶしていく黒い影かげ。

「ラ、イカ……ライカ……」

　黒い靄にも似た闇を身にまとった男が、ライカの下もとへと近づいてくる。

（君は―）

　ライカは男を見み据すえる。

（君は、誰だっけ？）

　ライカは小首をかしげる。なにも思い出せなかった。見覚えがあ

るような気もしたが、定さだかではない。あらためて男の姿を眺ながめるが、やはりなにも思い出せなかった。

（思い出せないということは、必要ではないということ）

　ライカは手術台から身を起こすと、ゆっくりと立ち上がった。

　体内に組みこまれた機関が覚かく醒せいし、強大なエネルギーが光の粒りゆう子しと化してライカの周囲に集まり始める。それは彼女の体を包みこみ、徐じよ々じよに光度を強めていく。神こう々ごうしいまでのその光は温かく、母親の胎たい内ないにでもいるかのような温ぬくもりと慈じ愛あいに満ちていた。それに身を委ゆだねた彼女は、その中で奇き跡せきとも呼べる変化を遂とげる。光はやがて直視できなくなるほど激しくなった。

「変・神」

　ライカが淡たん々たんとした口調でつぶやいた次の瞬しゆん間かん、彼女を中心とした光は爆ばく砕さいする。光の粒子が軌き跡せきを描えがきながら四散し、あとに残ったのは天使だった。

　白い仮面、白い装そう甲こう、白い翼つばさ―。汚けがれなきその姿は、まさに白の天使だった。

「……誰だ？」

　男は怯おびえを孕はらんだ声で問いかけた。

「誰なんだよ……」

　ライカは答えず、一歩、また一歩と男の下へと向かって歩いていく。彼女の両手に二本のビームセイバーが現出する。

「君は……君は、誰なんだよっ！　ライカァァァッ！」

　男が絶ぜつ叫きようするが、ライカの心には届かない。彼女は身構えると、彼との距離を一瞬で詰め、ビームセイバーを一いつ閃せんさせる。それは男の顔面を捉とらえた。切り裂さかれた左目からは大量の鮮せん血けつが溢あふれ出す。

　残された右目が見開かれる。なにが起きたのか解らないとでも言いたげな目だった。

だがライカの感情は揺ゆるがない。彼女は再びビームセイバーで男を斬きりつけた。彼は膝ひざから崩くずれると、血に染まった手を彼女へと差し出した。

「……ライカ……ライカ……あの、青空へ……」

ライカは無言のままビームセイバーを振ふり上げると、それを男の胸むな元もとへと突つき刺さす。彼はカッと目を見開くと、床ゆかへと向かってゆっくりと沈しずんだ。

ライカは無言でその光景を眺め続ける。警報音が、やけに耳みみ障ざわりだった。

+

ライカの意識はゆるやかに回復していた。

手術室で呆ぼう然ぜんと立ちつくしていた彼女は、警報音、そして明めい滅めつする赤色灯の光で我に返る。

《ここは……？》

辺りを見み渡わたした彼女は、ここが手術室であるとすぐに気がついた。だが強化ガラスは粉こな微み塵じんになっており、内部は嵐あらしでも過ぎたかのように散らかっている。隣りん室しつでは研究員の死体が数体ほど転がっており、むせるような血の臭においい、そして死し臭しゆうが漂ただよってきた。

そして―。

ライカは目を剝むいた。足下に人が倒れていたからだ。しかもその人物には見覚えがあった。いや、記き憶おく以前の問題である。彼を―リューガを忘れるわけがなかった。

リューガは血だまりの中で沈んでいた。顔色はなく、青さを通り越こして白みがかっていた。

リューガの身になにが起きたのかを考えるよりも早く、ライカの

脳のう裏りに鮮せん明めいな映像が浮うかび上がった。自らの手でリューガにトドメを刺す瞬間の絵である。ライカは自分の姿へと目を向けるが、そこに生身の体はなかった。体は白い装甲で覆おおわれており、人間らしさの欠片かけらもない。魔ま導どう兵器としての自分がそこにいた。

《ああっ……》

ぞくりと、足下から冷たいものが這はい上がってくる。絶望にも似た感覚が全身を支配し、心は楔くさびでも打ちこまれたかのように罅ひびが入っていく。

ライカは自分の体を抱だきしめていた。硬かたく冷たい感かん触しよくが、より自分の心を冷やしていく。

（私がリューガを……）

鼓こ動どうが速まり、息が荒あらくなっている。体は震ふるえ、立っていることすら困難になってきた。呼吸の乱れで脳に酸素が行かないのか、思考力が低下していく。そんな状態であるにもかかわらず、リューガの姿だけは酷ひどく鮮明だった。

ライカはリューガを助けようとはしなかった。それどころか彼女はリューガから目を背そむけると、その場から逃にげ出してしまったのである。ライカは振り返ることも立ち止まることもせず、ただ猛もう然ぜんと廊ろう下かを飛び出していく。

ライカの心は恐きよう怖ふ心しんに満たされていた。リューガを手にかけた罪、そして恐怖心が彼女に重く重くのしかかる。その前には姉きよう弟だいの絆きずなも無意味だ。ライカはその場から、そして施し設せつから逃げたかった。すべてを過去に押しこめ、断絶したかったのである。

ライカは廊下内を飛び続けた。リューガがあらかた倒たおしてしまったのか、警備兵との遭そう遇ぐうはほとんどなかった。仮に遭遇したとしても彼らがライカの姿に気づくことはない。彼女の移動速度はあまりにも速く、彼らは一いち陣じんの風が吹ふき抜ぬけたとしか感じなかったはずである。

前方に外の世界へと通じる扉とびらが見えてきた。ライカは体内で術式を編み上げる。すると右みぎ腕うでから光の文字が浮かび上

がっていく。それはやがて砲ほう身しんへと変化を遂げた。

　砲口を前方へと向けてビーム砲を撃うち放つ。扉は難なく吹き飛び、自由への道を開いた。

　以前、リューガと一いつ緒しよに脱だつ走そうを試みたことがあったが、今度の逃とう亡ぼうは呆あつ気けないほど簡単だった。外にも警備兵は配置されてなく、彼の姿もない。

　ライカは空を見上げた。

　そこには焦こがれに焦がれた青空と自由があった。

　縛しばられることも守られることもない、ただひたすら自由な空間がそこにはあった。

　ライカは飛び立った。

　自由の世界へと向かって―。

　それからすぐのことだ。ライカがアーカムシティの中に潜もぐったのは。彼女は使われなくなって久しい教会に身を寄せると、身分を偽いつわり、シスターとして暮らすようになったのである。

　だが、そこも完全な自由ではなかった。

　どこまでもどこまでも追いかけてくる白の世界と罪の意識が、彼女を苛さいなみ続けたのである。

+

　リューガの命の炎ほのおは消えかかっていた。

　体に感覚はなく、意識はないも同然である。それにもかかわらず体は妙みように軽く、ふわふわしている。

　そんな状じよう況きようのリューガに、語りかける声があった。

愛いとおしむような、憐あわれむような、蔑さげすむような……そんな男の声である。

「ああ、ああ、可哀かわい想そうに。君は裏切られた、裏切られたのだよ。彼女に。そう。ライカに。君はあんなにも彼女を愛していたのに。でもライカは君を必要とはしてなかった。君のすべては無む駄だだった。君の想おもいのすべては無意味だった。君の存在は彼女によって否定されたのだよ」

　抑よく揚ようのあるその声は、妙に芝しば居いがかっていた。同情しているようだが嘲あざけるようでもある。

「だがな。だがな。私が、この私が、君に存在意義を与あたえよう。ライカが憎にくいかい？　ライカが怖こわいかい？　ライカから逃のがれられないのかい？　だとしたら彼女を殺したまえ。超こえたまえ。君を捨てたことを後こう悔かいさせてやるのだ。そうすれば君は、もっと気高く、もっと美しい存在になれる。彼女などいなくても君は生きていける。そしてさらなる高みへ――」

　男が忍しのび笑いを漏もらす。酷く下げ卑びた底冷えのする声である。それを耳にしながらリューガの意識は消え失うせていく。

　それから何度か意識は戻もどったが、その間にどれだけの時間が過ぎたのかは判わからなかった。ただ意識が戻る度たびに、あの声が語りかけてきた。

「ライカが今、なにをしていると思う？　正義の味方だよ。おかしくて笑ってしまうな」

　実際、彼は笑っていた。

「天使王を名乗っているそうだ。君を裏切り、殺そうとした彼女が、だ。傑けつ作さくだ。そうは思わないか？　よろしい。ライカが明るメタい天トロ使ンならば、君は暗いサンダル天使フオンだ。君は今日からサンダルフォンを名乗りたまえ」

　再びリューガは意識を失っていく。

　そのあとのことは、よくは覚えていない。

　ただライカに対するどす黒い感情だけが胸中を支配していた。

+

　アーカムシティの守護天使としてメタトロンの名が認にん識しきされ始めたころのことだ。

　破は壊かいロボットをビームセイバーで一いつ閃せんし、飛び去ろうとしたライカの前にそれは現れた。

　黒い仮面、黒い装そう甲こう、黒い翼つばさ一。

　暗く冷たい闇やみの気配を背負い、限りなく純じゆん粋すいな悪意に冒おかされた双そう眸ぼうで見つめてくるそれは、メタトロンの姿と酷こく似じしていた。

　あからさまな殺意を向けてくる黒い天使の姿に、ライカは戦せん慄りつする。

《貴様がメタトロンか？　己オレと同型の魔ま導どう兵器……》

　感情の片へん鱗りんすら見せない醒さめた声に、ライカは聞き覚えがあった。

《まさか、おまえ……いえ、あなたは……》

　ライカが呆ぼう然ぜんとつぶやく中、黒い天使は闘とう気きをむき出しにして身構えた。

《貴様、己の姉さんだったか？》

《……リューガ？　リューガなの!?》

　白い仮面で隠かくされてはいたが、ライカは大きく目を見開いていた。

　リューガは死んではいなかったのだ。

　ライカは素す直なおに喜ぶと、リューガの下もとへと近づいていく。

《は……ははははっ。そうだ……姉さんだ……ライカ姉さんだ……。覚えているぞ。覚えている……。忘れるものか……。忘れるはずがない！》

　リューガは近づいてくるライカの顔面と腹に拳こぶしを叩たたきこんだ。情なさけ容よう赦しやのないその攻こう撃げきでライカの体は吹ふき飛び、装甲に亀き裂れつが入る。

《リューガ……？　な……なんで？　どうして!?》

《ははははっ！　忘れるはずがない。忘れてなるものか。己を殺したのは姉さん、貴様だ！》

《リューガ……私は……》

　ライカは体勢を立て直すと、距きよ離りを置いてリューガと対たい峙じする。

《一度、己を殺せたからといって調子に乗るな！　己は……蘇よみがえった己は、貴様を遥はるかに超えているのだ。今からそれを証明してやる！　そうだ、貴様を殺して証明するのだ。最強はこの己──そう、サンダルフォンなのだと！》

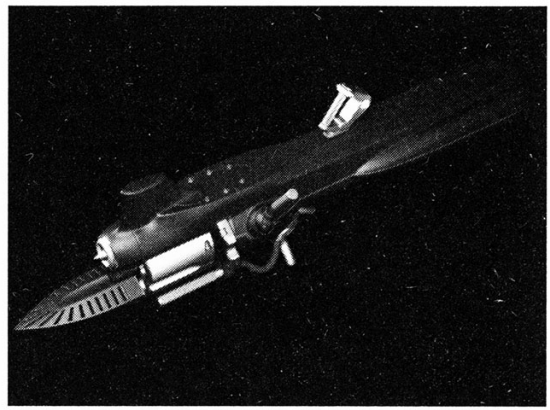
　リューガが背中に背負った機械の翼から、フレアが迸ほとばしる。それは猛もう烈れつな推進力を生み出した。

《己の贄にえとなれ、メタトロン！　貴様を殺すことで、己はヒトを超えた領域に到とう達たつする権利を手にするのだ！》

　リューガは高らかに宣言すると、ライカへと向かって突とつ撃げきしてくる。

　憎ぞう悪おと狂きよう気きを胸に抱いだき、死すら超えて彼がやってくる──。

第四章　勝利の凱歌を高らかに



ディグ・ミー・ノー・グレイヴ

　夢む幻げん心母でクラーケンが葬ほうむり去られていく様子を見守っていたアンチクロスたちは、勝ち名乗りを上げ、勇ましい姿を見せつけるデモンベインの姿に驚おどろきを隠しきれずにいた。

「……正直、侮あなどりすぎていたようだな」

　アウグストゥスは苦にが虫むしをかみ潰つぶしたかのような顔をすると、呪じゆ詛そにも似た言葉を吐はき出した。

　このような事態を想定しなかったわけではない。だがそれは万に一つもない可能性であり、カリグラが負けたことは大きな誤算だった。

「しかし、しかしだ。カリグラが殺やられてしまうとは。面おも白しろい。実に面白い結果ではないかね？」

　ウェスパシアヌスは興味深そうにしてはいたが、顔は笑ってはいない。

「そうねえ。あんなヘロヘロした魔ま力りよくでカリグラちゃんを倒たおしちゃうとは思わなかったわん☆」

　仮面に隠されてうかがい知ることはできないが、ティベリウスの顔には笑えみが浮うかんでいることだろう。

「手負いとはいえ、獅し子しは獅子ぞ。侮ったお主ぬし等らが阿あ呆ほうなのよ」

　ティトゥスはあからさまな嘲ちよう笑しようを浮かべていた。

「ほう。君ならカリグラのような無様はさらさないとでも？」

　アウグストゥスの挑ちよう発はつにティトゥスは不敵な笑みで応こたえる。

　二人は向かい合い、そして睨にらみ合った。

「拙せつ者しやに行けと申すか。ふふっ。望むところだ」

　ティトゥスは衣服を正し、腰こしに差した刀を確かめる。すでに戦いの準備は整っているようだ。体から発せられる異常なまでの闘気は鋭えい利りな刃は物もののそれであり、触ふれただけで切れてしまうほどの鋭するどさである。

「いいかげん、退たい屈くつしていたところだ」

　ティトゥスはアウグストゥス、そして他ほかのアンチクロスに背を向ける。

　ティトゥスが立ち去ろうとしたときだ。

　それまで沈ちん黙もくしていたクラウディウスが、いきなり吠ほえた。

「待ちやがれ、このチョンマゲ野や郎ろう！」

　クラウディウスは充じゆう血けつし、赤くなった目でティトゥスの背中を睨みつける。彼はさらに吠えた。

「ヤツはボクの獲え物ものだっ！」

　クラウディウスは殺意に満ち満ちた気配を全身から放っている。感情の抑よく制せいが効かず、ひたすら憎悪のみが暴走し続けているかのようだ。

　それは少年の姿を醜みにくく歪ゆがめ、復ふく讐しゆうの鬼おにへと変えていく。

「ヤツが……ヤツらがカリグラを殺したんだ！　許さない。絶対に許さない！　全員、残らず解体してやる！　畜ちく生しよう！　殺す、殺す、絶対に殺す！　ドタマかち割って、脳のう味噌みそ引きずり出してやる！　畜生！　畜生！　クソが！」

+

格納庫へと戻もどってきた九郎は、デモンベインを見上げていた。

クラーケンとの戦いで損傷してはいたが、その勇ましくも神こう々ごうしい鬼き神しんのごとき気配はいささかも衰おとろえてはいない。それどころか戦いに勝利することで貫かん禄ろくが増したようにさえ思えた。

デモンベインの周囲には『トイ・リアニメイター』が忙せわしなく動き回っている。それは装そう甲こうに刻みこまれた無数の傷を素す早ばやく、そして確実に復元していく。ウェストが自じ慢まんするだけあって驚きよう異いの作業スピードである。

「しかし……」

呆あきれるほどの性能を発揮しているロボットから目を外し、あらためてデモンベインを振ふり仰あおぐ。

「よく復活したよな……。それも一日で」

天才と狂気は紙かみ一ひと重えである。性格的には破は綻たんをきたしているウェストだが、その能力は確かなものだった。

（あれで性格さえまともなら言うことなしなんだが）

だが、それは高望みというものだろう。歴史上の偉い人じんも才能と引き換かえに多くのものを失っている。

「ふはははははっ！　当然なのであーる！　我わが輩はいをそこらへんの凡ぼん人じんと一いつ緒しよにしてもらっては困るのである。我輩は……我輩こそが神に選ばれし真の大！　天！　才！　スーパーウェ……」

エルザはウェストが話し終わる前に鉄てつ拳けんをお見み舞まいしていた。彼は顔をのけ反らせ、鼻血を流しながら床ゆかへとひっくり返った。体は脈打つかのようにピクピクと痙けい攣れんしており、瞳どう孔こうは開きかけている。別の世界へと旅立つ直前のようだ。

「博士、うるさいロボよ」

生みの親であることを失念しているのか、エルザはウェストの側

そばで屈かがみこむと、彼の体を指先で何度もつっついた。

「うをををををっ……」

　ウェストは人とは思えぬ呻うめき声を発すると、その場で跳はね起きた。

「なななななな、なにをするであるか！　もう少しで歴史上の偉人たちと肩かたを並べるところだったのである！」

「しぶといヤツめ……。俺的には逝いってもらってもよかったんだが」

「そ、その態度。我輩の活かつ躍やくがあってこその勝利であることを忘れてしまったのであるか？」

「忘れた」

「忘れちゃったロボ」

　九郎とエルザが答えると、ウェストは泣きそうな顔をしながらエレキ・ギターの準備を始めた。死線を彷徨さまよおうが、それは彼にとって感情表現に欠かせない必ひつ須すのアイテムである。

「カリグラと一緒で一つ覚えだな……」

「ウザイから今のうちに殺っちまうロボ？」

「そうしてくれ」

　エルザはうなずくと、いそいそと演奏の準備に取りかかっているウェストへとにじり寄った。

「ん？　なんであるか？」

　すでに当初の目的を忘れ、演奏への並々ならぬ情熱をみせていたウェストだが、エルザの殺気に気づいて青くなる。

　一いち撃げき必殺に等しいエルザの拳こぶしが、慌あわてふためくウェストの顔面へと飛んでいく。風を切るような音とともに解き放たれたそれを、ウェストは間かん一いつ髪ぱつのところでかわし、エレキ・ギターの弦げんを指先で弾ひきながらスタコラサッサ

と逃にげ出した。

「ちっ。仕留め損そこねたロボ」

　エルザはアイザック・アシモフが聞いたら卒そつ倒とうするであろう台詞せりふをつぶやいたかと思うと、遁とん走そうしていくウェストを追いかけ始めた。

「うおおおおおお。大十字九郎、恩を仇あだで返すつもりであるな？　そうなのであるな!?　貴様とは膝ひざをつき合わせながらの三日三晩の話し合いを要求……」

「いいかげん、エルザの手にかかるロボ！　『我、Ｄｉｇ　埋葬Ｍｅ　にあＮｏ　Ｇたわずｒａｖｅ』射出！」

「ノォォォォォ！　ノオオオォォォォッッ！」

　ウェストの悲鳴、そして術式魔ま砲ほうの咆ほう哮こうが、疲ひ弊へいしている九郎の心と体を弱らせていく。

（この件が片づいたらロボット三原則のなんたるかを教えこむ必要があるな……）

　生死をかけた追いかけっこを繰くり広げている二人を眺ながめながら、九郎は嘆たん息そくする。

（しかしあいつら、無む駄だに元気だよなあ）

　絶望感に打ちひしいでいるよりはマシだが、なにも考えずに騒さわぎまくるのも問題だった。

（まあ、あいつらは放置しておくとしてだ）

　九郎は修理中のデモンベインを見上げると、これからのことについて思案する。

　なんとかカリグラを葬ほうむり去ることはできたが、むしろ本格的な戦いはこれからだ。

　アンチクロスの一人を倒たおした以上、ブラックロッジも本気で潰つぶしにかかってくるだろう。相手の隙すきをうかがい、油断に乗じて仕留めるような作戦は二度と通用しない。

（勝てるのか？　俺に……）

　不安や恐きよう怖ふは間ま違ちがいなく存在する。それは九郎の心を縛しばり上げ、身動きが取れなくなるほどだ。

　アルがいないという現実が重くのしかかってくる。戦場へおもむくことに怖おぞ気けを感じ、体は戦いへの意欲とは別に震ふるえていた。

　だが九郎は力ずくでそれをねじ伏ふせていく。

　戦わねばならなかった。

　戦う必要があった。

「……アル」

　九郎は魔ま導どう書しよを握にぎりしめた。

（そうだ。俺は戦わなければならない）

　アルを死へと追いやったのは九郎だった。その事実に目を背そむけ、逃げ出すわけにはいかない。

（今度は絶対に勝つ！　もう二度と大切な人を死なせたりはしない）

　心に誓ちかったときだ。

　九郎は戦せん慄りつするほどのおぞましい気配を感じ取り、総毛立った。

　それと同時に格納庫内の赤色灯が明めい滅めつを始め、けたたましい警報音が鳴なり響ひびく。

「なんであるか？　何事である!?」

　エルザに壁かべ際ぎわまで追いつめられていたウェストが素すっ頓とん狂きような声を上げる。

「敵てき襲しゆうロボ!?」

　術式魔砲の砲ほう口こうをウェストの鼻先に突つきつけていたエ

ルザが、周囲の様子をうかがい始める。

　九郎は手近なところにある通信機の下へと駆かけ寄った。ウェストとエルザも彼に続く。

　受話器を取って司令室を呼び出す。すぐにオペレーターが応じ、瑠璃へと回線をつなげた。

「破は壊かいロボットか？　それとも鬼デウ械ス・神マキナが……!?」

『……事態は、より深刻なのです。大十字さん』

「それは、どういう意味であるか!?」

　会話を盗ぬすみ聞きしていたウェストが疑問を投げかける。

『つい先ほど、当基地は敵の侵しん入にゆうを許しました』

「ちっ。今度は白兵戦かよ！」

『問題はそこではありません。こちら側の防衛システムを軽々と突とつ破ぱするほどの相手が―。確かく認にんはできていませんが、おそらく……』

「アンチクロスのクソ野や郎ろうどもか！」

　しかも瑠璃の話によると、数ヶ所同時に襲しゆう撃げきされているらしい。

「敵が複数同時に……。本格的に潰しにかかってきたか！」

　一人でも手を焼くのに、複数同時では分が悪すぎた。

『只ただ今いま、最高レベルでの迎げい撃げきシステムで応戦中ですが、敵の勢いは止まりません。まったくもって不ふ甲斐がいないばかりです』

　これはウィンフィールドだ。声の調子から、いかに切せつ迫ぱくした状じよう況きようであるかが判わかる。

「俺も迎撃に出る！　場所のデータを転送してくれ」

　通信機の側そばに備えつけられたパネルに基地内の見取り図が表示される。交戦中を示す箇か所しよが赤く明滅しており、格納庫から一番近い場所を頭の中へと叩たたきこむ。

「ちょ、ちょっと待ってください！　大十字さん、貴方あなたはもう、魔術師マギウスにはなれないのですよ？　アンチクロス相手に生身で戦えるはずが……」

　瑠璃の危き惧ぐはもっともだったが、発言を撤てつ回かいするつもりはない。

「魔術のまの字も識しらない警備兵よりはマシだ。このときのために準備してきたんだからな」

『で、ですが……』

「大だい丈じよう夫ぶ。負けやしねえよ！」

　九郎は腰こしの魔ま銃じゆうとバルザイの偃えん月げつ刀とうを確認する。それは確かな自信と勇気を与あたえてくれた。

「ダーリン！　エルザも出しゆつ撃げきするロボ！」

　エルザは術式魔砲を背に担かつぎ、打突トンフ武器アーを構えた。

「まあ、そういうわけだ！　じゃあ切るぜ！」

『無茶は止やめてくださいませ！　大十字さんになにかあったらわたくし……』

　瑠璃がなにか話していたが、九郎はかまわず受話器を置いた。今は無む駄だ話ばなしをしている場合ではない。一刻も早く現場へと向かう必要があった。

「よし！　行くぞ、エルザ」

「了りよう解かいロボ！」

　九郎とエルザは、さっそく行動に移る。

「我わが輩はいはデモンベインの修理があるので、ここに残るので

ある。と言うわけで頑がん張ばれ若者！　我輩はここで貴様のために曲を奏かなでるのが精せいーいつ杯ぱいなのである。嗚呼ああ、旋せん律りつに乗って貴様に届け、我輩の淡あわく切ない想おもい！」

　激げき励れいされたのか呪のろわれたのか判断がつかないまま、九郎は疾しつ駆くした。

+

　廊ろう下かは血の臭においで満ちていた。

　それはむせ返るほどであり、ねっとりとした空気が体に絡からみついてくる。床ゆかにはおびただしい量の鮮せん血けつが撒まき散らされており、壁かべや天てん井じようを真っ赤に染めていた。

　廊下には警備兵のものと思われる肉にく片へんが散乱していた。五体満足にそろっている死体は一つもない。パーツごとに分断された挙げ句にぶちまけられているせいか、一見しただけでは何人分の死体なのか判断できない。頭部の数から二、三十人だと推測できるが、屍しかばねは廊下の先まで続いている。全体で何名の死者が出ているのかは想像すらかなわない。

　眼前に広がる光景はまさに地じ獄ごく絵え図ずである。血だまりの中に浮うかぶ肉につ塊かいと臓ぞう腑ふ、そして遺体の数々──。殺されたばかりなのだろう。痙けい攣れんするかのように動いている胴どう体たいや、ポンプのように血液を排はい出しゆつし続けている心臓らしきものもあった。うっすらと血の気を残した臓器が生々しい。

　そんな凄せい惨さんな世界に彩いろどりを添そえているのが赤色灯だった。それは血の色と混ざり合い、地獄の業ごう火かさながらの印象を与える。

　九郎は吐はき気けをもよおしていた。昨日からほとんどなにも口にしてなかったが、胃から酸すっぱいものが迫せり上がってくる。なんとか押し止とどめることには成功したが、正視に耐たえない光景に正気を失ってしまいそうだ。

「ダーリン、大丈夫ロボ？」

「ああ。これくらい、どうってことねえよ」

　強がってはいたが、心にかかった負担はかなりのものだ。

　そして吐き気を克こく服ふくしたあとに襲おそってきたのは怒いかりである。人を人とも思わぬ卑ひ劣れつな行こう為いに、ただただ激しい怒りと憤いきどおりを感じていた。

　九郎とエルザは廊下を突つき進んでいく。すると前方から高笑いが聞こえてきた。そちらへと注視すると、血の海にたたずむ少年の姿が見えてくる。

「ヒャーハッハッハッ！」

　彼は狂くるったかのように笑い続け、振ふりかざした腕うでから放たれる風が警備兵を一いつ瞬しゅんにしてミンチにしていく。

九郎はその少年を知っていた。アンチクロスの一人・クラウディウスである。彼は風を司つかさどりし旧支配者・ハスターの力を行使し、圧あつ倒とう的な力で警備兵を制圧していく。

九郎は二挺ちようの魔ま銃じゆうを手にすると、惨さん劇げきの

直ただ中なかにいる少年へと向かって吠ほえていた。

「クラウディウス！」

　九郎の声に、クラウディウスは即そく座ざに反応を示した。

　血走った目が九郎の瞳ひとみを捕ほ捉そくする。

　押し寄せてくる強きよう烈れつなプレッシャーに体がのけ反りそうになるが、かろうじて堪こらえた。

「来やがったな、大十字九郎！　てめえはボクがぶっ殺す。バラバラに解体してやる！　殺す殺す殺す殺す殺す殺すッ！」

　クラウディウスの体から風の刃やいばが走ってくる。透とう明めいなはずのそれは、血ち煙けむりをまとっているせいか肉眼でも確かく認にんできた。

「ちっ！」

　九郎は身を屈かがめてそれを避さけると、十分に狙ねらいを定める間もなく魔銃の引き金を引いた。弾だん丸がんはクラウディウスから大きく逸それていく。

「くそっ……」

　九郎は即座に魔銃を構え直す。

「蜂はちの巣にしてやらあ！」

　クラウディウスの手にベーゴマが出現する。

　それは彼の手の中で一個が二個に、二個が四個にと、マジックよろしく数を増やしていく。気がつくとクラウディウスの指の間には十数個のベーゴマが挟はさまっており、彼は両手を振るってそれを放った。

　ベーゴマは床や壁、天井などを伝って九郎へと迫ってくる。撃うち落とすには数が多く、しかも動きは不規則で捕とらえようがない。まるでクラウディウスの意を汲くんでいるかのように縦じゆう横おう無む尽じんに動き回っている。

（こいつぁ、やべえ……）

　いくつか食くらうのを覚かく悟ごしたときだ。

　九郎とベーゴマの間にエルザは飛びこむと、両手に装備したトンファーでベーゴマを一つ残らず叩たたき落とした。

「ロボ！」

　エルザはクラウディウスへと向かって突とつ進しんすると、彼の顎あごを目がけてトンファーを突き上げた。クラウディウスはバック転でそれを避け、距きよ離りを取る。

「機械人形！　てめえ、覇道に寝ね返がえりやがったな！」

「エルザは愛に生きるロボ」

「ぬかせ！」

　クラウディウスは両りよう腕うでを交差させると、腕を振るった。十字の形をした破は壊かいをもたらす風が押し寄せてくる。

「伏ふせろ、エルザ」

　九郎は叫さけぶと同時に魔銃を連射する。

　今度は確実にクラウディウスへと向かうが、その大半が彼の防ぼう御ぎよ陣じんに阻はばまれてしまう。

　だが貫かん通つう力りよくの高い自ク動ト式ウ拳グ銃アの一発が、防御陣を突き破やぶってクラウディウスの眉み間けんへと向かった。

「チィッ！」

　クラウディウスは首を傾かたむけて弾丸をかわすが、そのとき一瞬だけ隙すきができた。

　九郎はバルザイの偃えん月げつ刀とうを手に突っこむと、大上段に構え、それを振り下ろす。だがそれはクラウディウスの体を切り裂さくことはなく、彼が手にしたケンダマに受け止められていた。

（ケンダマ!?）

　それは玩具おもちやなどではなかった。そこには魔術文字がびっしりと刻まれており、淡あわい輝かがやきを放っている。

「よう。待ってたぜ、このインスタント野や郎ろうが！　てめえはカリグラを殺したんだ。楽に死ねると思ってんじゃねえぞ！」

「世間知らずのクソガキが。社会の厳しさってもんを教えてやるぜ」

　九郎とクラウディウスは互たがいの武器で激しく打ち合う。だが打ち合う度たびにクラウディウスの動きは速さを増し、それに九郎の目と体は追いつかなくなっていく。

（速い……速すぎる！）

　攻こう撃げきを繰くり出すどころか受け止めるだけでも精せい一いつ杯ぱいである。九郎は徐じよ々じよに押されていく。

　ケンダマが突き出される。だがそれに応じる準備ができていない。それでもなんとか受け止めたが、無理な体勢で受け止めたために九郎はバランスを崩くずしてしまう。

「ちっ。しまっ……！」

　足を踏ふん張り、なんとか姿勢を保とうと試みたところへクラウディウスの一いち撃げきが迫せまる。

（殺やられる！）

　ただでさえ体勢が崩れた状態である。九郎は避けることも防ぼう御ぎよすることも受けることもできないまま、無防備な姿を晒さらしていた。

「させないロボッ！」

　九郎の窮きゆう地ちを救ったのはエルザだった。

　彼女はトンファーでケンダマを受け止めると、そのまま力任せにクラウディウスを押し飛ばす。小こ柄がらな彼は軽々と後方へ吹ふき飛ぶが、空中でくるりと一回転し、まるで何事もなかったかのように地面へと着地する。

エルザも黙だまって眺ながめていたわけではない。クラウディウスが着地するころには彼との距離を詰つめてトンファーを振ふり回していた。

九郎は九郎でその間に体勢を立て直し、バルザイの偃月刀を握にぎりしめて突とつ撃げきを開始する。

バルザイの偃月刀、そしてトンファーと、次々と繰り出される攻撃をケンダマ一つで受け続けるクラウディウス。だがさすがのクラウディウスも手を焼くようで、九郎とエルザの勢いに少しずつ押しこまれていく。

（これならどうだ！）

九郎は一いつ瞬しゆんだけ攻撃に緩かん急きゆうをつけた。

たったそれだけだがクラウディウスのリズムを乱すには十分で、ほんの僅わずかに生じた隙に乗じて襲おそいかかる。

九郎はバルザイの偃月刀を振りかざすと、渾こん身しんの力をこめて振り下ろした。

「バカか！　そんな大ざっぱな動きで……」

クラウディウスの言葉は続かなかった。

九郎のオーバーアクションに気を取られている間に、エルザの踵かかと落おとしがクラウディウスの右みぎ肩かたに炸さく裂れつしたのである。彼は肩にエルザの踵を食いこませたまま床ゆかへと叩たたきつけられた。

勝機を見み出いだした九郎は、今度こそトドメを刺さすべくバルザイの偃月刀を振り下ろす。だが、そこにクラウディウスの姿はなかった。

（消えた？）

しかし探すまでもない。クラウディウスは偃月刀の先に立っていたのである。

（なんてヤツだ……！）

　重さはまるで感じない。木の葉でも舞まい降りたかのようである。

「……結局、魔ま術じゆつ師しでもねえてめえなんざ、その程度なんだよ！」

　クラウディウスは小こ馬ば鹿かにしたかと思うと、全身から魔ま力りよくを放出した。

　それは突とつ風ぷうとなって九郎とエルザを吹き飛ばしていく。さらに追い討うちをかけるように無数のかまいたちが二人の体を刻んでいった。

　二人はそろって壁かべに激げき突とつし、呻うめき声を上げる。

「けど、これで辻つじ褄つまが合ったぜ。魔術師に変身しねえわ古本女の姿もねえわとなると……。ヒャハハハハッ！　そうか、そうかあ。やっぱりアル・アジフちゃんは、あんときにご臨りん終じゆうってワケですか。ヒャヒャヒャ！」

　腹を抱かかえて大たい笑しようするクラウディウスの姿に、九郎の怒いかりは一気に臨界点へと達する。激情で頭の中は真っ白になり、体が発する悲鳴を無視して跳はね起きた。突つき抜ぬけるような痛みに別の意味で頭の中が白くなるが、それさえもねじ伏ふせると、九郎は偃えん月げつ刀とうを振るった。それはクラウディウスの鼻先をかすめ、前まえ髪がみを少しだけ散らせる。

「ウゼェよ。そーゆーノリは大だい嫌きらいなんだよ！」

　クラウディウスは床に唾つばを吐はきつけると、手にしたケンダマを振るって玉を放った。

　それは九郎の鳩尾みぞおちを深々と剔えぐり、鉄球でもぶつけられたかのような衝しよう撃げきが全身を駆かけ抜けていく。九郎は体をくの字に曲げてもんどり打った。

「テメーもアル・アジフと同じところに送ってやるよ！」

　九郎の頭をかち割るべくケンダマの玉が迫る。

　だが九郎には届かない。

　クラウディウスの背後から飛んできた棺かん桶おけが彼の足あし下もとをすくい上げ、軌き道どうが逸それた玉は九郎の頭上の壁にめりこんだ。

「なっ!?」

　クラウディウスは尻しり餅もちをつくような感じで転てん倒とうし、彼が立ち上がる前にエルザは行動に移る。

「術式魔ま砲ほう『我、Ｄｉｇ　埋葬Ｍｅ　にあＮｏ　Ｇたわずｒａｖｅ』！」

　エルザは手にした術式魔砲を担かつぎ上げると、砲口をクラウディウスへと向けた。

「ファイア！」

　術式魔砲の砲口が眩まばゆいばかりの光を解き放つ。

　一瞬、世界は白に染まり、そこから放出された光の帯がクラウディウスへと襲いかかっていく。

　だが彼とて黙っていたわけではない。風の防ぼう御ぎよ陣じんを前面に展開してそれを防いだ。

「ロボ～！」

「クッ……！」

　術式魔砲と防御陣が紫し電でんを散らしながらせめぎ合う。術式魔砲のレーザーが押したかと思うと、防御陣が押し返す。数回、それを繰くり返したあと、とうとうレーザーは防御陣を貫つらぬき、その先にあるクラウディウスへと直ちよく撃げきした。

「がああああああああっ！」

　クラウディウスの体は爆はぜ、その衝撃で後方へと吹き飛ばされていく。

　エルザは攻こう撃げきの手を休めない。彼女は術式魔砲を連射する。それは確実にクラウディウスへと命中し、彼の体は爆ばく炎えんと閃せん光こうに飲みこまれていった。

　九郎は魔ま銃じゆうの弾だん倉そうを詰め替かえると、炎ほのおと煙けむりと閃光が入り交じる中心部へと狙ねらいを定め、引き金を引く。

　腕うでに伝わる心ここ地ちよい反動、そして確かな手応てごたえ。

「殺やったか!?」

　九郎は目を細めて前方を見み据すえる。

　クラウディウスの気配が消えてないことに気づいた彼は、銃を構え直す。

「こぉぉぉのぉぉお！　糞くそネズミどもがァァァっ！」

　突とつ然ぜん、吹ふきすさんだ烈れつ風ぷうで煙が霧む散さんする。そしてそこに現れたのは、全身から血を流し、いたるところに火傷やけどを負っているクラウディウスだった。

　立っているのがやっとという有様だが、彼が放つ妖よう気きは衰おとろえてはいない。

　猛もう獣じゆうを連想させる獰どう猛もうな目が九郎たちを捕ほ捉そくした。

　尋じん常じようではない殺意を浴びせられるが九郎は怯ひるまない。闘とう争そう本能を制御できない者に勝機などなかった。

　―魔術とは感情を理性で制御し、たかぶる魂たましいを魔力と融ゆう合ごうさせ、精せい錬れん、精製するものなのだ。

　マスターテリオンが九郎に放った言葉である。

　つまり今のクラウディウスほど楽な相手はいなかった。

　九郎は意識を集中させて魔術の法則を形成させる。法則は単純だ。

　照準をクラウディウスへと合わせ、弾たま切れになるまで撃うつ。それはすべてかわされるか防御陣に阻はばまれるが、クラウディウスの横を通り抜けていった一発の弾だん丸がんと九郎の意識

はリンクしていた。

（―曲がれ！）

　九郎が命ずると、単なる流れ弾と化していた一発の弾丸が軌道を変える。それはUターンすると、背中からクラウディウスに襲おそいかかった。

　狙うは彼の心臓である。

　だがそれは大きく逸れ、彼の右の脇わき腹ばらを貫いただけだった。

（ちっ……。今の俺には、これが限界か……）

　だがクラウディウスに与あたえたダメージは大きい。彼は血を吐き出すと、片かた膝ひざをつき、そして倒たおれた。

「ぐぶっは……！　糞ビツチッ……！」

　脇腹を押さえながら悶もだえるクラウディウスを見つめながら、九郎は弾倉を交こう換かんする。そして銃口を彼の頭へと向けた。

　同情の余地はない。あるのは膨ふくれ上がる殺意のみで、それは二挺ちようの魔銃へと凝ぎよう縮しゆくされていく。

　銃口をクラウディウスの眉み間けんに固定する。

「―終わりだ！」

　九郎は宣告すると、引き金に添そえた指に力をこめる。

「シィィィットッッッッ！」

　断だん末まつ魔まの叫さけびではなかった。

　クラウディウスの体から迸ほとばしった魔力は風となって膨れ上がり、九郎とエルザの体を吹き飛ばしていく。

（あいつ……まだ力が……！）

　軽く十数メートルは吹き飛ばされたが、すぐに体勢を立て直す。

　前方へと目を向けると、通路の先で体を引きずりながら逃にげていくクラウディウスの姿があった。

「逃がすかっ！　行くぞ、エルザ！」

「ロボッ！」

　九郎とエルザは駆かけ出した。

+

　司令室は混乱を極きわめていた。

　各所から寄せられる絶望的な報告はオペレーターや警備兵の士気を低下させ、さらなる混乱を招いていく。

　そんな状じよう況きようの中、瑠璃は彼らを励はげましながら指示を出し続けていた。

　彼女とて冷静ではいられないはずなのだが、そのような感情は微み塵じんも出さず、気き丈じようにふるまい続けている。

　ウィンフィールドはそんな瑠璃を陰かげから支えつつ、彼女が見み逃のがした些さ細さいなミスをフォローしていく。けっして目立つ仕事ではなかったが、その働きぶりは徹てつ底ていしており、しかも完かん璧ぺきだった。瑠璃の業務が滞とどこおりなく進んでいくのも、彼女がそれと気づかぬところでウィンフィールドが補っているからである。そのことに対して不満はない。むしろ喜びだった。

　ウィンフィールドは司令室の中央に位置するモニターへと目を向ける。そこには基地内の見取り図が表示されており、現在の敵の位置、配置された警備兵の位置が事細かに表示されている。

　敵は三名だった。一人はデモンベインの格納庫付近、もう一人は避ひ難なん民みんがいるシェルター近辺、そして最後の一人は司令室を目指しているようだ。

警備兵は敵を止めることすらできなかった。彼らでは障害にすらならず、素す通どおりしているのではと思うほど楽々と突とつ破ぱされている。この調子で暴れられると、数時間も経たたないうちに基地は壊かい滅めつするだろう。いや、司令室が叩たたかれた時点で終わりである。そうなる前に手を打たねばならなかったが、現時点でやれるだけのことはやっていた。

見取り図に表示された敵てき影えいが司令室へと迫せまってくる。

遠くから乾かわいた銃じゆう声せいが聞こえてきた。呻うめき声や絶ぜつ叫きようなども混じり始めている。殺さつ伐ばつとした気配が司令室に侵しん入にゆうしてくるのが判わかった。

緊きん張ちよう感かんは否いや応おうなく高まり、死への恐きよう怖ふが充じゆう満まんしていく。

（戦いは……避さけられそうにありませんね）

銃声はいよいよ大きくなっていく。

司令室にいる警備兵がゲートへと集結し、銃器を構える。全員、銃口をゲートへと向け、引き金に指を添えた。

ウィンフィールドは瑠璃を背に隠かくすように立つと、険しい表情でゲートへと目を向ける。

（……とうとう来てしまいましたか）

弾だん丸がん程度ではビクともしない強固なゲートに、人が通れるほどの長方形の切り口ができる。それは手前へと傾かたむき、鈍どん重じゆうな音を立てながら倒れた。

そこから現れたのは嗜し虐ぎやく的な笑えみを浮うかべる黒の侍さむらいである。彼は瞳ひとみに戦いへの喜びをたたえ、血にまみれた刀を両手に携たずさえていた。

その姿は異様そのものである。体から発せられているのは死し臭しゆうであり、彼が与えるのは絶望以外にありえない。

「さすがに堅けん固ごな防衛機構だ。兵士も良く訓練されている。だが、これしきでは『逆十字』の行く手を阻はばむことはかなわ

ぬ」

　ティトゥスが刀を振ふり払はらうと、そこに付着した赤い液体が綺き麗れいに取り除かれる。

「さあ、出てこい。ウィンフィールド……」

　ウィンフィールドが進み出る前に警備兵が動き出す。彼らは銃口をティトゥスへと向けて引き金を引いた。数百発の弾丸がティトゥスへと襲おそいかかり、彼の体に無数の風穴を開ける……はずだった。

　ティトゥスは刀を自在に操あやつって弾丸を斬きっていく。その動きは速い。あまりの速度に止まって見えるほどだ。だが刀は確実に弾丸を斬り、分断された弾丸はティトゥスに触ふれることなく彼の両りよう脇わきを通り抜ぬけていく。銃じゆう撃げきが終わったとき、床ゆかには分断された大量の弾丸が残されただけで、ティトゥスの姿はそこから消失していた。

「斬！」

　一いつ喝かつするような声とともに再びティトゥスが姿を現したとき、警備兵の首は残らず刈かり取られていた。

　血の柱が上がる中、ティトゥスは刀の切っ先をウィンフィールドへと向ける。

「中ちゆう枢すう部の破は壊かいが拙せつ者しやの仕事だが、そのようなこと知ったことではない。ウィンフィールド。このティトゥス、お主ぬしとの決着をつけにまいった」

　ティトゥスは一歩、前へ歩み寄る。

　二人の間に割って入ろうとする警備兵を手で制し、ウィンフィールドはティトゥスの前へと進み出る。

「ウィンフィールド……」

　背後から瑠璃の声が聞こえてくるが、振り返ることはない。

　戦いへの悦よろこびに満ちたティトゥスの瞳を見み据すえたまま、ウィンフィールドは静かに闘とう志しを高めていく。

「相手は私を名指ししています。ならば応こたえるのが礼れい儀ぎというものでしょう」

　ウィンフィールドはネクタイを緩ゆるめ、ファイティングポーズを取った。

　ティトゥスが刀を構える。

　互たがいの姿を凝ぎよう視しし、睨にらみ合う二人。

　誰だれも彼もが押し黙だまり、ウィンフィールドとティトゥスの決闘に注目する。

「感謝するぞ。戦士ウィンフィールド。では、いざまいら……」

　ティトゥスが腰こしを沈しずめ、駆かけ出そうとした直後である。それよりも速い動きでウィンフィールドは行動を起こした。

　ティトゥスが最初の一歩を踏ふみこむころには、二人の距きよ離りは限りなく零ゼロへと近づく。

　ウィンフィールドは流れるような動きで拳こぶしを放った。それは弾丸よりも速い。まさに神速と呼ぶに相応ふさわしいスピードであり、立て続けに打ち出された拳が弾だん幕まくと化していく。

　全身に無数の拳を浴び、さらにトドメのボディブローを食くらったティトゥスは、血ち反吐へどを吐はきながらゲートへと向かって吹ふき飛んでいく。

「グッ……。なんの！」

　ティトゥスは宙でくるりと回転し、ゲートを蹴けり上げて跳ちよう躍やくすると、上空からウィンフィールドに襲いかかった。

ウィンフィールドは即そく座ざにバックステップを踏む。

閃せん光こうのような煌きらめきが鼻先をかすめ、続いて目の前に黒の侍が現れた。彼は攻こう撃げきの手を休めず、飛び退のいたウィンフィールドを追いかけて地面を蹴った。

　左の刀が振り上げられる。それはウィンフィールドの顎あごへと迫せまるが、彼は上半身を反らし、天てん井じようを見上げるような感じで刀を避ける。

　ティトゥスの動きは止まらない。右の刀でウィンフィールドへと迫っていく。

（……かわせない！）

　そう判断したウィンフィールドは拳を繰くり出し、迫りくる刃やいばの腹を打った。右の刀はティトゥスの手を離はなれて床へと転がるが、彼は気にすることなく左の刀で薙ないでくる。

「殺やった！」

　左から右へと流れてくる刃がウィンフィールドの顔面へと迫る。

　だがそれは彼の顔面を両断することはなかった。

「な、なんと！」

　ティトゥスは驚きよう愕がくし、目を剝むいた。

　彼の刀はウィンフィールドに受け止められていたのである。

　そう。彼は歯で刃を受け止めていたのだ。

　理解できぬ状じよう況きように混乱したのか、一いつ瞬しゆん、ティトゥスに隙すきが生まれた。

　ウィンフィールドはそれを見み逃のがさず、拳を突つき出した。ティトゥスが後ろへと飛び退いたため拳は届かなかったが、その際、彼は手にしていた刀を放ほう棄きしていた。

「刀を歯で受け止めるとは……。恐おそろしいヤツめ」

　ティトゥスは半ば呆ぼう然ぜんとつぶやいた。

「今のは美しくなかったですな。見苦しいところを見せてしまいました。申し訳ございません」

　ウィンフィールドは刀を吐き捨てると、ティトゥスと向き合う。

「どうします？　貴方の得え物ものは失われてしまいましたが」

　勝利宣言にも似た発言だが、それを意識するには早すぎた。怯ひるむ様子すらみせないティトゥスの姿からもそれと判わかる。

　ティトゥスは両の掌てのひらを広げ、呻うめきにも呪じゆ文もんにも似た言葉を吐き出した。

　彼の両の掌が裂さけていく。

（あれは……刃？）

　ウィンフィールドが見守る中、裂けた掌から銀に輝かがやく刀身が姿を現す。それはやがて二振ふりの刀となり、ティトゥスの手中に収まった。

「やれやれ。これだから魔ま術じゆつ師しは非常識で困りますな」

　ウィンフィールドは肩かたをすくめると、ファイティングポーズを取った。

　それにティトゥスが応じる。

　空気が張りつめていく。

　闘とう気きは二人の間で衝しよう突とつし、緊きん張ちよう感かんは否いや応おうなく高められていった。

　ウィンフィールドの精神が研とぎ澄すまされていく。それはティトゥスの動きを的確に把は握あくし、ほんの僅わずかな筋肉の動きですら察知できるほどである。

　―いつ触しよく即そく発はつに近い状況下で、不意にウィンフィールドは微笑ほほえんだ。

「……？」

　眉み間けんに皺しわを寄せ、様子をうかがってくるティトゥスに対し、ウィンフィールドは体の力を抜ぬいた。構えも解く。両手をだらりと垂らし、向けられた闘気のすべてをいなしていく。

　やる気のない態度に、ティトゥスの表情が怒いかりへと変わって

いくのが解わかった。

「お主ぬし、拙せつ者しやを愚ぐ弄ろうする……」

そこまで口にしてから、ティトゥスはハッとする。

「それは無む為いの構え」

構えを解き、闘気を消すことで、相手に次の行動を予測させないのが無為の構えである。武術を突き詰つめた者のみがたどり着く窮きゆう極きよくの構えだ。

「この国にも、そのような戦法を採とる者がいるとはな……。面おも白しろい。誘さそいに乗ろう」

極限の状況を楽しんでいるのだろう。ティトゥスは笑えみを浮うかべると、さらなる闘気をみなぎらせていく。それは司令室内を侵しん食しよくしていき、その異様な気に当てられた何人かのオペレーターが失神する。

ティトゥスが動く。

「御み首級しるし、頂ちよう戴だい！」

神の域に達する走法、そして剣けん術じゆつを駆く使しして迫るティトゥス。

だがウィンフィールドは微び動どうだにしない。

ティトゥスの動きを追いかけていたウィンフィールドの目が、きらりと光った。

「奥おう義ぎ――全休きゆう符ふ・無音」

時が止まり、辺りが静せい寂じやくに満たされる。

刹せつ那なの永遠。

そして――。

ウィンフィールドの拳こぶしがティトゥスの体へと直ちよく撃げきする。

骨を砕くだく確かな感かん触しよく。

そして内臓を叩たたき潰つぶす嫌いやな感覚が拳に伝わってきた。

ティトゥスは体を折り曲げたまま宙へと舞まっていく。天てん井じようで磔はりつけにされた彼は、次いで地面へと激げき突とつしていく。ティトゥスの口から鮮せん血けつが迸ほとばしった。

「ッ……ッ……ァァ……ッ！」

ティトゥスは事切れずにいるのが不思議なほどのダメージを被こうむっていた。体は奇き妙みような方向にねじ曲がり、目の焦しよう点てんはまるで定まってはいない。彼の瞳ひとみにはウィンフィールドの姿すら映ってはいないだろう。

「これがボクシングですよ、ミスター・ブシドー。刹那の時間を見み極きわめる動体視力と速度。この二つを以もつてして、初めて神域のクロスカウンターを可能とするのです」

だがウィンフィールドの説明も、ティトゥスの耳には届かないだろう。

拳に残った確かな感触が、彼に初めて勝利を確信させる。

「片付きましてございます、司令」

ウィンフィールドは拳を収めると、振り返って瑠璃へと頭を下げた。

「ウィンフィールド……」

瑠璃はホッとしたのか、安あん堵どの溜ため息いきをついた。

だが勝利の美酒に酔よいしれている暇ひまはない。切せつ迫ぱくした状況に変わりはなく、一刻も早く対処する必要があった。

「惚ほうけている時間はありません。すぐにでも部隊を再編制して――」

そこまで口にしたウィンフィールドだが、背後で立ち上った妖よう気きに気づいて振り返った。

「まだやるおつもりですか？」

　ウィンフィールドは刀を支えに起き上がろうとしているティトゥスへと声をかけた。だが彼は答えず、代わりに剣けんを構えてみせた。

「それが答え、と言うわけですか」

　ウィンフィールドの表情は自然と厳しくなった。

　油断などできはしない。相手が満まん身しん創そう痍いであろうが関係はなかった。

「ふふ……くふふふ……くふふふ……くふはははは」

　ティトゥスは笑っていた。戦いへの歓かん喜きで顔は歪ゆがみ、いまだ焦点が定まらぬ瞳は狂きよう気きに染まっている。飽あくなき戦いへの渇かつ望ぼうが彼を支配していた。

（修しゆ羅ら、ですか――）

　ウィンフィールドは覚かく悟ごを決める。

「申し訳ございません。もう少しだけ時間がかかりそうです」

　ウィンフィールドはファイティングポーズを取った。ティトゥスも刀を構えて応じる。

　再びぶつかり合う闘気と闘気。

　互たがいに油断なく構え、相手の動きに注視する。

　ふと、ティトゥスが笑った。

　それがキッカケとなって時が動き出す。

　ティトゥスは口から血を滴したたらせながら疾しつ駆くしてくる。走ることすらままならぬ体が風となった。

（先ほどよりも速い!?）

　だがウィンフィールドも負けてはいない。疾しつ風ぷうと化してティトゥスへと突つっこんでいく。

（二撃げきかわせば私の勝ちです！）

そのことはティトゥスとの戦せん闘とうの中で体が覚えていた。

神速で迫せまる右の刀がウィンフィールドの左の肩かた口ぐちへと向かう。袈け裟さ切ぎりにされる寸前でそれを避さけた彼だが、スーツが裂さかれ、ネクタイは切り落とされてしまう。

さらに加速していく。

周囲の光景がスローモーションのように流れ始める。

（思考に体がついていくだろうか……）

ティトゥスの第二撃が放たれた。

左の刀の切っ先が喉のどへと目がけて突き出される。それは神速で動いている中にあって、さらに速く打ち出されていた。その神かみ懸がかり的な一撃はウィンフィールドの動体視力をも凌りよう駕がし、ついには視界から剣けん先さきが消失する。だがウィンフィールドの思考と反射速度は、ティトゥスのそれさえも上回っていた。

頬ほおの横を殺気を孕はらんだなにかが通り過ぎていく。頬の皮が一枚、横方向に裂けた。血が滲にじみ、流れていく。だが、それだけだ。

（──もらいましたよ！）

ほんの一いつ瞬しゅんだが、ティトゥスは完全な無防備な姿を晒さらした。

神速の領域でその隙すきは決定的であり、ウィンフィールドは必殺の威い力りよくをこめた拳こぶしをティトゥスの顎あごへと向けて突き上げた。

まったく無む駄だのない完かん璧ぺきな動きである。かわせるわけがなかった。

だが──。

あり得ないものがウィンフィールドの眼前で煌きらめく。

その銀の光は予期せぬタイミングで、予期せぬ方向から現れた。

だがその理由に行き着いたときには遅おそすぎた。

ウィンフィールドの意識は消失し、暗転した。

+

シェルターに絶望の嵐あらしが吹ふき荒あれていた。

惨ざん殺さつにつぐ惨殺。

陵りよう辱じよくにつぐ陵辱。

避ひ難なん民みんは蹂じゆう躙りんされ続け、逃にげ惑まどうばかりである。

それは戦術的には何ら意味を持たぬものであり、ただひたすら殺さつ戮りくを楽しむための行こう為いでしかなかった。

シェルターに現れた仮面をつけた道どう化け師しは、手から伸のびたかぎ爪づめを使って人を切り刻んでいく。

そこに差別はない。

老ろう若にやく男なん女によ、あらゆる死体が積み上げられていく。

彼が通り過ぎたあとには物言わぬ骸むくろばかりが残されていた。

「うーん！　いいわいいわサイコーよ、貴方あなたたちッ☆　愛している！　愛しているわよーん♪」

ティベリウスは笑いながら殺戮を続ける。

思うがまま、気の向くまま──。

ある者は裂き、ある者は千切り、またある者は押し潰つぶしてい

く。

その度たびに絶望的なまでの叫さけびが上がり、それを目に、そして耳にした者たちは恐きよう怖ふのあまりその虜とりことなった。

混乱をきたした人々は、ティベリウスの魔まの手から逃げるべく右往左往する。

そんな最悪と呼ぶに相応ふさわしい状じよう況きようの中、ライカは子供たちを背に隠かくし、迫りくる驚きよう異いを睨にらみつけていた。

逃げることも考えた彼女だが、この混乱した状況下では逆に危険である。恐きよう慌こう状態におちいった人々が子供たちに配はい慮りよすることはない。踏ふみ潰されて怪け我がをするか、最悪、殺されてしまうだろう。

しかし、このままジッとしているわけにもいかなかった。間もなくティベリウスがやってくる。そのときなにが起きるかは考えるまでもない。

メタトロンへと変神することができれば、ティベリウスに立ち向かうこともできるだろう。

しかし――。

（メタトロンになったら……。子供たちに正体がバレたら――）

それだけは避けねばならなかった。

皆みなを欺あざむき続けてきたことが知れたら、二度とあの愛いとしい日々は戻もどってこなくなる。

ただひたすら辛つらいだけだった幼少期を乗り越こえ、やっと手に入れたちっぽけな幸せ。

どこにでもある、ありふれた日常。

それでもライカにとってはかけがえのないものであり、それを手放すなど考えられなかった。

だがそんな小さな幸せが音もなく崩くずれ始めている。

血も涙なみだもない道化師によって―。

許せなかった。

そんな理り不ふ尽じんを許しておくわけにはいかなかった。

（けど……）

避難民が押し寄せてくる。パニック状態におちいった彼らは、ティベリウスから逃のがれるべく我先にと駆かけてきた。

そこに人間性などありはしない。生き残るために人を押し退のけ、倒たおれた者は踏み越えていく。

人の波が子供たちに襲おそいかかる。ライカは子供たちを守るための盾たてとなった。

人々はライカを蹴けり、殴なぐり、踏みつけていくが、彼女はじっと耐たえる。彼らに罪はない。自分の命を守るために必死なだけだ。

ライカは耐えた。それに耐えられるだけの体ではあるが、痛みを感じないわけではない。生身の体にはいささか堪こたえる。それに先のサンダルフォンとの戦いで負った怪我にも響ひびいていた。

「おやおやまあまあ。人間ってーのは素す敵てきに醜みにくい生物ねえ。弱い者を置き去りにして逃げるなんて☆」

殺戮を重ねながらやってきたティベリウスの目が、ライカたちを捕ほ捉そくする。

「まあ、みんな可愛かわいらしいわあ♪」

ティベリウスは涎よだれを啜すすり上げると、蹂躙し、陵辱し、嬲なぶり、慰なぐさみ者ものにしようという意思をありありと浮うかべながら一歩、また一歩と、絶望を携たずさえながら近づいてくる。

「シスターも美人だしね。う～ん、嬉うれしいわあ♪　さあ、アタシと遊びましょう☆」

極上の獲え物ものを前にしたせいか、ティベリウスの口は酷ひどく滑なめらかだ。

彼は体から排はい出しゆつさせた何本もの消化器官を触しよく手しゆのように蠢うごめかしながら、じわりじわりと距きよ離りを詰つめてくる。

未知の恐怖に恐おそれおののく子供たち。そんな苦痛に歪ゆがんだ表情は、ティベリウスに大きな興奮と喜びをもたらした。

「くっ……」

ライカは呻うめくと、ありったけの憎にくしみをこめてティベリウスを睨みつける。

「ライカ姉ちゃん……」

「大だい丈じよう夫ぶ。大丈夫よ、みんな」

震ふるえる子供たちを庇かばいながら、後ずさるライカたち。

「ま。健けな気げでイイわあ☆」

ティベリウスの笑い声がライカの憎ぞう悪おをかき立てる。

もはやこれまでと、変神する覚かく悟ごを決めたときだ。覇道財ざい閥ばつの警備兵が重火器を手になだれこんできた。

彼らは速すみやかに武器を構えると、即そく座ざに攻こう撃げきへと移行する。

爆ばく音おんが轟とどろき、ティベリウスを中心にもうもうとした煙けむりが上がった。

（今のうちに……）

ライカは子供たちを連れ、どこへ続いているかも定さだかではない通路を駆けていく。

依い然ぜん、背後からは雷らい鳴めいにも似た銃じゆう声せいが聞こえてくる。

ある程度の距離を取ってから振ふり返ると、警備兵が後退する姿

を確かく認にんすることができた。

　端はなから倒そうとは思ってないのだろう。警備兵は銃を乱射しながら後ずさり、隔かく壁へきを下ろした。これでしばらくは足止めができるだろう。

　だがティベリウスはライカの想像を上回る理不尽さを披ひ露ろうした。

　床ゆかに円形の黒いシミのようなものが浮かび上がったかと思うと、そこからティベリウスが湧わき出してきたのである。

　予期できない箇か所しよから現れたティベリウスに対し、警備兵は大いに動どう揺ようし、そして混乱した。だがさすがに訓練されているらしく、彼らは即座に態勢を立て直して攻撃へと移った。

　しかし、一度乱れた精神状態を完全に立て直すのは難しい。

　僅わずかに生じた陣じん形けいの乱れと、微び妙みように遅おくれた攻撃が警備兵に悲劇をもたらした。

　ほぼ一いつ瞬しゆんで彼らは殲せん滅めつされ、血の海へと沈しずんだ。

「痛かったわあ。痛かったわよ、アナタたち☆」

　ティベリウスはかぎ爪づめに付着した血液を振り落とすと、指をパチンと鳴らした。

「せめてアタシの役に立ってちょうだいね。それがせめてもの罪つみ滅ほろぼしというものよ☆」

　殺されたはずの警備兵の骸むくろが起き上がる。

　まだ死して間もない遺体にもかかわらず、早くもそれは腐ふ敗はいし始めていた。眼がん窩かが落ち窪くぼみ、眼球が汚お濁だくとなって頬ほおを伝っていく。それは望まぬ姿を強しいられた警備兵らの涙のようでもあったが、もはや彼らに心はない。

　失われた瞳ひとみで見つめられたライカは、悪意に満ちたその視線に震え上がった。

ゾンビと化した警備兵が動き始める。

彼らは呻き、喚わめき、絶ぜつ叫きようしながら、ライカたちの下もとへと近づいてきた。

腐敗臭しゆうが鼻を突つく。酷い胸焼けで吐はき出しそうになるが、グッと堪こらえる。

（この子たちは……この子たちの未来は……絶対に守ってみせる）

ライカは子供たちを抱だきしめると、悲ひ壮そうなる決意を胸に抱いだいて立ち上がった。

「あらぁん？　シスター、アナタがアタシのお相手をしてくれるのかしらん？」

ティベリウスは触手を鞭むちのように振るうと、先を歩いているゾンビたちを押し退けて、ライカの下へと歩いてくる。

彼の視線を一身に受けた彼女は、それに犯おかされ、嬲られ、陵りよう辱じよくされていた。

蛆うじにまみれた触手が迫せまってくる。ライカはそれを右手で鷲わしづかみにした。

「あぁん。なにするのお？」

ティベリウスは腰こしをくねらせながら、喘あえぐような声を発した。

もちろん彼を悦よろこばせるつもりはない。ライカは握にぎりしめた腸を力任せに引っぱった。ぶちぶちと内臓が引きちぎられていく嫌いやな感かん触しよくが掌てのひらに伝わってくる。次いでティベリウスが悲鳴を上げた。

「ぎ、ぎゃあああああああっ！」

耳を塞ふさぎたくなるような絶叫が辺りに木こ霊だまする。

「おまえは人を弄もてあそぶのか。おまえたちはまた、人の命を弄ぶのか……」

ライカは明確な殺意を抱き、ティベリウスを見み据すえた。

そこにいるのはシスターとしてのライカではない。悪に敢かん然ぜんと立ち向かう戦士としての彼女だ。

ライカの変化に真っ先に気づいたのは子供たちだった。彼らは不安感をあらわにしながらライカの姿を見上げている。

ティベリウスも彼女の変化に気づいたらしく、先ほどまでのおちょくるような気配は消え失うせていた。彼は引きちぎられた腸を体内へと戻もどすと、かぎ爪を伸のばしてライカと向かい合う。

猛もう烈れつなプレッシャー、そして尋じん常じようではない殺意を向けられたライカだが、ティベリウスを凝ぎよう視ししたまま微び動どうだにしない。それどころか精神を冒おかすほどの狂きよう気きを押し返してさえいた。

「ア、アンタ、いったい何者よ！」

ティベリウスの問いにライカは答えない。だが、態度で示した。

「変・神」

ライカが叫さけぶと、体内に眠ねむっていた機関が活動を開始する。

それは膨ぼう大だいな魔ま力りよくを汲くみ上げ、生成していく。おびただしい量の光の粒りゆう子しが体から放出される。それはライカの体を包みこみ、白き鎧よろいを形成していった。背に純白の翼つばさが現出し、顔が仮面で覆おおわれていく。

「アンタは……！」

このような場所で怨おん敵てきと相対するとは思わなかったのだろう。ティベリウスは舞まい降りた天使の姿に愕がく然ぜんとしていた。

ライカは―いや、メタトロンは圧あつ倒とう的な密度を持つ悪意の塊かたまりをティベリウスへと放った。もはや湧き上がってくる怒いかりを抑おさえることはできないし、抑えるつもりもない。

子供たちが息を飲むのが判わかる。

ちくりと胸が痛み、もう二度とあの穏おだやかな日々は戻らないのだと覚かく悟ごした。

だが、それで良かったのだとライカは思う。子供たちの未来が守れるのであれば、自分が憎にくまれようと本ほん望もうだった。

それに罪人は罪人のあるべき場所へと帰る必要がある。それが今なのだ。

メタトロンは両手にビームセイバーを現出させ、怯ひるんでいるティベリウスへと特とつ攻こうをかけた。邪じや悪あくで満ちたシェルター内を浄じよう化かするかのように白の天使が躍おどり出る。メタトロンはビームセイバーを一いつ閃せんさせ、ティベリウスの右みぎ腕うでを斬きり落とした。

「ゲギャアアアアァァァァァーッ！」

ティベリウスは左腕で傷口を押さえこむと、数歩、後ずさった。

「そう……。アンタがメタトロンだったの……」

ティベリウスは憎にく々にくしげにつぶやいたかと思うと、臓ぞう腑ふを排はい出しゆつし、それを絡からめ、肉の槍やりにしてメタトロンへと突き出した。

だがそれはメタトロンの仮面をかすり、その一部を割るだけだ。彼女は仕返しとばかりにビームセイバーを振ふるい、肉の槍を分断する。

「面おも白しろくないわ……。不ふ愉ゆ快かいよ、アンタっ！」

ティベリウスの恫どう喝かつには耳も貸さず、メタトロンはビームセイバーから砲ほう身しんへと武器を変える。そして躊ちゆう躇ちよなく撃うった。それはティベリウスの仮面を砕くだき、胴どう体たいを剔えぐり、足に風穴を開けていく。傷口から汚お水すいにも似た臭くさい血液が溢あふれ出す。

「ぐぎぃひゃあああああぁぁぁぁっ！」

割れた仮面の下から、半ば白骨化した顔が表出する。それは苦く悶もんに満ちており、だがすぐさま憤ふん怒ぬの表情へと変化を遂とげていく。

「……さすがはムーンチャイルド計画の成功例。大した戦せん闘とう能力じゃないのぉ」

　床ゆかに落ちた腕や肉にく片へん、触しよく手しゆの一部が脈打ち始める。それはやがてティベリウスの下へと戻り、再び彼の一部となった。

（化け物め……）

　胸中で吐はき捨てるが、理り不ふ尽じんであるがゆえに魔ま術じゆつ師しなのである。メタトロンはそのことを嫌と言うほど知っていた。

《この程度では殺しきれないか。ならば……灰すら残らぬように消し飛ばしてやる！》

　メタトロンは砲ほう口こうをティベリウスへと合わせるが、それから逃のがれるように彼は床へと沈しずんでいく。

「怖こわい、怖い。どーもアタシ、不利っぽいみたい。悔くやしいけど、ここは退ひかせてもらうわ♪」

《待て！》

　メタトロンはビーム砲を撃ち放つが、すでにティベリウスは床の中へと消えていた。

《ちっ……》

　悔くやんでも仕方がなかったが、退けることができただけでも今は満足だった。

　だがなにを思ったのか、再びティベリウスは姿を現す。

「あ、そうそう」

　彼は床から顔を出してメタトロンを見上げた。

「メタトロンちゃん？　アンタが贔ひい屓きにしている九郎ちゃん、今ごろクラウディウスちゃんに……うふふ」

《!?》

「おーほっほっほっほっ！　じゃあねぇ、メタトロンちゃん。
まぁぁぁぁぁぁた、会いましょぉぉぉぉねぇぇぇぇぇん♪」

　メタトロンはビーム砲を撃ちこむが手応てごたえはない。今度こそティベリウスも撤てつ退たいしたようだ。

《おのれ……》

　メタトロンは吐き捨てる。

　不意に静せい寂じやくが訪おとずれた。

　不気味なほどの静寂である。

　眼前の脅きよう威いは去り、約束された死を回かい避ひすることができた。だが、彼女の心に平へい穏おんが訪れることはない。

　振り返ることができなかった。

　そこにいる子供たちの姿を見つめる勇気がなかった。

　だから、立ちつくすしかなかった。

　いや、それすらも許されはしないだろう。罪人は罪人らしく、あるべき場所へと帰らねばならない。

　ふと、鋼鉄の指先に触ふれるものがあった。目を向けると、紅葉もみじのような小さな手がメタトロンの──ライカの手を握にぎりしめていた。穢けがれを知らぬ無む垢くで一いち途ずな眼まな差ざしが彼女へと向けられている。

　その瞳ひとみに映るのは、白い天使の姿。

　偽ぎ善ぜん者しやの姿である。

　己おのれの忌いま々いましい姿に目を背そむけたくなったが、できなかった。自分を見つめる子犬のような瞳が逃にげ出すことを許さなかったのである。

　気がつくと、ライカの周囲には子供たちが集まっていた。そこでは大輪の花のような見事な笑みが咲さき誇ほこっている。

《みんな……》

ライカは屈かがみこむと、子供たちを抱だきしめた。

鋼はがねの体で、愛いとおしむように、そっと──。

（帰る場所は、ここにある）

+

その瞬しゆん間かん、瑠璃は悲鳴を上げていた。

ティトゥスの太刀たちを立て続けに浴びたウィンフィールドの体から鮮せん血けつが迸ほとばしる。その勢いは激しく、天てん井じようすら濡ぬらすほどである。

ウィンフィールドの体が前に傾かたむいていく。彼は自らが流した血液の中に沈み、身じろぎ一つしない。肌はだは異常なほど白くなり、急激に精気を失っていく。

そんなウィンフィールドの姿を、ティトゥスは愉ゆ悦えつに歪ゆがんだ顔で見下ろしている。彼の体は返り血を浴びて真っ赤に染まっており、修しゆ羅らのごとき異様な姿を晒さらしていた。

「すべてを捨てることができぬお主ぬしと、力のためにすべてを捨てた拙せつ者しや。結局は、その差が明暗を分けただけのことよ」

血ち塗ぬられた地べたでピクリともしないウィンフィールドに対し、ティトゥスは言葉を投げかけた。

「ウィンフィールドォォォォォォ！」

絶ぜつ叫きようが瑠璃の咽喉のどから迸り、我を忘れるほどの沈ちん痛つうな魂たましいの叫さけびが室内に拡散していく。

希望がまた一つ、消えようとしていた。そのような理不尽を黙だまって見過ごすわけにはいかない。

瑠璃はウィンフィールドを助けるべく行動に移った──はずだった。だが気持ちに反して体は動かない。絶対的な力の前に体がすく

んでいた。

　それでも自分を奮ふるい立たせ、足を運ぼうとしたときである。瑠璃はティトゥスから刺さし殺しかねないほどの鋭するどい視線を浴びて戦せん慄りつした。

　十三階段を力ずくで上らされていくかのような絶望感が全身を支配していく。いっそのこと絶望し、自害して果てたほうがどんなに楽かしれない。

　瑠璃は呻うめくと、一歩も動けなくなった。

　そんな彼女を守るべく動き出したのは、僅わずかに生き残った警備兵である。オペレーターも業務を放ほう棄きし、武器を手に動き出していた。

　だが相手はアンチクロスである。たとえ半死半生であっても、重火器だけで勝てるかどうかは怪あやしい。

　ティトゥスが刀を握り直し、前へと進み出ようとしたときだ。精せい根こん尽つき果てたのか、彼は前のめりに倒たおれてしまった。そしてそれっきり動かなくなる。

　全員、その様子を呆ぼう然ぜんと見守っていたのだが、すぐに瑠璃は我に返った。

「救護班を！　早くウィンフィールドを……！」

　瑠璃の一声で全員、正気を取り戻もどし、それぞれの役務を再開する。

　救護班は即そく座ざに駆かけつけ、担たん架かでウィンフィールドを運び出していく。瑠璃はそれを確かく認にんすると、気を失っているティトゥスへと目を向けた。彼は銃じゆうを手にした数人の警備兵に囲まれており、瑠璃の命令一つでトドメを刺せる状じよう況きようである。

　ティトゥスの処しよ遇ぐうについて考えあぐねていたときである。

　どこからともなく虫の羽音が聞こえてきた。

一匹ぴきではない。何千、何万という虫の羽音は重なり合ってノイズと化し、司令室の空気を振しん動どうさせていく。鼓こ膜まくが破れてしまうほどの羽音に瑠璃は耳を塞ふさいだ。

「うふぃふぃふ……」

その声は唐とう突とつに響ひびいてきた。

耳を塞いでいるにもかかわらずその声はやけに鮮せん明めいで、粘ねん着ちやく力りよくが強く、心に舌を這はわせるような声こわ音ねが不気味だった。

笑い声は、いよいよ大きくなっていく。

「うふぃふぃふぃふ……ふほほほほほ……おほほほほほ……！」

瑠璃はその声に覚えがあった。忘れようにも忘れられぬ鮮明な記き憶おくが、瑠璃の脳のう裏りに浮うかび上がる。

「おーっほほほほほほほほほほほほほほほほほほ！　虫ワーム、蟲マゴツト、妖ウエル蛆ミス！」

床ゆかに闇やみ色をした円形のシミのようなものが浮かび上がってきたかと思うと、そこから道どう化け師しが姿を現した。ティベリウスである。途と端たんに臭しゆう気きと悪意が部屋に満ちていく。

「ごめんねぇ。本当はじっくりと遊んであげたいんだけど、九郎ちゃんの相手もしなくちゃいけないのよぉん。だから、ちゃっちゃとすませちゃうわよ？」

ティベリウスが瘴しよう気きを孕はらんだ声を発したのと同時に、彼の足あし下もとから闇が流れこんでくる。それは爆ばく風ふうとなって司令室内で荒あれ狂くるい、あらゆるものを冒おかし、壊こわしていった。

そしてその中から巨きよ大だいな質量が顕けん現げんし始めた。

「ベルゼビュート！」

ティベリウスの誇ほこらしげな声が轟とどろく中、瑠璃の意識は急速に遠ざかっていく。

そして心は闇で満たされた。

+

九郎とエルザは遁とん走そうするクラウディウスを追いかけていた。

全身、傷だらけであり、脇わき腹ばらに弾だん丸がんを食くらっているにもかかわらずクラウディウスとの距きよ離りは一向に縮まらない。それどころか少しずつ離はなされていくようにさえ思えた。

だがそれも当然だ。ハスターの力を有するクラウディウスである。その魔ま力りよくを行使して飛ひ翔しようする彼に足で追いつけるわけがない。

「くそっ！　速すぎる！」

悪態をつきながら懸けん命めいに走るが、己おのれの気持ちに体がついてこない。息は上がり、足は笑い始めている。魔術師マギウスのときには感じなかった肉体的な疲ひ労ろうが、容よう赦しやなく九郎に襲おそいかかってきた。

（三流探たん偵ていには、これが限界だってのか）

歯を食いしばり、さらに走る。だが体力の消しよう耗もうはいかんともしがたく、走力はがた落ちした。

「ダーリン、飛ばすロボよ！」

エルザは九郎の腕うでをつかむと、廊ろう下かを一気に駆け抜ぬけていく。九郎の肉体は限界を超こえ、両足の筋肉が悲鳴を上げる。筋きん繊せん維いが音を立てて切れていくような錯さつ覚かくにおちいりながらも、足は強制的に前へ前へと押し出されていく。

（あのクソガキ、どこに逃にげるつもりだ!?）

二人の先を行くクラウディウスは、なにかを手た繰ぐりながら移

動しているように見受けられた。

（でも、どこに？）

　疑問を抱いだいた瞬しゆん間かん、九郎は閃ひらめいた。

　クラウディウスは通路に漂ただよう微かすかな魔力をたどって走っていたのである。

　そしてその源は―。

「クソガキ、デモンベインが狙ねらいか！」

　そう。クラウディウスはデモンベインが発する魔力を頼たよりに移動していたのである。

　いくらデモンベインでも搭とう乗じよう者しやがいなければ力を解放することはできない。だからその前に破は壊かいしてしまうつもりなのだろう。

　その事実に気づいた九郎は回転式イタ拳銃クアを抜いてクラウディウスへと狙いを定める。

「ちっ。しつこいんだよ、このストーカー野や郎ろう！」

　クラウディウスは振ふり返ったかと思うと、手にしていた十数個のベーゴマを放った。

「ロボっ！」

　エルザは術式魔ま砲ほうを盾たての代わりにして、向かってくるベーゴマをすべて受けきった。だがその間にクラウディウスとの距離が開いてしまう。

「ちくしょう！　急ぐぞっ、エルザ！」

　エルザはうなずくと、九郎の手を取って爆ばく走そうを開始した。もはや走るというレベルを超ちよう越えつし、跳はねるような感じで九郎とエルザは進んでいく。

　格納庫の入り口が見えてきた。すでにクラウディウスはデモンベインのコックピットの前にいた。

「や、やべえ！」

　九郎は二挺ちようの魔ま銃じゆうを構えると、クラウディウスへと向けて立て続けに引き金を引いた。だが彼は、そのことごとくを防ぼう御ぎよ陣じんで防いでいく。

　ついにクラウディウスはコックピットの前にあるステップへと降り立った。

「ゲェーヒャハハハハハハハッ！　ボクの勝ちだ、大十字九郎ーッ！」

　クラウディウスが勝ち誇ったときだった。

　コックピットのハッチがひとりでに開いた。

　続いて響ひびいていくるウェストの声。

「ようこそ。我わが輩はいのスウィートルームへ」

　よく見ると、コックピットの中でウェストが巨大なギターケースを抱かかえていた。そのギターケースの凶きよう暴ぼう性は九郎が一番よく知っている。

「レッツ・プレイ」

爆音とともにギターケースからロケット弾だんが発射される。

「て、てめえ……」

無防備な姿を晒さらしていたクラウディウスにロケット弾が直ち

よく撃げきする。クラウディウスを中心とした大爆ばく発はつが起こり、彼は全身から煙けむりを吐はき出しながらコックピットから転げ落ちていった。そのまま格納庫の床ゆかに激げき突とつするかにみえたが、彼は床から数メートルの位置で踏ふみとどまると、頭上を見上げる。そこにはハッチから身を乗り出し、豪ごう快かいな高笑いを披ひ露ろうしながらエレキ・ギターを掻かき鳴らしているウェストの姿があった。

「裏切り者がぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

　再び宙へと舞まい上がろうとするクラウディウスだが、それはエルザが許さなかった。彼女は術式魔砲を発射し、今度こそクラウディウスを床へと撃うち落とした。

「ぐがあああああああああああああああッッッ！」

　転げ回りながら悶もん絶ぜつするクラウディウス。

　それでも死には至らず、彼は片かた膝ひざをつきながら身を起こした。

　だが、それも一いつ瞬しゆんのことだ。すぐにクラウディウスは四よつん這ばいになると、むせ返るような咳せきをした。口から鮮せん血けつが吐き出され、床が赤く染まる。

　九郎はクラウディウスに魔銃を向けた。

「これで……終わりだ」

　引き金に指を運んだときである。

　九郎はクラウディウスの体から湯気のように立ち上る魔ま力りよくを察知した。それは今の彼の状態からは考えられないほどの強大な魔力である。

「ぐあ……あああ……イあ……イア……はすタァぁぁ……ァァ！」

　クラウディウスの周囲に瘴しよう気きを孕はらんだ突とつ風ぷうが巻き起こった。それは瞬またたく間まに台風へと姿を変えていく。

　天てん井じようが崩ほう壊かいし始めていた。魔力を孕んだ風が

そこに亀き裂れつを生じさせ、壊こわしていく。

「アイ！　アイ！　はすトゥゥゥゥるゥゥゥゥ！　ロードビヤーキーィィィィィィィ！」

「なっ！」

　格納庫内に爆音が轟とどろいた。空気が振しん動どうし、内部が激しく揺ゆらぐ。

　そして―。

　台風の中心に、それは顕けん現げんした。

　鋼はがねの巨きよ人じん。

　機械仕じ掛かけの神。

　鬼デウ械ス・神マキナ・ロードビヤーキーである。

　その圧あつ倒とう的な存在感は、九郎を打ちのめすには十分すぎた。

　だが、挫くじけてなどいられない。九郎は必死の形相で気持ちを立て直しながら、デモンベインの姿を確かく認にんする。

　デモンベイン。

　魔まを断たつ剣けん。

　まがい物とは言え、デモンベインもまた神を模して造られた存在である。その姿は揺るがなく、強風をものともしない。

「ロードビヤーキー！　デモンベインをスクラップにしろぉぉぉぉぉぉぉ！」

　台風の中心にいたクラウディウスの体が、光に包まれていく。それはロードビヤーキーに吸いこまれていった。あれほど荒あれ狂くるっていた風の渦うずは跡あと形かたもなく消え去り、代わりに鬼械神の姿が浮うかび上がる。ロードビヤーキーの瞳ひとみに光が灯ともった。

「やべえ！　デモンベインがっ！」

　搭とう乗じよう者しやがいない今、デモンベインは木偶でくの坊ぼうでしかない。攻こう撃げきなどされたら一撃で片づいてしまうだろう。

　九郎とエルザはデモンベインの下もとへ走り出す。

『ヒャーッハッハッハッ！』

　狂ったかのような笑い声とともに、ロードビヤーキーの手中にライフルが顕現する。それはライフルを構えると、無防備な姿を晒しているデモンベインへと銃じゆう口こうを向けた。

「うおおおおおお！　ヤバいのであぁぁぁぁる！」

　ハッチの上で諸もろ手てを挙げながら右往左往するウェスト。

「博士ーっ！」

　エルザはロードビヤーキーへと向かって術式魔ま砲ほうを連射するが、その動きを止めるほどの威い力りよくはない。九郎は魔ま銃じゆうの銃口を向けたが、術式魔砲が効かないのであれば推おして知るべしである。それでも九郎は弾たま切れになるまで弾だん丸がんを撃ちこみ、さらに走った。

（デモンベインを……やられるわけにはいかねえんだよ）

　せっかく灯った希望の光を、こんなところで吹ふき消されるわけにはいかなかった。

　だが状じよう況きようを打破する術すべがない。

　九郎は焦しよう燥そう感かんで頭がどうにかなりそうだった。

　ライフルの銃口が凶きよう悪あくな光を帯びた。光が集つどい、集約し、強大な力を生み出していく。

『ボクの勝ちだ、大十字九郎！　てめーはもう、おしまいだあ！　ヒャハハハハッ！』

　残ざん酷こくな笑えみを浮かべるクラウディウスの姿が目に浮かぶようだ。

　九郎は諦あきらめそうになる自分を勇気づけ、叱しつ咤たし、絶望感を振ふり払はらいながらデモンベインの下へと疾しつ走そうする。

　その瞬しゆん間かんが訪おとずれるまでは、諦めるわけにはいかない。その瞬間が訪れない限り、勝機は残されている。

「うおおおおおおっ！」

　九郎は雄お叫たけびを上げながら突とつ進しんし、そのあとにエルザが続く。肉体は限界を超こえ、体の各所──いや、細さい胞ぼうレベルで悲鳴が上がっていた。心臓は暴走寸前であり、止まりかねないほどの勢いで拍はく動どうしている。酸素が行き渡わたらないせいか思考力は落ち、目が白く霞かすむ。それでも不思議と足は前に出た。

　それは突とつ然ぜんの出来事だった。

　後方から疾しつ風ぷうが吹き抜ぬけてきたかと思った次の瞬間、白い閃せん光こうがロードビヤーキーへと向かって伸のびていった。盛せい大だいな爆ばく音おんとともにロードビヤーキーは体勢を崩くずし、直後に発射されたライフルの弾丸は軌き道どうを逸それ、デモンベインの左脇わきを通り抜けていく。

『な、なんだァァァァァ!?』

　クラウディウスが驚きよう愕がくの声を上げていたが、九郎もまた驚おどろいていた。

《今のうちだ、大十字九郎！》

　九郎の目の前には、まさに疾風のごとく現れた白の天使が浮かんでいた。メタトロンは右手の砲身をロードビヤーキーへと向けたまま、天使王の名に恥はじぬ悠ゆう然ぜんさでそれを凝ぎよう視ししている。

「助かった！　恩に着るぜ！」

　九郎は礼もそこそこに行動へと移る。

　エルザへと目配せすると、彼女は九郎を肩かたに担かついでデモンベインの足下まで一気に駆かけた。

「ダーリン、しっかりつかまってるロボよ」

　エルザはデモンベインの装そう甲こうを足場にしてコックピットまで跳ちよう躍やくしていく。そこからウェストが顔を出した。

「我わが輩はいの演奏もなかなかであろう？　次は貴様の番である、大十字九郎！」

「おうよっ！」

　九郎はウェストと入れ替かわり、デモンベインへと乗りこむ。エルザもまた自分の席に着くと、大おお慌あわてでコード類を自分の体へと接続していく。

　コックピット内の計器類が覚かく醒せいした。モニターが点灯し、格納庫、そしてロードビヤーキーの姿を映し出す。デモンベインに何ら問題はない。出しゆつ撃げき準備は整った。

「おっしゃあ！　デモンベイン！」

　九郎はカタパルトからデモンベインを引きはがすと、そのままロードビヤーキーの顔面に拳こぶしを叩たたきこむ。金属音が響ひびき、鈍にぶい振しん動どうが伝わってきた。

　ロードビヤーキーは後方へと吹き飛び、壁かべへとめりこんでいく。デモンベインは床ゆかを蹴けってロードビヤーキーとの距きよ離りを詰つめると、再び拳を振り上げる。

『ウガァァァァァァ！　大十字九郎……！　デモンベインッッッッ！　ガアアアア！』

　ロードビヤーキーは壁から体を引きはがすと、デモンベインに組みついてきた。それは細身の機体からは想像もできないほどの力を発揮し、デモンベインを絞しぼり上げていく。装甲が軋きしんだ。

「くそったれ！　魔ま力りよくの差か！」

『地じ獄ごくを……地獄を見せてやるッッ！　ウオオオオォォォォォーッ！』

　ロードビヤーキーから魔力が噴ふき出した。それは浮ふ力りよくを生み出し、デモンベインを抱だきかかえたまま天てん井じようへ

と向かって飛んでいく、

「ロボぉぉぉぉぉぉぉっ!?」

　エルザが悲鳴を上げる中、二体の鬼デウ械ス・神マキナは天井を突つき破りながら地上へと飛び出した。

　急に目の前が開け、荒こう野やにも似たアーカムシティが眼前に広がる。

　ロードビヤーキーはさらに上じよう昇しようしていく。アーカムシティは見る見る遠ざかっていった。

『地面に叩きつけてやる！』

「ふざけるなぁぁぁぁぁ！」

　デモンベインの頭部からバルカン砲ほうが発射される。それはロードビヤーキーの顔面に砲ほう弾だんの雨を降らせ、弾だん幕まくによってその姿は掻かき消されていく。

『ぐがががが……ッッ！』

　不意にデモンベインを捕ほ縛ばくしていた腕うでの力が緩ゆるんだ。九郎はその好機を見み逃のがさない。

　デモンベインは四し肢しに力をこめると、ロードビヤーキーの腕を振りほどいた。

　上昇し続けていたデモンベインは下降へと転ずる。

　瞬またたく間まに地表が迫せまり、着地の衝しよう撃げきに備えた途と端たん、突き上げてくるような激しい衝撃が襲おそいかかってきた。

　大地が激げき震しんし、デモンベインを中心にした巨きよ大だいなクレーターができあがる。衝撃を吸収しきれずにデモンベインはよろめき、片かた膝ひざをついた。

　コックピットでは九郎がひっくり返り、エルザは座席から投げ出されていた。即そく座ざに彼は起き上がると、モニターへと目を向ける。そこには大量のエラーメッセージが流れており、脚きやく部

ぶを中心に深刻な問題が発生していた。

　だが些さ細さいな問題にかまっている場合ではない。九郎はデモンベインを立ち上がらせた。

　着地の際にかかった負ふ荷かが大きすぎたのだろう。足首、そして膝が爆はぜている。ふんばりが利きかずに上体が傾かたむくが、それを強ごう引いんに立たせて上空へと目を向ける。そこではロードビヤーキーが旋せん回かいしており、死肉を嗅かぎつけた禿はげ鷹たかのごとくデモンベインの様子を虎こ視し眈たん々たんとうかがっている。

　突とつ然ぜん、ロードビヤーキーが急降下してきた。

『最高速度だ！　砕くだけ散れぇぇぇッ！』

　ロードビヤーキーは加速に加速を重ね、デモンベインへと迫ってくる。それは音速すらも超こえていく。もはや視覚では捉とらえきれず、悪意が衝撃波を引き連れながら接近してくるようにしか感じられなくなっていた。次にロードビヤーキーが姿を現したとき、すでにそれはデモンベインの眼前にいた。

「しまっ――！」

　九郎の叫さけびは最後まで続かなかった。

『スクリーミング……バァァァァァドォォォォォォ！』

　ロードビヤーキーはデモンベインへと突とつ撃げきしていく。魔力を孕はらんだ凶きよう悪あくな衝撃波に飲みこまれたデモンベインは、枯かれ葉はが舞まうかのごとく簡単に吹ふき飛ばされた。

　衝撃波に耐たえきれず、デモンベインの装甲に亀き裂れつが生じていく。それはやがて裂さけ目めとなり、装甲を引きはがしていった。

　全身に小爆ばく発はつが起き、剝むき出しになった機関が炎ほのおを吹き上げる。モニターに膨ぼう大だいな量のエラーメッセージが表示された。

　深刻な被ひ害がいを被こうむっていたのはデモンベインだけではない。九郎もまた酷ひどいダメージを受けていた。コックピット内

を通過していった衝撃波は九郎の体を蹂じゆう躙りんし、全身を容よう赦しやなく打ち据すえていたのである。

　脳のう髄ずいを激しく揺ゆさぶられ、九郎の意識は遠のいていく。だが、一いつ瞬しゆんのことだ。激痛で半ば強制的に現実へと引き戻もどされた九郎は呻うめき、そしてもがいた。

　仰あお向むけに倒たおれこんでいるデモンベインの脇わきに、ロードビヤーキーが降り立った。

『ヒャーハハハハハハッ！　ざぁまあねえなぁ、大十字九郎！　あーあ！　カッコ悪ぅ！　サムいんだよ、てめーはよぉ！』

　クラウディウスの嘲ちよう笑しようは毒素そのものであり、九郎から気力と闘とう志しを奪うばい去っていく。

　それでも彼は挫くじけず、体に鞭むちを打って操そう縦じゆう桿かんを握にぎりしめた。

　だがデモンベインは動かない。主要な魔ま術じゆつ回路に被害が及およんでいるらしく、モニターにエラーが返ってくるだけである。

　だとしても操縦を諦あきらめるわけにはいかなかった。

「……くっ」

　九郎は唇くちびるを噛かみしめると、ロードビヤーキーを睨にらみつける。その手にはライフルが握られており、銃じゆう口こうはデモンベインの胸部へと添そえられていた。

『これで終わりだなぁ？』

　それは死し刑けい宣告にも等しく、九郎を絶望の淵ふちへと追い詰つめていく。

（ちくしょう……。こんなところで終わってたまるかよっ！）

　九郎はデモンベインの復活を信じ、その応答を待ち続ける。

（動け……動いてくれっ！　俺が……俺たちが負けるわけにはいかねえんだ！）

　デモンベインも九郎の気持ちに応こたえようとはしていたが、全身から小爆発が起こるだけである。

『あばよ、インスタント野や郎ろう！　地じ獄ごくでカリグラに詫わびてきやがれっ！』

　ライフルの引き金が引かれようとした、そのときである。

　唐とう突とつにロードビヤーキーの上半身が引きちぎられた。

　それは下半身だけを残して数百メートルほど飛ばされていく。

「……え？」

　九郎は惚ほうけていた。なにが起きたのか理解できず、頭の中が空っぽになっていく。

　ロードビヤーキーの下か肢しが爆発しながら地面へと倒れこんでいく。

　そのとき初めて、九郎はその背後にそびえ立っていた威い容ように気がついた。

　それは巨大だった。

　とてつもなく巨大だった。

　デモンベインが矮わい小しような存在に思えるほどであり、全長はその五倍は優にある。まるで大人と子供のような感じだった。

　魔ま力りよくも尋じん常じようではない。神しん殿でんを連想させるその白い姿からは、神気にも似た壮そう大だいな魔力が溢あふれ出ている。圧あつ倒とうされるなどという生なま易やさしいレベルではない。意思とは関係なく平へい伏ふくしかねない超ちよう越えつ的な力である。そしてその力を少しだけ使い、ロードビヤーキーを粉ふん砕さいしたのだ。その無骨な腕うでで──。

（これは……）

　九郎は、あらためてその姿を凝ぎよう視しする。

　それは人ひと形がたをしていた。異界の神を模して造られたそれ

は、歪ゆがんだ天使のようであり、荘そう厳ごんな悪魔のようでもある。

　異質な法則に基もとづいて動く存在。

　つまり―。

「……鬼デウ械ス・神マキナ!?」

　高みから見下ろしてくるその姿に、九郎の体は自然に震ふるえていた。大自然の猛もう威いに対してわけもなく畏い怖ふするように、遺伝子に刻みこまれた本能的な恐きよう怖ふが呼び起こされているのだ。

『ネームレス・ワン！　暴君―ネロ！　てめえかぁぁぁっ！』

　ロードビヤーキーは腕の力だけで上半身を起こすと、そびえ立つ威容を見上げる。

（暴君……？）

　九郎はクラウディウスがカリグラとともに襲しゆう撃げきしてきたときのことを思い出していた。

（確か前にもあいつ、同じことを口にしてたよな）

　九郎の目は腰こしに下げた魔ま銃じゆうへと向かう。

　もともとそれは、暴君の所有物であったはずなのだ―。

「……ネロ!?」

　エルザは身を乗り出すと、モニター越ごしにネームレス・ワンを凝視する。

「知ってるのか？」

「アンチクロスの一人にして、マスターテリオンと肩かたを並べる最強の魔術師ロボ」

「あの娘こ、アンチクロスだったのか!?」

　今でもあの異様な姿は鮮せん明めいに思い出せる。

　手足の拘こう束そく具ぐ、視力を奪うための仮面、そして銜くわえさせられた轡ギヤグ―。

　およそ少女には似つかわしくない装そう飾しよく品の数々は、彼女の姿をより異質なものへと変えるだけの力があった。

（けど、なんでアンチクロス同士がやり合ってんだ!?）

　九郎の疑問にエルザは即そく答とうする。

「ネロは裏切り者ロボ」

「裏切り者!?」

「そうロボ。アンチクロスなのにブラックロッジと敵対してる裏切り者ロボ。ずいぶん前にマスターテリオンにとっつかまって夢む幻げん心母の最下層に幽ゆう閉へいされたんだけど……。脱だつ獄ごくしたロボ」

「……裏切り者、か」

　アンチクロス同士がやり合う理由については納なつ得とくした九郎だが、もう一つ疑問があった。

　なぜ自分に魔銃を与あたえたのか、ということである。

　ブラックロッジと敵対している九郎に加勢したと考えるのが自然だが、相手はアンチクロスだ。なんの打算もなく手を貸すとも思えない。

　九郎が気を取られている間に、ネームレス・ワンはロードビヤーキーの上半身へと向けて腕を突つきつけていた。

　その途と端たん、急速にネームレス・ワンの魔力が膨ふくれ上がっていく。それは解読すらかなわぬ複雑な術式であり、完成に至るまでもなく尋常ではない力を感じることができた。

　術式は着実に完成へと向かっていく。

『クソッ！　クソクソクソッ！　許されると思ってんのか！　ボクを滅ほろぼして、ただですむって思ってんのかオラァ！　ぶっ殺す！　ぶち殺す！』

　クラウディウスの怒いかりと恐怖に満ちた絶ぜつ叫きようが響ひびき渡わたる。

『動け！　動け、ロードビヤーキー！　ちくしょおおおおおおおおぉぉぉぉ！』

　錯さく乱らんし、恐きよう慌こう状態へとおちいっているクラウディウスを嘲あざ笑わらうかのように、ネームレス・ワンが展開する術式は完成した。

『術種選せん択たく：魔カノ砲ン・弾スペル』

　一いつ瞬しゆんの出来事だった。

　目が眩くらむほどの光が世界を蹂じゆう躙りんしたかと思うと、ロードビヤーキーは木こっ端ぱ微み塵じんに粉砕された。それは微び細さいな粉塵と化し、風にさらわれて四散していく。それは粉砕することのみに特化した、愛あい想そもなにもない淡たん々たんとした一いち撃げきだった。それは絶対的な力を有する者のみに許された、神しん罰ばつにも等しい力の顕けん現げんである。

　九郎は思わず息を飲んだ。

　ロードビヤーキーを歯し牙がにもかけず、一撃で粉砕していったネームレス・ワンの力の前に、どうにもならないほどの脅きよう威いを感じていたのである。

　ネームレス・ワンがゆっくりと、酷ひどくゆっくりと体を向けてきた。

「あ……ああ……あ……ッ！」

　声を失い、半ば呆ぼう然ぜんとした表情でネームレス・ワンを見上げる九郎。

　体がわななき、戦せん慄りつが全身を支配していく。九郎は体を抱だきしめ、震えを押さえこもうとするが無む駄だだった。内部から際限なく噴ふん出しゆつしてくる恐怖心は、力で制せい御ぎよできるものではない。体の震ふるえは激しさを増していく。

　冷や水でも浴びせられたかのような鮮せん烈れつな感覚が、埋うもれていた九郎の記き憶おくを呼び覚ましていく。

心を萎い縮しゆくさせ、魂たましいを砕くだき、絶望を押しつけてくるかのようなその感覚を、九郎は以前にも経験している。

それは彼に似ていた。

そう。マスターテリオンが放つ絶望的な感覚と―。

ネームレス・ワンはデモンベインを見下ろしたまま動かない。デモンベインはデモンベインで動くことができず、その動向を見守り続けるより他ほかなかった。

「……ダーリン、あれを見るロボ」

重苦しい沈ちん黙もくが流れる中、エルザが口を開いた。

メインモニターにネームレス・ワンの頭頂部が表示される。それは拡大され、やがてそこに一人の少女の姿を映し出した。

「『暴君』……ネロ？」

拘束具によって束そく縛ばくされた少女が、遥はるか下方にあるデモンベインを―九郎を見つめていた。彼女は特になにかを行うわけでもなく、静かに九郎を見守り続けている。

奇き妙みような沈黙が流れるが、長くは続かなかった。

時間にして数秒ほど経たったとき、不意に少女の口元に笑えみが浮うかんだのである。

（……笑った!?）

驚おどろいた九郎が、あらためて少女の姿を確かく認にんしたときだ。

ネームレス・ワンが全身から光を放ち始めた。それは徐じよ々じよに光度を増し、目を開けているのが困難になるほどの輝かがやきを放っていく。少女は笑みを浮かべたまま光の中へと溶とけこんでゆき、やがて完全に飲みこまれていった。

ネームレス・ワンが光の柱と化していく。その巨きよ軀くから立ち上った光の柱は真上へと伸のびていき、そこに鎮ちん座ざするクトゥルーへと達した。それと同時に光は無数の粒りゆう子しとなっ

て散っていく。ネームレス・ワンの姿は消え失うせていた。

「……なんだったんだ、いったい!?」

　九郎はネロの行動の真意をつかみかねていた。

　なぜ自分に手を貸し、助けるのか。その理由がまるで解わからない。単なる気まぐれか、それとも―。

　だがネロの狙ねらいがどこにあるにせよ、ロードビヤーキーは消しよう滅めつし、クラウディウスは死んだ。その過程には不安も残るが、結果的に脅威は去っている。今はその事実だけを受け入れ、次の脅威へと立ち向かう必要があった。

　急いでデモンベインの状態をチェックする。ネロの件で時間が稼かせげたのか、エラーを起こしていた回路の一部は復旧しており、デモンベインを引き起こすことができた。運動性能は落ちていたが、それらも順次、復活していくだろう。

　問題はデモンベインの右みぎ腕うでである。ロードビヤーキーの体当たり攻こう撃げきによって、そこは完全に砕けていた。回路が復活しても、これでは使い物にならない。

（これでレムリア・インパクトは使えなくなったわけだ）

　大きな痛手だったが、悔くやんでいても始まらない。

　九郎が司令室と連れん絡らくを取ろうとしたときだった。

『おーほっほっほっほっ！　お祭りはこれからよん、九郎ちゃーん！』

　神経に障さわるような嫌いやらしい声が、どこからともなく聞こえてきた。

「……その声は！」

　突とつ然ぜん、胸中に湧わいてきた不安感に突つき動かされ、九郎はデモンベインを横っ飛びさせる。

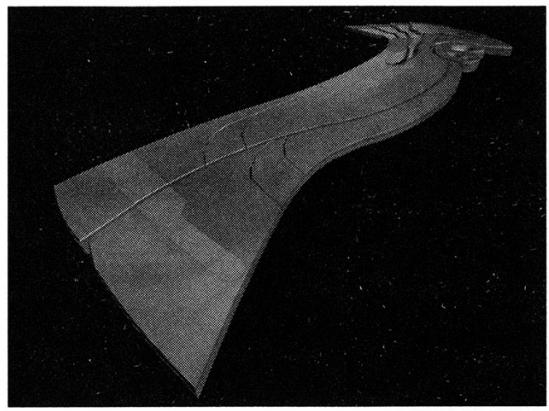
　その途と端たん、先ほどまでデモンベインが立っていた位置に、血のような赤いラインで巨きょ大だいな魔ま法ほう陣じんが描えが

かれた。その内側には黒く深い暗黒の穴が穿うがたれており、耳障りな羽音が音波となって大気を振しん動どうさせていく。同時に、鼻が曲がりそうなほどの強きよう烈れつな腐ふ臭しゆうが辺りを満たした。それは肉が腐ふ敗はいしたかのような死の臭においである。

　この反吐へどが出そうなほどの不快な気配を九郎は知っていた。

『──ベルゼビュート！　暴食せよ！』

第五章 鋼鉄の猛威——灼熱する水銀の血



バルザイの偃月刀

血にまみれた道の真ん中で少女はたたずんでいた。

魂たましいが抜ぬけ落ちているのか翡ひ翠すい色をした瞳ひとみは酷ひどく虚うつろであり、顔にも表情がない。まるで精せい巧こうに造られた人形である。

彼女は身じろぎ一つせず、腰こしまで届く銀色の髪かみを靡なびかせながら、ただひたすら呆ぼう然ぜんとしていた。

少女の瞳が映し出しているのは、永遠にも等しい長さの一本道である。

辺りにはなにもない。

世界は闇やみに包まれ、道を照らすのは赤黒く燃える炎ほのおだけである。そしてそれに照らされているのは累るい々るいと横たわる死体、そして鉄てつ屑くずである──。

少女の名はアル・アジフ。

狂くるえる詩人・アブドゥル・アルハザードによって執しつ筆ぴつされた伝説にも等しい魔ま導どう書しよである。

今のアルは抜け殻がらも同然だった。なんの感かん慨がいも去来せず、ぽっかりと穴でも開いたかのような空くう虚きよさが居座り続けている。

なにも考えられず、また考えることを拒きよ否ひしていた。

なぜこんなにもがらんどうなのか、アルにも理解できない。

ただ酷く疲つかれていた。

心身ともに衰すい弱じやくしていて、立っていることですら奇き跡せきと呼ぶに相応ふさわしい有様である。

それもそのはずである。悠ゆう久きゆうとも言える長き時を生き、今の今まで戦い続けてきたのだ。

もう十分だった。十分すぎるほど戦ったのだ。これ以上は戦えない。

アルの前後に永遠と続く道は、彼女の人生そのものだった。その道には共に戦ってきた戦士たちの骸むくろと、彼女の鬼デウ械ス・神マキナ・アイオーンが残した無数の残ざん骸がいが点々と残されている。それは戦いの激しさを十二分に物語っていた。

彼らの顔は苦痛に歪ゆがんでいた。穏おだやかな表情など一つもない。それは思わず目を逸そらしてしまうほどの醜しゆう悪あくさである。腐敗している者も多く、白骨化している者すらいた。

彼らの死に方は様々だったが、楽に死ねた者など一人もいない。深い絶望と恐きよう怖ふに晒さらされ、死すら安らぎと感じながら逝いったのである。

──いや、今も狂気の世界に囚とらわれたまま彷徨さまよい続けている者もいるだろう。

（ここは？）

ふとアルはそんなことを思う。

なぜこのような場所にいるのか理解できない。

（妾わらわは、いったい……!?）

夢か現うつつか、それとも幻まぼろしか──。

そのどれもが絡からみ合った複雑怪かい奇きな世界にいるように思えた。

生死すらも曖あい昧まいで、生きているという実感はまるでなかったが、死んだという確たる証しよう拠こもない。とにかく酷く不安定な状じよう況きようだった。

もっとも今のアルにとって、そのようなことは些さ末まつな問題でしかない。そもそも自分自身の存在ですら不確かな状況である。現状を把は握あくすることに意味などなかった。

アルは自じ嘲ちようすると、遥はるか遠方へと目を向ける。

乗り越こえてきた歴代の主あるじたちの骸を見つめながら、彼女はしばし物思いに耽ふけった。

+

ミスカトニック大学。

アーカムシティの中心部に建つその大学は、世界でも指折りの名門校だった。ありとあらゆる分野のエキスパートが集まるそこは、一流を目指す学徒たちの憧あこがれの学校である。設立されたのは一七九七年だが、現在でも威い風ふう堂どう々どうたる校舎は少しも揺ゆるがず、歳さい月げつを積み重ねることで威い厳げんと荘そう厳ごんさが増していた。

大十字九郎はミスカトニック大学で考古学を専せん攻こうする学生だった。ただそれは登録上であり、実際には陰いん秘ぴ学科で魔ま術じゆつについて学んでいたのだが――。

ミスカトニック大学へ入学するまでの経けい緯いは少し特とく殊しゆだった。

両親を失い、天てん涯がい孤こ独どくの身となった彼の下もとへと届けられた一通の手紙。

差出人はミスカトニック大学の学長であり、提示された条件を受け入れるなら奨しよう学がく生せいとして受け入れるというものだった。学費の免めん除じよ、そして必要最低限の生活費まで支給されるという好待たい遇ぐうに、九郎は一も二もなく条件を飲んでいた。ただ疑問が残るのも事実だった。しかも学ぶのは陰秘学である。陰秘学科については存在自体が伏ふせられており、大学の関係者ですら知らない者のほうが多いほどだった。

そのような特殊な学科に、なぜ自分を迎むかえ入れるのか――。九郎には理解できなかった。

だがそのときの九郎にとって、なぜ自分が優ゆう遇ぐうされるのかという疑問は些細な問題でしかなかったのである。ミスカトニック大学へ入学できるのだという喜びと生活の保障。それは希望を失いかけていた九郎に十分すぎるほどの未来を与あたえていた。

こうして陰秘学科の学徒となった九郎は、魔術師となるべく勉強

を開始したのである。

　九郎は順調に位階を上げた。それはオカルトかぶれだった父親の影えい響きようで黒くろ魔ま術じゆつに慣れ親しんでいたこともあるが、実際には本人の隠かくされた才覚が目覚めただけのことだった。

　このような下地があったからこそ【アル・アジフ】を使いこなし、ブラックロッジと相対することができたのである。

+

　その男がミスカトニック大学に現れたのは、九郎が魔ま導どう書しよの閲えつ覧らんを数日後に控ひかえたある日のことだった。

　図書館長であり九郎の恩師に当たるヘンリー・アーミティッジに頼たのまれ、大学の正門へと足を向けた彼は、その前に立つ異様な人間の姿に腰こしを抜ぬかしかけていた。

（で、でけえ……）

　巨きよ漢かんなどというレベルではない。身長は軽く二メートルを超こし、体格もがっしりとしていた。そこそこ立派な体たい軀くを持つ九郎でさえ、見上げなければ目線を合わせられないほどである。異常とも思えるほどの大きさだ。

　だが体格など問題ではなかった。それ以上の異様な容姿がそこに存在したからだ。

　一言で言うなら山羊やぎ面づらだった。伸のばし放題の顎あご鬚ひげは山羊のそれであり、尖とがった顎、浅黒い肌はだ、飛び出した眼球、ボサボサした髪かみの間からは角のような突とつ起き物さえ見えたほどである。襤褸ぼろのようなスーツで隠されてはいるが、その内側にはなにが潜ひそんでいるのか――。想像しただけで失神しそうなほどだった。

　九郎はおっかなびっくり彼の下へと近づくと、その姿を見上げた。

鼻び孔こうをつく耐たえ難がたい悪あく臭しゆう。そして得体の知れない怖おぞ気け……。すべてを放ほうり出して逃にげたくなような気配が彼にはあった。

「あんたが……ウィルバー・ウェイトリイさん？」

九郎の問いにウィルバーは片言の言葉で「そうだ」と答え、アーミティッジとの面会を求めてダンウィッチからやってきたと告げた。

（ダンウィッチ？　どっかで聞いたような？）

アーカムシティ近きん郊こうには寂さびれた寒村も多い。ダンウィッチもその一つだろうと九郎は結論づけた。

（とにかく……さっさと終わらせてしまおう。どうにかなりそうだ）

精神衛生上の観点からもウィルバーと行動をともにするのは得策ではなかったが、九郎は彼に対して少なからず興味を抱いだいていた。それは魔術を追究する者なら誰だれもが持つであろう好こう奇き心しんである。

それでもウィルバーが客人であることを思い出した九郎は、彼とともにアーミティッジの私室へと足を向けた。

そこへと向かう最さ中なか、九郎はウィルバーに何度か話しかけていた。それは客人への配はい慮りよというより、抑おさえきれなくなった好奇心の表れである。ウィルバーの目的がなんであるのか探さぐりを入れたくなったのだ。

「アーミティッジの爺じいさんとは、お知り合いで？」

廊ろう下かを並んで歩きながら、九郎はおもむろに訊たずねた。

だが社交性がないのか、それとも単に口下手なのか、ウィルバーからの返事はない。

やれやれと肩かたをすくめながら溜ため息いきをつき、詮せん索さくを諦あきらめかけたそのときである。

「……書簡で……少し」

　ウィルバーは草でもはむかのように口を蠢うごめかせながら、訛なまりのある言葉を吐はき出した。

（なんだ。しゃべれるじゃねえか）

　九郎は胸中で苦く笑しようすると、さらに質問を浴びせかける。

「今日は、どんなご用件で？」

「……図書館で……閲覧を……」

「閲覧？」

　九郎の背に悪お寒かんが走り抜けた。

（閲覧って、まさか……）

　だが様々な条件が九郎の考えを裏付けている。

「秘密図書館で魔導書の閲覧を!?」

　ウィルバーはうなずきを返すと、ぼそりとなにかをつぶやいた。

「……【ネクロノミコン】……」

　確かにウィルバーはそう言った。

　九郎は慄りつ然ぜんたる恐きよう怖ふを覚えた。

　秘密図書館にオラウス・ウォルミウスが訳した【ネクロノミコン】のラテン語版があることは知っていたが、まさかその閲覧が目的だとは思わなかったのだ。

【ネクロノミコン】を閲覧してなにをするつもりなのか。

　そのことを考えただけでも足あし下もとが崩くずれてしまうかのような恐おそろしさを感じた。

　それっきり二人は言葉を交かわすことなく黙もく々もくと歩を進め、アーミティッジの私室で別れたのだが―。

　数日後、九郎は再びウィルバーと遭そう遇ぐうすることになる。

+

「こいつぁ、すげえな……」

　その光景を目にした途と端たん、九郎は感かん嘆たんの声を発した。

　目の前に整然と並ぶ本ほん棚だな、そして所ところ狭せましと収められた書しよ籍せきの数々は、彼を興奮させるには十分すぎた。本棚に並ぶ錚そう々そうたる顔ぶれを見れば、魔術に通じる者なら誰しもが似たような感覚に囚とらわれるに違ちがいない。

【イステの歌】【ヴォイニッチ写本】【エルトダウン・シャーズ】【黄き衣ごろもの王】【グ＝ハーン断章】【グラーキ黙もく示し録ろく】【深海祭さい祀し書】【サセックス草そう稿こう】【断罪の書】【ドール賛歌】【フサンの七秘聖典】【ポナペ島経きよう典てん】など、ちょっと眺ながめただけでも名だたる魔ま導どう書しよが何冊も見つかるのだ。とんでもない場所である。

　秘密図書館。

　この建物の名である。世界各地から集められた魔導書がそろうこの場所は、あらゆる外げ道どうの知識が集約する場であり、魔ま術じゆつ師しを目指す者なら一度は訪おとずれたい聖地のような場所だった。だがその特とく殊しゆさゆえ閲えつ覧らんは厳しく制限され、陰いん秘ぴ学科同様、存在自体が公おおやけにはされていない特殊な場所である。

　そんな特別な施し設せつに九郎は訪れていた。

　一年以上、みっちりと修しゆ業ぎようし、ようやく許可された魔導書の閲覧だった。

　緊きん張ちようと興奮が交こう錯さくし、加えて魔導書から放たれる妖よう気きと存在感が九郎を打ちのめしていた。気け圧おされ、息が上がり、その場でうずくまりそうになる。

（まさか、これほどとは……）

魔導書の存在感は想像を遥はるかに凌りよう駕がするものだった。

その横を通り抜ぬけようとしただけでも、精神的にかなりの負担が強いられる。

書に目を通したらどうなってしまうのかと、九郎は不安になった。

（……しっかりしろ、俺！　ビビってんじゃねえぞ！）

九郎は両手で挟はさむように頬ほおを張ると、飲まれそうになる自分の心を現実へと引き戻もどした。

（……世界最高位の禁書が閲覧できるんだ。こんなチャンス、そうそうあるわけじゃない。俺はついてる）

初めての閲覧で最高位の魔導書と対面できるのである。駆かけ出しの身分だというのに破格の好待たい遇ぐうである。この好機を逃のがす手はないし、逃すつもりもなかった。

九郎は気を取り直すと奥へと歩を進める。

「やっぱ、すげえな……」

一歩一歩、足あし下もとを確かめるように奥へと歩を進めながら、九郎は感かん慨がい深げにつぶやいていた。

世界の真理に到とう達たつし、世界を手中に収めるための理論が──森しん羅ら万ばん象しようの法則を暴あばき、神の領域へと立つための理論が、秘密図書館には存在する。

（神か……。俺も神の領域に……!?）

九郎は思わず武む者しや震ぶるいをした。

秘密図書館には彼を至高の領域へと導くための書がそろえられている。その気になれば──魔導書を使いこなすことさえできれば、世界を牛ぎゆう耳じるなど造作もなかった。

九郎は両の掌てのひらに目を落とす。その中に世界がすっぽりと収まっていくような感覚は激しい高こう揚よう感かんをもたらし、

体に火ほ照てりを与あたえた。悪あく魔まの囁ささやきめいたその感覚に戦せん慄りつしながらも、陶とう酔すい感かんを味わう九郎。

　そんな彼の心に水をさしたのは、どこかから聞こえてきた夜ウイツプ鷹アーウイルの鳴き声だった。下げ卑びた感じのする嫌いやらしい鳴き声は彼の心に不安感を植えつけ、高ぶった心を落ち着かせるだけの力があった。

　ふと九郎の鼻び孔こうがえも言われぬ臭においを嗅かぎ取った。それは濃のう縮しゆくした汚お水すいを気化させたような耐たえ難がたい汚お臭しゆうであり、部屋の奥―九郎が向かおうとしている先から漂ただよってくる。

（この臭い……どこかで……）

　九郎は吐はき気けを堪こらえながら、どこかで嗅いだ臭いであることを思い出していた。

　その正体を思案しながら歩を進めていくうちに、はたと気づく。

（この臭い、ウィルバー・ウェイトリイの……）

　巨きよ漢かんの大男が放つ怖おぞ気けを孕はらんだ体臭と、室内に満ちている悪臭は酷こく似じしていた。

（なんでヤツの臭いが……）

　九郎は背せ筋すじに冷たいものを感じていた。

　まさかとは思ったが、五感、そして第六感までもが危機感を感じ取っている。

　先日、秘密図書館でラテン語版の【ネクロノミコン】を閲覧していたウィルバー・ウェイトリイは、それを借り受けるべくアーミティッジと交こう渉しようしていたのである。結局、持ち出しは許可されず、ウィルバーは写本が置かれている別の図書館を訪れるなどしていたが、アーミティッジが各図書館長宛あてに警告を発していたおかげで目的はかなわなかったらしい。アーミティッジはウィルバーの目的がなんであるのかを知ったようだが、その件について九郎が問うても半人前であることを理由に答えてはくれなかった。

九郎は、さらに歩を進める。

臭気は激しさを増し、眩暈めまいすら覚えるほどだ。

その臭いに、どうにも耐えきれなくなったときだった。

九郎は出で逢あってしまう。人の皮を被かぶった怪かい異いに。

「う、うわあああああああああああ！」

喉のどを突ついて出てくるのは、砕くだけ散った九郎の魂たましいの叫さけびである。

それは人とは呼べぬ異い形ぎようだった。

彼は―ウィルバー・ウェイトリイは何ど処この言語とも知れぬ人外の言葉を吐き出しながら、一冊の魔導書に目を向けていた。それは九郎が目を通すはずだった【ネクロノミコン】のラテン語版である。

九郎の絶ぜつ叫きように呼応するかのように、ウィルバーの上半身を収めていた薄うす皮かわが破れていく。内側から現れたのは鱗うろこに覆おおわれた爬は虫ちゆう類るいにも似た皮ひ膚ふである。腹部からは吸きゆう盤ばんがびっしりとついた無数の触しよつ角かくが排はい出しゆつされ、蠕ぜん動どう運動でもしているかのような怪あやしい蠢うごめきを繰くり返していた。

かろうじて収まっていたズボンが引き裂さかれる。毛むくじゃらな下半身が露ろ出しゆつし、恐きよう竜りゆうを連想させる太い足が出現した。尻しりからは触しよく腕わんにも似たものが波打っている。その姿は人ではあり得ず、別次元から飛来した生命体のようにしか見えない。

九郎は自分の世界が壊こわれていくのを感じていた。

世界が冒おかされ、侵しん略りやくされていく。

あらゆるものが崩くずれ、破は砕さいし、塵ちりと化していった。

「ＹｕＧｓＯｏｏｏＧｇＧＧＧｏｏｏｏｏｏｏＴＨ！

ＪＯｏｏＯＯＯＯｇｓＨｏＯＯｏＴｈｏｏｏｏＯＯＯＯｏｏｏｏｔｈ！」

ウィルバーが吠ほえた。空気が振しん動どうし、異界の祝詞のりとが世界を侵しん食しよくしていく。

九郎の現実は蝕むしばまれ、引き裂かれ、汚けがされていった。

山羊やぎにも似たウィルバーの顔が、ゆっくりと九郎へと向けられ……そして、彼はニタリと笑った。

それは九郎の心を軽々と打ち砕いていく。

「あああああああああああああっ！」

声にならぬ声が九郎の口から迸ほとばしる。

怪異と化したウィルバーが触角を動かしながら九郎へと体を向けてきた。

ウィルバーの体から噴ふき出す妖よう気き、そして汚臭──。

それは九郎の体を絡からめ取り、体内へと流れこんでいく。

全身が悲鳴を上げる。脳が焼けただれていくかのような凄すさまじい衝しよう撃げきが体を貫つらぬいていく。気絶せずにすんでいるのが不思議なほどの苦痛であり、極限に近い状態が九郎の顔を醜みにくく歪ゆがませる。だが、それ以上の苦痛をもって彼の心は破は壊かいされていった。

九郎の日常は瓦が解かいし、溶よう解かいし、正体不明の汚お濁だくへと姿を変えていく。それはウィルバー・ウェイトリイという貪どん欲よくな怪異によって貪むさぼり食われ、やがて彼は九郎の魂までも飲みこみ始めた。

闇やみが──極ごく彩さい色しきの闇が九郎の世界を包みこんでいく。彼の自じ我がは崩ほう壊かいし、溶とけ出し、気体と化して世界へとばらまかれていった。拡散した心が悲鳴を上げながら暗黒へと染しみていく。

（俺は……俺は……死ぬのか？）

　そのような感覚はない。だが、生きているようにも思えなかった。ただ心は深く剔えぐられており、そこに深い絶望が塗ぬりこめられていく。

（そうか……ここが……。ここが、そうなのか……）

　九郎は悟さとった。

　人じん智ちを超ちよう越えつしたその世界こそ、無む邪じや気きにも憧あこがれていた神の領域であることを。

『此処ここは、いずれ君がたどり着く世界。たどり着くべき世界。その入り口。深しん淵えんの入り口……』

　どこからか艶つややかな女の声こわ音ねが響ひびいてくる。それは耳を介かいさず、直接、九郎の脳内へと擦すりこまれていく。

　九郎はわけが解わからないまま駆かけ出していた。

　とにかく走った。

　あるかどうかさえ判わからない両りよう腕うでを振ふりながら、全力で突っ走っていく。

　このような得体の知れない場所で、化け物に貪られて死ぬわけにはいかない。

　だから九郎は必死で走った。

　走って走って走りまくった。

　やがて原色の絵の具を掻かき混ぜたかのような混こん沌とんの中から図書館の姿が浮うかび上がってくる。九郎は混沌から這はい出すと、そこへと躍おどり出た。

　振り返ると、ウィルバー・ウェイトリイが奇き声せいを発しながら顔を向けてくるところだった。彼の体には巨きよ大だいな暗黒が口を広げており、再び九郎を飲みこもうと迫せまってくる。

（……逃にげないと……逃げないと……）

　九郎は逃げる。

本ほん棚だなの間を右に左に、上に下に、そしてそれ以外の方向へと―。

それでもなおウィルバーは迫ってくる。走っても走っても彼を振り切ることができず、また、出口へもたどり着けない。走れば走っただけ道が延びていくかのような、そんな理り不ふ尽じんな現象が目の前で展開されていく。

ウィルバーが触角を揺ゆらめかせながら迫ってくる。走る九郎の背に触角が触ふれた。心の一部が凍こおりつく。九郎は吸盤で絡め取られる前にそれを振り払はらい、先へと急ぐ。

夜ウイツプ鷹アーウイルがわめいていた。

まもなく訪おとずれるであろう死者の魂たましいを取るべく歓かん喜きの鳴き声を上げている。

魔ま導どう書しよたちが嘲あざ笑わらう中、遁とん走そうを続ける九郎。

だが、それも終わりを告げた。

「！」

あまりにも唐とう突とつだった。

ウィルバーの山羊面づらが眼前にあったのである。

気がつかぬ間に九郎は転てん倒とうしており、ウィルバーにのしかかられていた。彼は顔に邪じゃ悪あくな笑えみを貼はりつけながら九郎を見下ろしている。

すべてが終わろうとしていた。

（結局、俺はどこにもたどり着けずに……）

絶望が這い寄り、九郎を混沌へと連れ戻もどそうとしていく。

そのときだ。

再びあの女性の声が脳のう裏りに響き渡わたった。

『いや、たどり着くさ。たどり着かせてあげるよ。

何度、失敗しても……。

何度、滅ほろぼされても……。

何千、何万、何億回と繰くり返そう。

僕が君を導こう。

愛いとしい君を導こう。

いつか世界の中心へ。

煮にえ立つ宇宙の中心へ──』

声の主のことなど考えている余よ裕ゆうはない。

怪かい異いは今にも九郎を食くらおうとしていた。

九郎は目を閉じ、その時を待った。

刹せつ那なの沈ちん黙もく。

だが、その瞬しゆん間かんは一向に訪れない。

おそるおそる薄うす目めを開けて確かく認にんすると、ウィルバーは顔を引きつらせながら体を戦慄おののかせていた。

（……怯おびえてる？　化け物が？　なにに!?）

疑問が浮かんでは消えていく中、怪異な現象は起きた。

足あし下もとから魔ま力りよくを孕はらんだ風が立ち上っていく。それはやがて突とつ風ぷうとなり、嵐あらしと化し、竜たつ巻まきへと変化を遂とげる。突つき上げるような波動のごとき旋せん風ぷうは、どこからか現れた魔導書の頁ページを巻きこみながら吹ふきすさぶ。

（──なんなんだよ、ちくしょうっ！）

魔力を伴ともなった圧あつ倒とう的な風力がウィルバーの体を押し上げ、打ち据すえ、叩たたきつけていく。

人外のおぞましい叫さけび声が風音とともに響ひびき渡り、それ

に呼応するかのように夜鷹が鳴いた。

　九郎は吹き飛ばされないように気をつけながら身を起こし、腕うでを風除よけの代わりにしつつ前方を凝ぎよう視しする。

　──まだ早い。

　嵐の向こう側から、澄すんだ透とう明めいな声こわ音ねが響いてくる。それは嵐の中にあっても掻き消されることなく九郎の耳に飛びこんできた。

　──まだ出で逢あうには早い。

　それは少女の声だった。まだ年とし端はもいかぬ、穢けがれなき乙女おとめの声音である。

　弱々しさは感じられない。それどころか脈々とした神仏にも等しい力が感じられた。

　──時が来れば、我等は必ずめぐり逢う。

　目に見えぬ衝しよう撃げきがウィルバーを撃うつ。彼は苦く悶もんの表情を浮かべながら、強きよう烈れつな臭しゆう気きとともに血ち反吐へどを吐はき出した。

　──だが……今はまだだ！　まだなのだ！

　魔導書の頁がウィルバーを取り囲み、高速で回転し始める。彼は紙し片へんで形成された檻おりに閉じこめられていく。

　檻の中で雷かみなりが迸ほとばしった。頁越ごしにウィルバーのシルエットが浮うかび上がる、肉が焼ける嫌いやな臭においが辺りに漂ただよう。

　次いで血ち飛沫しぶきと肉片が舞まい上がり、天てん井じようへと貼りついていく。

　ウィルバーの口から絶ぜつ叫きようが噴ふん出しゆつするが、それはすべて嵐に阻はばまれて掻かき消されてしまう。

　──今はまだ外げ道どうの知識を操あやつる術が、理り不ふ尽じんと戦う力が、来たるべき運命に抗あらがう意志がない！　ないの

だ……。

　九郎は嵐の先へと目を向ける。その先にいるであろう声の主の姿を求めるが、朧おぼろ気げにしか確認できない。

　ただ僅わずかにできた風の合間から、微かすかに銀色の煌きらめきを確認することができた。

　──九郎！

（！　俺の名を……）

　九郎は目を剝むくが、声に応こたえる前にさらなる怪異は起きた。

「えずふぁれす、おりゅあらむ、いりおん・えしゅてりおん……」

　別次元から紡つむぎ出されたかのような、酷ひどく不快で酷く汚けがれた呪じゆ詛そのごとき言葉が木こ霊だまする。それはウィルバーが口にした怨おん念ねんにも等しい呪文である。

　──くっ……写本の力か！

　少女の声が憎にく々にくしさを伝えてくる。

「うがあああアアアアアアッ！」

　ウィルバーを閉じこめていた檻が爆ばく砕さいする。彼を捕ほ縛ばくしていた風は四散し、魔ま導どう書しよの頁が紙かみ吹ふ雪ぶきのように宙を舞った。

　全身を切り刻まれたウィルバーは、肩かたで息をしながら喘あえぐような呻うめき声を上げている。

　彼の足あし下もとには一冊の大冊が転がっていた。それはラテン語の【ネクロノミコン】であり、七五一頁目が開かれている。

　ウィルバーは酷い怪け我がを負いながらも、驚きよう愕がくすべき俊しゆん敏びんさで駆かけ出した。彼は隆りゆう々りゆうとした脚あしの筋肉をフルに行使し、床ゆかを蹴けり上げながら出口へと向かって突き進んでいく。

ウィルバーが出口へとたどり着こうとしたときである。そこから一匹ぴきの黒い狗いぬが飛びこんできた。

鋭するどい牙きばを有するその狗は臆おくすることなくウィルバーへと襲おそいかかると、彼の喉のど笛ぶえを噛かみ千切った。赤黒いヘドロにも似た体液が噴ふき上がり、天井、そして床を冒おかしていく。ウィルバーは巨きよ体たいを前方へと傾かたむけ、己おのれの体液で満たされた床へと沈しずんでいった。同時に室内を満たしていたウィルバーの悪意は霧む散さんする。

黒い狗は銜くわえたままの肉片を吐き出すと、前まえ脚あしでウィルバーの遺体を踏ふみつけた。顔には冷れい笑しようが浮かんでおり、黒く艶つややかな黒曜石のような瞳ひとみが嘲あざけるような色しき彩さいを帯びる。そこには明確な知性が感じられた。狂きよう気きを内包した知性が―。

狗が九郎へと顔を向けた。喉のどを鳴らし、牙を剝き、全身から漆しつ黒こくの妖よう気きを放ったかと思うと、黒い狗は吠ほえた。それは空気を鳴動させるほどの激しさで九郎の魂たましいを震ふるわせ、罅ひびを入れるほどである。そしてその狗は彼へと向かって突とつ進しんしてきた。黒く、鞭むちのようなしなやかさで一気に九郎との距きよ離りを詰つめてくる。

「ああ……あああああああっ！」

牙を剝き出しにして迫せまりくる怪かい異いに、九郎は絶望的な悲鳴を上げた。

邪じゃ悪あくが暗黒を携たずさえて迫ってくる。世界は墨すみでも流したかのように黒く染まり、悪意で満たされ始めた。

九郎の心と体は闇やみに蝕むしばまれ、意識が混こん沌とんへと落ちていく。

遠くで夜ウイツプ鷹アーウイルがわめいていた。

+

秘密図書館に足を運んだヘンリー・アーミティッジは、想像を絶する光景に愕がく然ぜんとしていた。

内部は嵐あらしでも過ぎ去ったかのような荒あれようで、本ほん棚だなは倒たおれ、そこに収められていた稀き覯こう本ぼんの数々が床一面に散乱している。紙片と化している魔導書すらあった。

それだけでも尋じん常じようではない事態が発生したのだと察しがつくが、館内は鼻を突つく異い臭しゆうで満ちていた。

それがなにを意味するのかは考えるまでもない。

その臭いは彼の──ウィルバー・ウェイトリイの体たい臭しゆうと酷こく似じしていた。

アーミティッジは散乱した本を避さけながら部屋の奥へと歩を進める。

七十近い年ねん齢れいにもかかわらず彼の足あし腰こしはしっかりしており、髪かみにこそ白いものが混じってはいたが、老いの気配はまるで感じられない。瞳は力強く、理知的な色彩を帯びていた。

中なか程ほどまで進んだときだ。アーミティッジは仰あお向むけで倒れている教え子と、その横で亡なき骸がらを晒さらしている怪異の姿を発見した。

（これは……）

アーミティッジはウィルバーの──いや、かつてウィルバーだった遺体を見つめた。

もはや人間とは呼べぬ奇き怪かいな生命体となり果てていた彼は、瞬またたく間まに悪臭の漂う白い膿うみ状の物体へと変わっていく。

（よもや怪異となり果てるとは……。【ネクロノミコン】を貸し出さなかったのは、やはり正しい判断であったか）

白はく濁だくとした粘ねん着ちやく性のある液体を見つめていたアーミティッジは、その側そばに落ちているラテン語版の【ネクロノミコン】を拾い上げた。

（ヨグ＝ソトース、そして旧支配者に関係する記述か……）

それは【ネクロノミコン】の七五一頁ページに記き載さいされている事こと柄がらであり、ウィルバーが血ち眼まなこになって読んでいた箇か所しよだった。

先日、ウィルバーが図書館を訪おとずれた際、彼はジョン・ディー博士が翻ほん訳やくした英訳版の【ネクロノミコン】を持参していたのだが、かなり不完全な代しろ物もので肝かん心じんの七五一頁が欠損していたのである。彼はそれを補うため秘密図書館を訪れていたのだ。

アーミティッジは少し思案顔をするが、すぐに思考を中断した。今はウィルバーより九郎のことが心配だったのである。

幸い、九郎に目立った外傷はなく、アーミティッジが体を揺ゆさぶると彼はすぐに意識を取り戻もどした。

「九郎、大だい丈じよう夫ぶか!?」

「……」

九郎はアーミティッジの問いには答えず、ただ震えていた。その瞳は何も映してはおらず、光さえ失うせてしまったかのような感じである。九郎が心に傷を負ってしまったのは確実で、初めて遭そう遇ぐうした怪異があれでは無理もなかった。

（しばらくは安静にするしかあるまい）

アーミティッジは九郎を抱かかえ上げると、医務室へと向かった。

+

あのあとアーミティッジは他ほかの教授らとウィルバーの遺体を処理し、その後、しばらく自室へと籠こもっていた。ウェイトリイ家について徹てつ底てい的に調べ上げるためであり、ウィルバーの件が序章でしかないことを彼は知っていたのである。

根こん拠きよは簡単だ。ウィルバーに弟がいたこと、そしてなによりウェイトリイ家にまつわる怪あやしげな噂うわさの数々がそれを裏付けていた。

（ダンウィッチ、か……）

アーカムシティに隣りん接せつする丘きゆう陵りよう地ち帯たいに、地図上から姿を消し、人々の記き憶おくから忘れ去られて久しい古びた寒村があった。

その名をダンウィッチという。

暴力と背徳が跋ばつ扈こし、邪悪な儀ぎ式しきや謎なぞめいた集会、秘ひめられた殺人などが平然と行われているという、堕だ落らくと退たい廃はいに冒おかされた不ふ浄じようの土地である。

ウィルバーの弟は、今もそこにいるはずだった。

（行って確かめるしかあるまい。行くしか──）

+

ダンウィッチは辺へん鄙ぴな寒村だった。

風ふう光こう明めい媚びと言えば聞こえはいいが、心癒いやされる感じはまるでしない。木々は異様に大きく生長し、葉は見たこともない奇き妙みような形をしている。同じ木から生えているにもかかわらず大きさや形、色もまちまちで、遺伝子に致ち命めい的な欠けつ陥かんが発生しているのは明らかである。微かすかに漂ただよってくる堆たい肥ひのような悪臭が原因の一つかもしれなかったが、真相は定さだかではない。

異様なのは森林だけではなかった。やたらと鳴きわめく夜ウイツプ鷹アーウイルの群れや異常発生した蛍ほたるも不気味だったが、なによりポツンポツンと点在する廃はい屋おくに等しい家屋の気味悪さは幽ゆう霊れい屋や敷しきの比ではなかった。日中であるにもかかわらず黄昏たそがれ時どきを迎むかえてしまったかのような錯さつ覚かくにおちいるほどで、好き好んでこのような場所を訪れる

者など存在しないだろう。

　アーミティッジは住民たちから精力的に話を聞いて回った。ウィルバー・ウェイトリイ、そしてウェイトリイ家のこと、さらにはダンウィッチに現れた目に見えぬ化け物についてである。それこそがウィルバーの弟であり、後に『ダンウィッチの怪かい』と呼ばれる主たる悪夢の一つだった。

　アーミティッジは住民からの目もく撃げき談だんを頼たよりに行動へと移っていた。彼が向かったのはセンティネル丘と呼ばれるドーム状の小高い丘である。ウィルバーの弟は、そこへと向かっているらしい。

　センティネル丘へと向かう途と中ちゆう、何軒けんもの家や灌かん木ぼくが薙なぎ倒たおされている光景が目に入った。地面にはとてつもなく巨きよ大だいな物体が蠢うごめいた形けい跡せきがあり、それがウィルバーの弟であることは言わずもがなである。そしてその跡あとは確実にセンティネル丘へと向かっていた。

　ダンウィッチに着いてから絶えず嗅かぎ取れた悪あく臭しゆうは、いよいよ濃のう密みつになっていく。それはウィルバーが発した汚お臭しゆうと同じであり、体調ばかりか精神をも蝕むしばむだけの十分な力があった。体が小刻みに震ふるえているのが解わかる。

　やがて問題のセンティネル丘が見えてきた。その頂には荘そう厳ごんさが漂う石造りの環かん状じよう列石の姿を確かく認にんすることができる。そしてその中腹あたりにそれはいた。姿こそ確認できなかったが、草木が踏ふみ潰つぶされ、地面に刻みこまれていく奇妙な跡からそれと判わかる。

　アーミティッジはウィルバーの弟の下もとへと躊ちゆう躇ちよなく進んでいくと、懐ふところから取り出したイブン・カズイの粉薬を空中へと散布した。それは風に乗り、センティネル丘の頂へと向かって流れていく。

　そしてそれは姿を現した。

　十数階建てのビルに相当するだろうその巨きよ軀くは、のたうつロープが複雑に絡からみ合うような鞠まり状の形をしていた。体はゼリー状の皮ひ膜まくのようなもので覆おおわれており、いくつも

の大きな瞳ひとみが様々な方向へと向けられている。また二、三十ほどの口状の突とつ起き物がなにかを求めて蠢いている様は、正気ではいられなくなるような凶きよう悪あくな姿である。そして球体の上方には、あの忌いまわしい山羊やぎ面づらが食いこんでいた。

（あれがウィルバーの弟か……）

ウィルバーも醜しゆう悪あくではあったが、まだ人間らしくはあった。だが彼の弟は、もはや人間ではない。紛まぎれもない怪かい異いである。意思の疎そ通つうなどできはしないだろう。

怪異の瞳が一いつ斉せいにアーミティッジの姿を捕ほ捉そくした。強きよう烈れつな悪意が噴ふん出しゆつする。その視線に晒さらされただけで心は荒こう廃はいし、血液は毒素と化して体を汚けがしていくかのようだった。

すでに人間の力でどうこうできる代しろ物ものではなかった。彼の力を凌りよう駕がするだけの外げ道どうの力を行使しなければ、葬ほうむり去るなど到とう底てい不可能である。そのためには強力な魔ま導どう書しよか、それに匹ひつ敵てきする魔術武器を用意する必要があった。もちろん、それらを使いこなすだけの資質も必要である。

魔導書は用意していた。ある程度なら使いこなすこともできる。だが、それで太た刀ち打うちできるような相手ではなかった。

怪異が口にも似た突起物を蠢かせながらアーミティッジへと迫せまっていく。彼は魔導書を片手に呪じゆ文もんを唱え始める。だが怪異は意に介かいさずに迫っていった。巨大すぎる球状の異物がアーミティッジの眼前でそびえ立つ。

もはやこれまでと覚かく悟ごを決めたそのときだ。唐とう突とつに影かげが差し、地面に巨大な影が浮うかび上がったかと思うと、上空からのしかかるような気配が降ってきたのである。

続いて腹の底に響ひびくような駆く動どう音が木こ霊だまし、巻き上げるような突とつ風ぷうが周囲に吹ふき荒あれた。怪異の目線が一斉に上空へと向けられた。それはアーミティッジも同様である。

（！）

思わずアーミティッジは目を見張った。

百メートルほど上空だろうか。そこに鋼はがねの巨きよ人じんの姿があったからである。

どのような理論なのかまるで解らなかったが、太陽を背にして神こう々ごうしく光り輝かがやく鋼の体たい軀くは、神仏にも似た雄ゆう大だいさがあった。

邪じや悪あくさは感じない。

恐きよう怖ふ心しんもない。

まるで正義を体現したかのような圧あつ倒とう的な存在感である。

その鋼の巨人は背に鋼鉄の鱗うろこを幾いく重えにも重ねた翼つばさのようなものを広げており、それから放出されるフレアを浮ふ力りよくに変えて浮かび上がっている。

敵ではないと直感的に感じたが、突とつ然ぜん、姿を現した巨人に対して驚おどろきを隠かくしきれないアーミティッジ。

『そこの人間。存外に苦戦しているようではないか』

上空に浮かぶ鋼鉄の巨人から、よく通る凛りんとした少女の声が降ってきた。ちょっと小生意気な口調の中に意思の力が明確に感じられる。

『どれ、妾わらわが加勢してやろう』

アーミティッジの返答を聞くまでもなく、鋼鉄の巨人は降下し始める。

『なあに目的は一いつ致ちしている。外道を狩かるのが妾の宿命だからな』

巨人の右の掌てのひらが光で紡つむがれた糸のようなものに包みこまれていく。それは幾重にも編みこまれ、光の網あみへと姿を変えていった。よく見ると、その一本一本が魔術文字で形成されていることが判る。

　やがてそれは紋もん様ようを形作り、砕くだけ、弾はじけ、拡散し、再び集結していく。最終的にそれは結けつ晶しよう化かし、殺意と破は壊かいを象しよう徴ちようする一挺ちようの銃じゆうへと姿を変えた。

『死にたくなくば退どいておれ。いくぞ、アイオーン！』

　少女の声に促うながされ、アーミティッジはその場から駆かけ出した。

　それを受けて鋼鉄の巨人は銃じゆう口こうを怪異へと向ける。

「イグナヰイ……イグナイヰ……トゥフルトゥクングア……よぅぐそぉとおお……！」

　怪異が呪じゆ詛そにも似た言葉を吐はき出しながら巨人を凝ぎよう視しする。

「イブトゥンク……ヘフイエ―ングルクドルウ……」

　巨人が引き金に指を添そえた。

『亡ほろびよ、外道！　父親の下へと還かえるがよい！』

　銃口に光の粒りゆう子しが集約していく。それは凶きよう暴ぼうなまでの光を湛たたえ、唸うなり声を上げ始めた。

　次の瞬しゆん間かん、獣けものの咆ほう吼こうにも似た爆ばく音おんが鳴り響いた。

「エエ・ヤ・ヤァ・ヤァ・ヤハアアア―エ・ヤヤヤアアアア……ング・アアアアア……ング・アアア……フ・ユウ……フ・ユウ……助けッ、助けて！　ち、ち、ち、父上ぇ！　父上ぇぇぇぇぇぇ！　よおぉぉぉぉぉうぐそおとおとおぉぉぉ……！」

　魂たましいを冒おかしかねないほどの絶ぜつ叫きようが辺りに響き渡わたり、それと同時に怪異は姿を掻かき消していく。

　そしてすべての片がついたとき、鋼鉄の巨人の姿はなかった。

　ただ、地面に巨きよ大だいすぎるクレーターだけが残されていた―。

+

　たゆたうような微睡まどろみの中で、アルは瞼まぶたを開いた。

　眼前に広がる世界は燃え立つような赤い炎ほのおで包まれており、戦火にも似た状じよう況きようである。

　足あし下もとには血と屍しかばねと瓦が礫れきと化した鉄てつ屑くずが広がっており、地じ獄ごくの中に迷いこんでしまったかのようだ。

　そんな陰いん惨さんな世界の中で、アルは一人、呆ぼう然ぜんとたたずんでいた。

　宝石のごとき輝かがやきを放っていた翡ひ翠すい色の瞳ひとみは曇くもり、ひたすら無気力な姿を晒している。疲ひ弊へいした体は彼女から意思の力を、そして生命力をも奪うばい、虚きよ無むが華きや奢しやな体を冒していく。

　心身ともに限界だった。立っていることすらままならぬ有様であり、ちょっとした刺し激げきで崩くずれ落ちてしまうのは確実である。

　そのような状態で、なぜ立ち続けるのか。

　いっそのこと倒たおれ、目を伏ふせてしまったほうがどんなに楽だろうと思わずにはいられない。

　だがアルは立っていた。揺ゆらぐ体を必死に支えながら立っていた。

　それは彼女の呪のろわれた宿命がそうさせていたのかもしれなかったが、もっと別の力が働いているようでもあった。

　どちらにせよアルは立ち続ける意味を見み出いだせずにいた。

　ただ、そうしなければならないという焦しよう燥そう感かんにも似た思いが胸中を支配していたのである。だから立っていられたの

だ。

　だがその理由について思い当たる節もなく、またそれに行き着いたところでどうなるというものでもなかった。このような状況下で思案するなど愚ぐに等しい。

　いっそのこと楽になってしまえと、心が折れかけたときだった。

　戦士たちの骸むくろが緩かん慢まんな動作で起き上がった。

　血まみれの者、腐ふ敗はいした者、刈かられた首を抱かかえている者、白骨化した者──悲劇的な最さい期ごを遂とげた歴代の主あるじたちがアルの前に立ちはだかった。彼らは光を失った暗い瞳で彼女を見つめてくる。

「汝なれら……」

　訴うつたえかけるような目がアルの全身に降り注がれる。

（怨おん念ねん……それとも怨えん嗟さか……）

　だが、それとも違ちがうようだ。

　骸の中の一人がアルに手を差し出した。肉が削そげ、血を流し、骨すら覗のぞくその手に握にぎられているのは穢けがれなき刃やいばである。

　この凄せい惨さん極きわまる世界において、その刃には一点の曇りも、そして迷いもない。

　命なき瞳が訴えかけてくる。

　声なき声で、力の限り──己おのれの存在を賭として訴えてくる。

　──剣けんを執とれ、と。

　涙なみだを止めるために、血を止めるために。

　そしてなにより、今なお戦い続ける彼のために。

+

『おーほっほっほっほっほっほっ！』

　その卑いやしい叫さけびとともに、鬼デウ械ス・神マキナ・ベルゼビュートが地の底から這はい上がってきた。その寸ずん胴どうな軀からだから放たれる腐ふ臭しゆうは空気を汚よごし、瞬またたく間まに辺りは瘴しよう気きと臭気で汚お染せんされていく。

「ティベリウス！」

　九郎は叫ぶと同時にベルゼビュートへ向けてバルカン砲ほうを掃そう射しやする。爆音が轟とどろき、閃せん光こうとともに何百発もの砲ほう弾だんがベルゼビュートの機体を捉とらえていく……はずだった。だがそれはベルゼビュートが前面に展開した防ぼう御ぎよ陣じんによって弾はじかれてしまう。

『うふふふふふふっ☆』

　ティベリウスの嘲ちよう笑しようは怒いかりという名の琴きん線せんに触ふれるほどの不快さだった。

　九郎は唇くちびるを噛かみしめると、ベルゼビュートを睨にらみつける。

「ダーリン、どうするロボ!?　レムリア・インパクトは使えないロボよ」

　エルザが不安に思うのも無理はない。デモンベインの右みぎ腕うではロードビヤーキーとの戦いで潰つぶされており、レムリア・インパクト自体が放てなくなっていたからだ。

「くそっ！」

　吐はき捨てる九郎。

　現状でベルゼビュートに勝つのは不可能に近い。しかも相手はティベリウスだ。嬲なぶり殺しにされるのは確実である。

　絶望的な状況だった。

　だが希望は捨てない。

米こめ粒つぶほどの光明しかなかったとしても、可能性が一パーセントでも残っている限りは戦うことができた。

九郎はデモンベインを疾しつ駆くさせ、その勢いを利用してベルゼビュートへと跳とび蹴げりを敢かん行こうした。デモンベインの蹴りが空気を裂さき、唸うなり声を上げる。

『あららん。不用意に攻こう撃げきしちゃってもいいのかしらあん？』

ベルゼビュートは避さけようともせず、棒立ち状態である。

「ダーリン！　一気に殺やっちゃうロボッ！」

エルザに促うながされるまでもなく、デモンベインの右みぎ脚あしはベルゼビュートへと突つき進んでいく。このままいけばベルゼビュートは宙を舞まい、地面へと叩たたきつけられる。その無様な姿は九郎にも容易に想像できた。

だが―。

（なんだ、この不安感……）

胸中がざわめき、悪お寒かんが背筋を駆かけ抜ぬける。

そうこうしている間にもベルゼビュートとの距きょ離りは縮まっていく。デモンベインの右脚がベルゼビュートの胴どう体たいに食いこもうとしたときだった。

「！」

九郎の目が、とんでもないものを捕ほ捉そくした。

「くぅぅぅぅぅぅっ！」

九郎は呻うめき声を発しながら、蹴りの勢いを強ごう引いんにねじ曲げていく。蹴りはベルゼビュートを逸それ、跳び蹴りはとんでもない回し蹴りへと変化した。デモンベインは体勢を崩くずして転げそうになるが、なんとか制せい御ぎよして転てん倒とうだけは免まぬかれた。

しかし一点に集中させたエネルギーの方向を無む理り矢や理りね

じ曲げた結果、九郎の肉体には内臓が掻かき混ぜられるかのような激しい負ふ荷かがかかっていた。息が詰つまり、意識が遠ざかっていく。だがそれを気合いでつなぎ止めると、ベルゼビュートとの距離を置いて向き直った。

「はうぅぅ~。ダーリン、なにやってるロボ!?」

　エルザが不満を漏もらすが、かまってなどいられない。

　九郎はベルゼビュートを睨みつける。

「ティベリウス、てめえ……」

　自分でも解わかるほど声が怒りに満ちていた。体が打ち震ふるえ、体中の血液が頭に上っていく。あまりにも激しい激情に我を見失ってしまいそうなほどだ。

『うふっ☆』

「てめえは……てめえは、どこまで腐くさってやがるっ！」

『おーほっほっほっほっ！　だってアタシ、ゾンビだけにねえ？　まっ、そゆことよ☆』

「ちぃいいいいっ！」

　九郎は舌打ちすると、操そう縦じゆう桿かんを力任せに叩きつける。

　ベルゼビュートの頭頂部にそれは括くくりつけられていた。鬼デウ械ス・神マキナの大きさに比べるとあまりにも小さく、ゴミがついているようにしか見えない。だが、それはゴミなどではなかった。括りつけられていたのは十じゆう字じ架かである。そしてそこには見覚えのある女性が磔はりつけにされていた。

「い、いやあああああっ！」

　その女性―瑠璃は、泣き叫さけびながら激しく身じろぎをしている。自力で逃のがれようとしているのだろうが、あのような場所では磔から脱だつしても逃にげ場はない。

「覇道瑠璃ロボ。あんなとこで、なにやってるロボ!?」

「知るかっ！」

　だが秘密基地に侵しん入にゆうしたアンチクロスの一人がティベリウスであり、その彼が司令室を襲おそったのは間ま違ちがいない。

「外げ道どうがぁぁぁぁぁぁっ！」

『おーほっほっほっ！　さあ、やれるもんならやってみなさーい。でも瑠璃ちゃんもーいつ緒しよにおだぶつしちゃうわよん？』

「くそったれっ！」

　目の前にいたらバルザイの偃えん月げつ刀とうで微み塵じん切ぎりにしているところである。

（とにかく、落ち着け……。落ち着くんだ）

暗示をかけるかのように、何度も何度も自分へと言い聞かせる。

（今は姫ひめさんを助けることが先決だ）

　九郎は息を吸いこみ、ゆっくりと吐はき出す。さらに頬ほおを張って気合いを注入する。

（でも、どうやって!?）

　手も足も出ないとは、まさにこのことである。瑠璃が囚とらわれている以上、攻撃は一いつ切さいできない。

（アルさえいれば―魔術師マギウスにさえなれれば……）

　飛ひ翔しようし、瑠璃を助けた後でベルゼビュートとの決戦に臨のぞむ。そんな選せん択たく肢しも残されていたのだが―。

（手出しできねえのに、どうやって助けろってんだ！）

　己おのれの無力さに九郎は腹を立てた。

「ダーリン、どーするロボ!?　このままじゃ、殺られてしまうロボよ」

「解わかってる。解ってるさ……」

　しかし、いくら考えても妙みよう案あんは浮うかんではこない。浮かぶのは最悪の結末ばかりである。

『あららーん、なんにもできないのぉ？　そうねそうね、そうでしょうね。なにもできないでしょーねぇ。そんなおバカさんをいたぶるのは、とっても愉ゆ快かいだわぁぁぁぁっ☆』

　ベルゼビュートが動いた。見た目にそぐわぬ俊しゆん敏びんな動きでデモンベインとの距離を零ゼロにすると、その頭部を鷲わし摑づかみにする。

「ちいぃぃっ！」

『バッド・トリップ・ワイン☆』

　ベルゼビュートの掌てのひらから溢あふれ出た瘴しよう気きが、デモンベインの頭部から内部へと注入されていく。それはデモンベインの魔術回路を汚お染せんし、暴走させ、麻ま痺ひさせてしまう。

　やがてそれは回路を伝ってコックピット内へと達した。あらゆる回路がショートし、パルスが駆かけめぐっていく。計器類が立て続けに爆はぜた。

「がああああああああああ！」

「きゃあああああああああ！」

　九郎とエルザの絶ぜつ叫きようがコックピット内に響ひびき渡わたる。

　心と体を同時に嬲なぶられた九郎の意識は急激に遠のいていく。視界は幕が下ろされたかのように暗くなった。

『おーほっほっほっ！　さあ、もっともっといい声で泣きなさぁぁいっ！　アタシをもっともっともっと楽しませるのよ！　ハイになりたいのよ、アタシはッ！』

　ティベリウスの嘲ちよう笑しようが遠くで聞こえていた。

「大十字さん！　大十字さぁぁぁん！」

　瑠璃の叫びは九郎には届かなかった。

+

　コックピットの計器が立て続けに爆ぜた。

　その炸さく裂れつ音で意識を取り戻もどした九郎は、頭を振ふってから状じよう況きようを確かく認にんし始める。

　ベルゼビュートに注入された瘴気はデモンベインを冒おかし続けており、魔術回路は致ち命めい的とも言えるダメージを受けていた。モニターを確認すると、そこにはうんざりするほどのエラーメッセージが表示されている。

「ボーっとしてる場合じゃないロボ！　各機関の稼か働どう率りつがどんどん落ちているロボよ！」

「ああ、悪い……。あのクソ野や郎ろうの毒気にやられて……」

　エルザの叱しつ責せきから、気を失っていたのはーいつ瞬しゆんであることが解った。

「なろぉぉぉぉっ！」

　九郎は吠ほえると、デモンベインの頭部からベルゼビュートの腕うでを引きはがそうとする。だが魔術回路の大半が機能しなくなっているせいか、デモンベインは九郎の言うことを聞かない。

「ちくしょう！」

　ふとベルゼビュートがデモンベインを解放した。

　突とつ然ぜん、支えを失ったデモンベインは両りよう膝ひざから崩くずれ落ちてしまう。転てん倒とうこそ避さけられたものの棒立ちである。

『くふふふふふ……おーほほほほほほほ！』

　ティベリウスの高笑いとともに、ベルゼビュートの拳こぶしが突つき出される。

「大十字さん！　危ないっ！」

　瑠璃の悲鳴を耳にしながら、デモンベインは回かい避ひ行動へと移行する。だが九郎の命令に対し、デモンベインはワンテンポ―いや、数テンポは遅おくれて動き出した。

　デモンベインが身をよじる。しかし、それよりも速くベルゼビュートの攻こう撃げきが炸裂する。デモンベインの右口に炸裂したベルゼビュートの拳は、装そう甲こうを突き破やぶって右みぎ腕うでを吹ふき飛ばした。むき出しになった肩かた口ぐちから火花が散り、爆ぜ、黒こく煙えんが上がる。

　九郎は呻うめきながらも体勢を立て直す。

『ほらほら、ボーっとしている暇ひまはないわよ！　くかかかかかかかかっ☆』

　ベルゼビュートの掌に圧縮された瘴気の塊かたまりが出現した。

それは断だん末まつ魔まの叫さけびのような轟ごう音おんを上げながらデモンベインへと襲おそいかかってくる。

　九郎は生き残っている魔術回路を駆く使しして跳とび上がり、それを避けることに成功。だが着地には失敗し、地面へと倒たおれこんだ。

「ぐがっ！　ち、ちくしょう……」

「う～っ。データがトんでしまうロボ～～」

　席から投げ出される形となった九郎とエルザは苦痛に顔を歪ゆがめ、呻きながらも所定の位置へと戻っていく。

『あらぁ？　どぉしたの、九郎ちゃん？　そんなとこに這はいつくばって？』

　ベルゼビュートが歩み寄ってくる。そこに警けい戒かい心しんなど存在しない。嘗なめられているのは一いち目もく瞭りよう然ぜんだった。

『ほらほら、早く立ち上がりなさーい。殺し合いにテン・カウントはなくてよ？』

「ふざけやがって……。調子に乗ってんじゃねえぞ、この腐ふ乱らん死体野郎が！」

　九郎は怒ど声せいを浴びせかけながら、ベルゼビュートの足を払はらおうとする。

『おっとお。アタシが転んだら、瑠璃ちゃんがペチャンコになるわよん？』

「くっ！」

　九郎は慌あわてて蹴けりの勢いを御ぎよした。

『お・バ・カさんね～。うりゃうりゃうりゃうりゃうりゃああああ！』

　ベルゼビュートはデモンベインが中ちゆう途と半はん端ぱに伸のばした右足を何度も踏ふみつけた。足首が潰つぶれ、膝があらぬ方

向へと折れ曲がる。関節部を中心に紫し電でんが散り、爆ばく発はつしていく。右足は完全に使い物にならなくなった。

　ベルゼビュートの攻撃は止まらない。かろうじて上半身を起こしているデモンベインへと向かって、サッカーボールでも蹴るかのような蹴りを炸裂させた。

「ぐがあああああああああああああ！」

　前から後ろから、容よう赦しやのない蹴りが飛んでくる。その度たびに装甲に罅ひびが入り、剝はがれ、火を噴ふいた。

「だ、大十字さんっ！　あああああああ！　よくも……。よくも、お爺じい様のデモンベインをっ！」

『おーっほほほほほほほっ！　愉ゆ快かい！　愉快よぉぉぉぉ！　でも、そろそろトドメかしらん？』

　再びベルゼビュートの掌てのひらの中に瘴しよう気きの塊が発生する。それは空間を歪ませながら、さらに密度を濃こくしていく。

「やべえ、あんなの食くらったら……終わりだ」

「ダーリン、どうするロボ!?　ヤバイロボよっ！」

「くっ……」

　だが、有効な手段が浮うかばない。

　デモンベインのダメージは深刻であり、魔ま術じゆつ回路も回復の兆きざしがない。さらにデモンベインの右足は先ほどの攻撃で潰されていた。これでは回避することすらままならない。状況としては最悪であり、勝機は無に等しい。

　だが一番の問題は、ベルゼビュートの頭頂部に括くくりつけられた瑠璃の存在だった。彼女がいる限り、デモンベインに攻撃する機会はない。攻撃できなければ勝つことはできなかった。

（ちくしょう……。あれを避けるなんて……無理だ）

　かろうじて生きている魔術回路をすべて使ったとしても、ベルゼビュートの攻撃を避けるのは不可能に近い。

「くそったれっ！」

　ベルゼビュートの掌の中で瘴気の塊は濃のう度どを上げた。やがてそれを中心に漆しつ黒こくの嵐あらしが吹き荒あれ、大気が汚お染せんされていく。

　不意に九郎の聴ちよう覚かくが何者かの声を察知した。

　―クルシイ

　それは聴覚に訴うつたえかけてはいなかった。直接、九郎の脳内に語りかけてくる。

　―タスケテ

「これは……」

　―サムイヨ

「どうしたロボ？」

　―シニタクナイ

（これは……この声は、まさか……）

　九郎が最悪の答えを導き出したとき、ベルゼビュートが動いた。

『気付いたみたいね、九郎ちゃん？　この力の正体を。そうよっっっ！』

　ベルゼビュートから思念の嵐が噴ふん出しゆつした。それは荒れ狂くるい、吹ふきすさびながらデモンベインへと押し寄せてくる。

　視界が闇やみの中に没ぼつしていく。

　暗く、深く、冷たい闇黒の中へと包みこまれたとき、九郎は無数の声を聞いた。

　──死にたくない

　──熱い

　──苦しい

　──冷たい

　──痛い

　──寂さびしい

　──寒い

　──暗い

　──怖こわい

　──痛……

　──怖……

　──死にたくない死にたく……

九郎の頭の中で無数の声が反はん響きようし、木こ霊だまする。

それは何千人──いや、何万人もの人間が同時に発した断だん末まつ魔まの叫さけびである。

苦痛で泣き叫ぶ者がいる。

孤こ独どくに怯おびえている者もいる。

母を探し求め、絶ぜつ叫きようする子供がいる。

ありとあらゆる絶望、苦痛、嫉しつ妬と、怨えん嗟さなどが複雑に絡からみ合い、断末魔の叫びとなって吹き荒れていく。

「ぐ、あああああああああッ……あああああああああ！」

「きゃあああああああっ！」

何千人もの怨おん念ねんが九郎、そしてエルザの体内へと侵しん入にゆうしていく。

魂たましいが、そして肉体が悲鳴を上げる。

ティベリウスに殺された者たちの絶望が九郎の心を汚けがし、冒おかし、蝕むしばみ、壊こわしていく。

『おーっほほほほほほっ！　これが【妖デ・ウ蛆エルミのス・ミ秘ステリ密イス】特製、怨おん霊りよう呪じゆ弾だんよ！　人々の怨念を食くらって威い力りよくを増す、ベルゼビュート最強の呪法兵装！　死人使いはね、人を殺せば殺すほど、怨うらまれれば怨まれるほど強くなるのよん☆』

「てめえ……。どこまで腐くさって……」

九郎は片かた膝ひざをつくと、モニター越ごしにベルゼビュートを凝ぎよう視しする。

ティベリウスによって未来を断たたれてしまった者のことを考えると、怒いかりでどうにかなってしまいそうだった。だが今の九郎には彼らの無念を晴らし、ティベリウスの魔ま手しゆから解き放つ手立てがない。やり場のない怒りが九郎の胸中で燻くすぶる。

『さあ！　アンタも怨霊の一部になっちゃいなさぁぁぁぁいっ♪』

　嘲あざけるような、蔑さげすむような、はらわたが煮にえくり返かえるほどの不ふ遜そんな嬌きよう笑しようが、世界を──そして九郎を滅めつ亡ぼうへと導いていく。

　ベルゼビュートの体から、瘴しよう気きが蒸気のごとく噴出し始めた。怨念を孕はらんだその瘴気は、ヴェールのごとくベルゼビュートへと覆おおい被かぶさっていく。その姿は悪魔そのものであり、ベルゼビュートは悪夢を引き連れながらデモンベインの下もとへと歩き出した。

　怨霊の存在感は、いよいよ増していく。

　無念の死を遂とげ、今もなお現世に縛しばられ続ける者の苦痛、生命ある者への妬ねたみが爪そう牙がとなって九郎とエルザに襲おそいかかってきた。

（やべえ……あれの直ちよく撃げきを食らったら──）

　ベルゼビュートの掌てのひらの中で熟成された瘴気の塊かたまりが──死者の怨念を糧かてにした最悪の業ごう火かがデモンベインを飲みこんでいく。

　散さん弾だんでも浴びたかのように全身の装そう甲こうが弾はじけ飛んだ。剝むき出しになった魔術回路が火を噴ふき、沈ちん黙もくしていく。

　コックピット内にも無数の怨念が渦うずを巻いていた。それは九郎の体を容よう赦しやなく打ち据すえ、魂を砕くだいていく。それは言葉では表現できぬほどの激しい衝しよう撃げきであり、悲鳴すら吐はき出せないほどだった。

　九郎は抵てい抗こうすらできないまま蹂じゆう躙りんされ続ける。

「きゃあああああああＡＡああああＡ□□Ａ￥ａＡＡａ@!?　ッッああＡＡッッ！」

　エルザが絶ぜつ叫きようし、計器類の上に突つっ伏ぷした。

「エルザッ！　おい……大だい丈じよう夫ぶかっ！」

　叫ぶが、エルザからの応答はない。彼女の瞳ひとみからは光が抜ぬけ落ちていた。

「エルザッ！　エルザ……起きろっ！」

　なおも九郎は叫ぶが、エルザは目覚めない。気を失っているのか、それとも―。

　最悪の事態が九郎の胸を締しめつけていく。

　デモンベインは魔ま導どう書しよなしでは起動しない。魔導書の代役を果たしているシステムが沈黙してしまっては、デモンベインは単なる鉄てつ塊かいでしかない。

「ちくしょうっ！　エルザッ！　エルザァァァァァァッ！」

　メインの動力が停止し、駆く動どう音が消失していく。汲くみ上げられていた無む尽じん蔵ぞうの力が消え、デモンベインから光が失われていくのが解わかった。

（ちくしょう……こんなとこで……こんなとこで終わってたまるかよ！）

　九郎は操そう縦じゆう桿かんをメチャクチャに動かすが、完全に沈黙したデモンベインは指一本すら動かせない。現在、機能しているのは、魔術回路とは一いつ切さい関係ないモニターだけである。

「そんな……。動け……動いてくれよっ！」

　こんなところで立ち止まっている場合ではなかった。焦しよう燥そう感かんが心を支配していく。

「俺は戦わなきゃ……戦わなきゃならねえんだっ！　デモンベイン！　動けっ！　動けよっ！　エルザッ！　起きろっ、起きてくれっ！」

　九郎の叫びと操縦桿を動かす音が空むなしく響ひびき渡わたる。

「うふふふふ、これでチェックメイトね。九郎ちゃん♪」

　モニターへと目を向けると、ベルゼビュートの頭頂部にティベリウスが立っていた。彼は磔はりつけにされている瑠璃に寄り添そ

い、彼女の頬ほおをなでている。

「ひぃ……」

　瑠璃は消え入りそうなほどの小さな悲鳴を上げると、目元に涙なみだを浮うかべながら子犬のように震ふるえている。

「て、てめえ……」

　九郎はデモンベインのハッチを開くと、コックピットから這はい出してステップの上に立つ。ホルスターから二挺ちようの拳けん銃じゆうを抜き、その銃口をティベリウスへと向けた。

　これは最後のチャンスだった。デモンベインが動かない以上、ティベリウスとの直接対決へ持ちこむしかなかったからだ。

　だが痛めつけられた体には、二挺の魔ま銃じゆうはあまりにも重い。銃口を向けるだけでも著いちじるしく体力を消費してしまう。

「しゃらくさい！」

　ティベリウスの腹から触しよく手しゆが排はい出しゆつされる。それは一直線に九郎へと向かい、右の肩かたを貫つらぬいた。触手は数を増し、九郎の四し肢しを次々と刺さし貫いていく。彼の姿は標本の中で磔にされた昆こん虫ちゆうのようだった。

「ぐがあああああああっ！」

　傷口から血が噴き出し、激痛で意識が遠のいていく。だが、そんな状じよう況きようでも魔銃だけは握にぎりしめたままだ。

「大十字さんっ！」

　悲鳴を上げる瑠璃の姿をティベリウスが横目で眺ながめる。

「さぁて。九郎ちゃんは、そこでおとなしくしててねん。これからアンタのために、とっておきのショーを公開するんだからぁん☆」

　ティベリウスはケタケタと笑うと、抗あらがうことができずにいる瑠璃の首筋に舌を這わせた。

「いやあああああっ！」

　これからなにをされるのか敏びん感かんに察知したのだろう。つんざくような悲鳴を上げる瑠璃。

「て、てめえ……！」

　九郎は怒ど声せいを吐き出すと、頬を引きつらせながらティベリウスを睨にらみつける。

「そうよ！　そうそう、その顔よ、九郎ちゃん！　その顔が見たくて、わざわざおあずけしてたんだからぁ！　もっともっと、悔くやしがってぇぇん☆」

　ティベリウスは瑠璃の胸むな元もとを乱暴につかんだ。そのまま衣服を引き裂さくつもりなのだろう。

（これ以上……好き勝手にさせてたまるかよっ）

　九郎は歯を食いしばると、渾こん身しんの力をこめて体を動かす。四肢は貫かれたままだが、神経はつながっているようだ。手首だけはかろうじて動かすことができた。

　九郎は手首を捻ひねって自ク動ト式ウ拳グ銃アの向きを調節する。かなり無茶な体勢だが、かまってなどいられない。九郎は迷うことなく自動式拳銃の引き金を引いた。爆ばく音おんとともに弾だん丸がんが射出され、左ひだり腕うでを貫いている触手を粉ふん砕さいする。左手は解放されたが、無理な体勢で大口径の銃を撃うったせいか、右手は麻ま痺ひして痛みすら感じられなくなっていた。

　九郎は自由になった左手で回転式イタ拳銃クアを構え、ティベリウスへと照準を合わせる。そして一気に六発の銃じゆう弾だんを撃ち放った。銃弾のうち三発はティベリウスの脇わきを逸それ、一発は腹部に、残りの二発が顔面へとヒットする。ティベリウスの顔面を覆おおっていた仮面が粉こな微み塵じんに砕くだけ散った。

「ぐぶあああああああああッ！」

　ティベリウスは半ば吹ふき飛んでしまった顔面を手で押さえつけながら、もがき苦しんでいる。九郎の四肢を貫いていた触手が抜ぬけ落ちた。

　九郎は回転式拳銃をホルスターに戻もどし、左手で自動式拳銃を握りしめる。先ほどの無茶がたたり、右手は使い物にならなくなっ

ていた。

　自動式拳銃が火を噴ふいた。弾丸は確実にティベリウスの顔面へと向かい、押さえつけている腕ごとそれを吹き飛ばしていく。

　だが、それだけでは安心できない。ティベリウスは死んでいるのだ。脳のう漿しょうや肉にく片へん、頭ず蓋がい骨こつをまき散らしていたとしても、死んだことにはならない。

　九郎は自動式拳銃を連射する。その度たびにティベリウスは肉にく片へんを飛ばしながら形を崩くずしていった。弾たまを撃ちつくすころには彼の上半身は綺き麗れいに吹き飛んでいた。

　九郎は空になったカートリッジを捨てると、新たなマガジンを取り出す。不自由な右手を駆く使ししながら、なんとか装そう塡てんし終わったときだった。

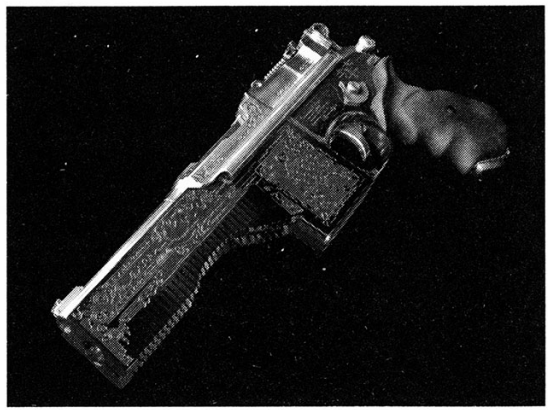
「大十字さん！　逃にげてッ！」

　瑠璃の悲鳴と同時に全身に鳥とり肌はだが立った。悪お寒かんが体を走り抜け、危機感を感じた九郎は無意識のうちにコックピット内へと飛びこんでいく。

　九郎の背後からとてつもなく巨きよ大だいな拳こぶしが──ベルゼビュートの拳が迫せまってくる。

　声すら上げられないまま、九郎の意識は断絶した。

第十八章　君の温もりを感じて



クトゥグァ

光すら届かぬ深しん淵えんの中で、アルは骸むくろたちと向き合っていた。

彼らは輝かがやきを失った瞳ひとみを彼女へと向けたまま、手にした剣けんを差し出している。一片の穢けがれもない無む垢くなる刃やいばを──。

「汝なれらは……まだ妾わらわに戦えというのか……」

アルは問いかけるが骸たちは答えない。無言のまま光り輝く剣を彼女に差し出すだけである。

だが彼女にはもはや、その剣を受け取るだけの気力はない。

闘とう志しもない。

魂たましいは抜け殻がらでしかなく、それを執とろうとも思わなかった。

疲ひ弊へいしていた。

千年を超こえる悠ゆう久きゆうを生き、そのすべてを戦いに費ついやしてきたアルは、それと気づかぬうちに少しずつ魂を摩ま耗もうさせていたのである。

あとに残されたのは憔しよう悴すいしきった肉体だけだった。

アルは首を横に振ふり、剣を執ることを拒きよ否ひした。

だが、なおも骸たちは動かない。

彼らは声なき声で訴うつたえかける。

剣を執れと──。

「……すまぬ」

いたたまれなくなったアルは、彼らから目線を外す。

（無む駄だだ……。無駄なのだ。妾は汝らのように強くはない……）

彼らの力にすがり、すべてを奪うばいつくし、消しよう耗もう品のように使い捨ててきたアルである。

魔ま導どう書しよは魔術師によって行使されるものであり、使命があったとはいえ、彼らを使うなど根本的に間ま違ちがっていたのだ。そんな自分に剣を執る資格などなかったのだと彼女は思う。

「汝らには復ふく讐しゆうする権利がある」

ぽつりとアルはつぶやいた。

「その剣で妾を貫つらぬき、汝らをいまだに彷徨さまよわせる根こん元げんを断たつがいい……。妾を滅ほろぼし、解き放たれろ。汝らを縛しばる死し霊りよう秘法という呪のろいから――。汝らの還かえるべき場所へと向かうために」

アルは静かに目を伏ふせた。

恐きよう怖ふ心しんはない。

それを感じるだけの心もない。

アルは待った。

眩まばゆい光に包まれた穢れなき刃で己おのれの胸が貫かれるのを――。

だがそのときは訪おとずれず、代わりに甲かん高だかい金属音が響ひびいてきた。

静かに瞼まぶたを開くと、足あし下もとに剣が転がっていた。骸たちの姿は消え失うせており、辺りは荒こう涼りようとした空気が流れていた。

（そうか。とうとう汝らにも見放されたか）

アルは自じ嘲ちようの笑えみを浮うかべた。

滅ぼす価値すらないのだと言われたような気がしたからだ。

（……そうか。もとより妾になど縛られてはおらなんだか）

いかに自うぬ惚ぼれていたかが解わかる瞬しゆん間かんだった。

「ふふっ……。とんだ道どう化けだな」

そんな自分だからこそ、主あるじたちにも見捨てられたのだとアルは思う。すべては自分が招いたことであり、自じ業ごう自じ得とくでしかなかった。

ふと目の前の世界が滲にじんだ。水中にでもいるかのように世界が揺ゆらめいている。

泣いていることに気づいたのは、喉のどから嗚お咽えつが漏もれていたからだ。

そしてそれに気づいたアルは感情を抑おさえることができなくなった。目からは信じられないほどの大おお粒つぶの涙なみだがボロボロとこぼれ、まるで赤子のように泣きじゃくってしまう。

アルはその場で崩くずれ落ちると、さらに泣きわめいた。

そんなアルの傍かたわらには、主たちが託たくした穢れなき刃が煌きらめいている。そこには一片の曇くもりもなければ迷いも存在しない。だからこそ、今の彼女にはそれを手にすることができなかった。

（──妾とは……違ちがいすぎる）

彼らの想おもいには応こたえられそうになかった。

突とつ然ぜん、なんの前まえ触ぶれもなく世界は暗転する。

いかにも夢らしい連続性のなさに苦く笑しようしながらも、アルは目元を拭ぬぐい、辺りを見み渡わたした。

アルは自分の姿さえも確かく認にんできないような暗くら闇やみの中にいた。そこは無限に広がる空間のようでもあったが、酷ひどく窮きゆう屈くつな空間のようにも思える。まるで距きよ離り感かんがつかめず、平へい衡こう感かん覚かくもあやふやで、宇宙にで

も放ほうり出されたかのようだ。

　だが、不思議と孤こ独どく感かんはない。そこに自分以外の気配、そして息づかいを感じたからである。

　不意に灯あかりが灯ともった。

　それは儚はかなく、淡あわい灯ともし火びである。

　ゆらゆらと揺れながら灯るそれは燭しよく台だいに立てられた蠟ろう燭そくの炎ほのおであり、その柔やわらかで暖かな暖色系の光が世界に色を与あたえていく。

　そこは暗く狭せまい部屋だった。特になにかで飾かざられているわけでもなく、質素で無機質な閉とざされた空間である。扉とびらもなければ窓もない。箱の中にでも閉じこめられたのではないかとさえ思えるほどだ。

　そのような部屋の中で、一人の老人が取り憑つかれたかのように書を書き綴つづっている。見開かれた目は血走っており、瞬まばたきすら忘れて手元の一点を見み据すえていた。

　アルは直感的に男の正体を悟さとった。

　彼女は男の傍らに立つと、そっと彼の横顔を覗のぞきこむ。

「父上とお呼びすればよろしいか？」

　アルはその男──彼女の著者であるアブドゥル・アルハザードに万ばん感かんの想いをこめて語りかけた。

　彼は応えない。一心不乱に書を書き綴るだけである。

　だがアルは気にもせず、一方的に話し続けた。

「つもる話もあろうものだが……。こうして見まみえてみると、どうだ。たいしたことも思い浮かばん」

　アルハザードはアルの姿に気づいていないのか、黙もく々もくと書を書き続けている。

　それもそのはずだ。これは夢である。死へと向かう刹せつ那なに

見える幻まぼろしでしかないのだから、なにかを期待するだけ無駄だった。

　アルハザードは書を書き続ける。

「戯たわむれに訊きこう。父上はなにを思って妾わらわを書き記したのか？」

　アルハザードは間断なく筆を走らせている。

　アルは静かに息を吐はき出すと、あらためてアルハザードへと目を向けた。

「やれやれ。夢ならば、もう少し愛あい想そよく振ふるまえばどうだ？」

　苦笑いするアル。

　──外なる宇宙　自らの尾おを喰くらう蛇へびの庭

　突然、アルの頭の中に不可思議な情報が流れこむ。

「……なんだ!?」

　困こん惑わくするアルをよそに、さらに情報が流入してくる。

　──時の輪の内　時の輪の外

　──銀の鍵かぎ　窮きゆう極きよくの門

　──千と無貌

　──暗黒の男　這はい寄る　闇やみの跳ちよう梁りよう　咆ほう吼こうする

「アルハザードの意識？」

　だが深く考えるまでもなく、情報は洪こう水ずいとなってアルへと襲おそいかかった。

　──七の支柱に吊つるされた窓

　──鎖とざされた

　──ダイスを否定するシナリオ

　──ダイスを超ちよう越えつするシナリオ

　──を、暴あばく

　──正しい伝聞が

　──為なされる

　──狭はざ間ま

　──刹那

　──超ちよう狂きよう気き

　──闇、闇が来る、あの混こん沌とん

　──超理性

　──検けん閲えつ、される

　──魔ま物ものの咆吼よ

　──歪ゆがむ

　──いずれ、心を得

　──無む駄だ　無駄だよ

　──黙だまれ

──病ヤミが、病がくる、あの混沌

──お前に　いつか届く事を

──それもまた台本

──信じ

──道どう化け芝しば居い　三文芝居

──黙れ　黙れ　黙れ　遮しや断だん　遮断　遮断

──君は舞ぶ台たい裏の雑用だ

──魔物の咆吼！

──魔物の咆吼！

──魔物の咆吼！

──役者を揃そろえてもらわねば

──これより　パパの　伝える　話でちゅ──黙れ！

お前はその瞬しゆん間かんに対たい峙じするとき、

正しく真実にたどり着かなければならない。

「なにが……なにが起こっておる!?」

膨ぼう大だいな情報の奔ほん流りゆうが、アルを飲みこんでいく。

それはアルにして制せい御ぎよできぬほどの情報量であり、強制的に植えつけられていくそれは容よう赦しやなく彼女を痛めつけていく。

「あああああああああっ！　頭が……頭が割れる……！　なにが……」

アルは両手で頭を抱かかえこみながら苦痛に顔を歪める。

【獣けものについて】

獣は王なり。

黒き王なり。

運命の輪を廻まわす者なり。

輪りん廻ねの蛇を繋つなぐ者なり。

其そはそれは単に一つの時猫ねこの瞳ひとみ念が持銃じゆう弾だんつ最も包解体括くく的で無制約な領玩がん具──。

停止。

獣が獣を生む矛む盾じゆんの螺ら旋せんを──

それは矛盾ではない。

否、獣の親は獣であり、獣の子は獣である矛盾。

それは矛盾ではな──やはり検閲されている。即すなわち──。

ヒトはヒトを生む当然。

つまりヒトの親はヒトであり、ヒトの子はヒトである当然。

否。停止。

……中ちゆう枢すう域まで汚お染せんが拡大している。

忌いまゝいましい、あの混──否？　サルがヒトを生む？

即ち、ヒトの親はサルであり、サルの子はヒ──妨ぼう害がいが激しい──。

えーと、卵が先か鶏にわとりが先かの話だっけ？──ここまで。

これ以上は無理だ──最後のはヒン──ともかく留意すべし。

　垂れ流される情報にアルは翻ほん弄ろうされ続けていた。

「くっ……。だから、なんなのだ、これはっ！」

　アルの問いに答える者はいない。

　その代わり、より激しい情報が押し寄せてきた。

【銀■■■■について】

　獣の矛盾は即ち獣が
■■

　警告。敵白血球、術プログ式ラム活性化。反はん撃げきを開始。

　これはヘン■■・■■■■■■■が斃たおれる■■■■■スト■■■■と同様、獣も
■■
警告。敵白血球、防ぼう壁へきを突とつ破ぱ。因果律侵しん入にゅう。表層意識の刻印ログが消失ロスト。警告……。

　駄だ目めだ。検けん閲えつが厳し過ぎる。

　これ以上は、また向こうに情報を好きに操あやつられる。

　停止。

「い……いい加減に……。ああああああああああっ！」

　アルは情報の洪こう水ずいを制御するべく奮ふん闘とうするが、やるだけ無む駄だだった。

　潮流にも似た情報の海の中で、もがき苦しむだけである。

【■■寄■■沌について】

　時間がない。すべての核かく心しんについて語らなければならない。

　この遠大な茶番のすべての根源は
■■

　くっ……やはり駄目
■■

　これだけは
──■■

　検閲術式に捕つかまった。

　中枢を占せん拠きよされれば、また──停止。

　防ぼう護ご壁へきを展開。

　変わり身ダミーをすべて起き爆ばく。

　すべての経路を遮しや断だん。

　深層意識にバックアップを──。

「ああああああああああああああああああああああああ！」

　アルは頭を抱えこみながら悲鳴を上げる。

「いい加減に……いい加減にせよ！　今さら妾わらわに託たくされても、どうにもならん！　こんなもの！　こんなものはもうたくさんだ！　消えろ！　妾の夢から消えてなくなれ！」

　絞しぼり出すかのように絶ぜつ叫きようしたのと同時に、情報の洪水がピタリと止やんだ。

　あまりにも不意な出来事に拍ひよう子し抜ぬけする中、アルは自分に向けられた視線に気がついた。

「あ……」

　目線を前に向けるとアルハザードが見つめていた。

　アルハザードは狂きよう人じんである。

　彼によって強ごう引いんに植えつけられた情報も、おそらくはなんの意味も持たないだろう。

（……本当にそうだろうか）

　アルは自問する。

　彼女に向けられた瞳ひとみは穏おだやかで、とてもおかしくなっているようには見えなかった。

「アル・アジフ……私はお前に……出で……逢あっ……て……」

「父上!?」

　アルハザードがすべてを言い終わる前に、辺りは閃せん光こうに包まれていく。

「くっ……」

　アルが目を細める中、世界は再び色しき彩さいを帯びていく。

　そこは白昼の路上だった。上空には燦さん々さんとした太陽が浮うかんでおり、そこで行われている惨さん劇げきをありありと浮かび上がらせている。

　衆しゆう人じん環かん視しの中、アルハザードは見えない獣けものに貪むさぼり食われていた。

「父上……」

　アルはつぶやき、目を伏ふせた。

（つまり、これは七三八年の光景ということか……）

　アルハザードの伝記を記したイブン・カリカンの話に、間ま違ちがいはなかったのである。

　再び世界は閃光の中へと包まれていく。

　気がつくと、アルは先ほどの部屋へと逆ぎやく戻もどりしていた。

暗く、狭せまい、閉とざされた部屋の中にアルハザードの姿はない。

ただ揺ゆらめく蠟ろう燭そくの炎ほのおの灯下に、一冊の書物が照らされていた。

『Ａｌ　Ａｚｉｆ』である。

+

アルは一人、滅ほろびの時を待っていた。

目を閉じ、その瞬しゆん間かんが訪おとずれるのを―。

終わりが近づいていることは本能的に解わかる。

苦痛も、悲しみも、恐おそれも、虚むなしさも、何一つとして感情が湧わいてこない。

（滅びとは、こういうことなのだろう）

そのようにアルは理解する。

（しかし疲つかれた……。やっと終われる……）

それは悠ゆう久きゆうを生きてきた彼女に訪れた安息である。だが、なぜか胸にぽっかりと穴が開いたような寒さを感じた。

（……なんだろう。酷ひどく寒い）

震ふるえがくるほどの寒気に、アルは瞼まぶたを開いた。

そこは深しん淵えんだった。

果てのない星々の海が眼前に広がっている。アルは宇宙を漂ただよっていた。

（寒いわけだ……）

妙みような納なつ得とくをするアル。

（宇宙はこんなにも広く、こんなにも孤こ独どくだ。そして――）

この無限の虚こ空くうの遥はるか彼方かなた、孤独の世界の裏側では、今も無数の怪かい異いが蠢うごめいているのだろう。

世界は邪じゃ悪あくに貪られていた。

人じん智ちを超こえ、狂きよう気きをも超えた領域で、世界と怪異は侵おかし合い、犯おかし合い、冒おかし合い、幾いく星せい霜そう――。

それでも、なお続く。なお巡めぐる。

未み来らい永えい劫ごう、過去永劫――。

そう。無間の輪に囚とらわれているのだ。

（だが、それでも我らは……。否、だからこそ我らは――）

アルは静かに首を横に振ふる。

今まさに終わろうとしている彼女にとって、そのようなことは関係なかった。

もはや目を開けていることすら億おつ劫くうになったアルは、静かに目を閉じていく。

あとは終わりの瞬間を、無へと還かえるのを待てばよかった。

だが――。

瞳を閉ざすことができなかった。

「……なぜ。……なぜだ!?　終わることすら許されないとでもいうのか」

胸が痛んだ。

ずきずきと、脈打つかのような鋭するどい痛みが胸部に襲おそいかかる。

アルは胸を押さえつけると、その場でうずくまった。

「妾わらわには……。終わることすら許されぬのか」

不意に気配を感じ、アルは振り返る。

そこには血ち塗ぬられた道が延のびており、骸むくろが──かつての主あるじたちがアルを見み据すえていた。

光なき瞳ひとみで、声なき声で彼らは訴うつたえかけてくる。

「なぜだ。なぜ、終わらせてはくれんのだ？」

彼らは答えない。

だが、その中の一人が地面を指差した。

そこには曇くもりも迷いもない一ひと振ふりの剣けん──無む垢くなる刃やいばがあった。

ずきんと、胸に鋭い痛みが走り抜ぬける。

「汝なれらは……。汝らは、まだ妾に戦えというのか！　まだこんな路みちを歩めというのか！　贄にえを生み続け、汝らの呪じゆ詛そを未来永劫に背負い続けよとでもいうのか？　そんなものに……そんなものに耐たえられるわけがないではないか！」

感情すら失うせていたはずだった。だが想おもいは堰せきを切ったかのように噴ふん出しゆつしてくる。

もはや自分ではどうすることもできずに、アルは泣きじゃくった。泣きじゃくる自分を制せい御ぎよできないことが苛いら立だたしく、情けなく、悲しくて、さらに泣きわめいてしまう。

『……すまない』

抑よく揚ようのない淡たん々たんとした声が聞こえてきた。

アルは袖そでで涙なみだを拭ぬぐい、顔を上げる。

そこには穏おだやかな表情をした骸たちの姿があった。

『……すまない』

　骸たちの誰だれかが囁ささやいた。

「何故なぜ、謝る……」

『私たちの心は、おまえと共にはなかった──。戦いの最さ中なかですら』

「それは妾も同じことだ。そもそも、そういう契けい約やくだったではないか……。妾がそのように利用したのだから、汝らが謝ることがあろうか」

　頬ほおに涙を伝わらせながら、アルは言葉を口にする。

『彼は違ちがう』

　骸の中の一人が告げる。

　唐とう突とつに、溢あふれ出していた涙が止まった。

（彼？　誰だ？　誰のことだ!?）

　アルは心に引っかかるなにかを感じた。

　胸が疼うずいている。

『彼はお前の心を満たした。お前の穴を満たした。お前は──彼と出で逢あうために戦い続けてきたのだから』

　アルはハッとする。

　そして気がついた。

　胸に穿うがたれた空くう洞どうの理由わけを。

　寒さの理由を。

　そして疼きの理由を。

　想いが溢れ出す。

　温ぬくもりが、そして喜びがアルの心を埋うめつくしていく。

（ああ、こんなにも胸が熱い。こんなにも……こんなにも彼奴きや

つは大きな存在だったのか）

　アルの胸は高鳴り、信じられないほど熱くなる。胸の穴は瞬またたく間まに満たされていく。

「九郎！」

　その名を口にしたとき、心がつながった。

　アルには視みることができた。

　九郎が戦っている姿を。

　力を失い、深い傷を負い、絶望の淵ふちに追いやられながらも彼は戦っていた。

　アルには理解できる。

　九郎の怒いかりを、悲しみを、苦しみを、そして痛みを―。

　圧あつ倒とう的な激しさを以もつて襲いかかってくる者に対し、彼は全力で抗あらがっている。

　もどかしかった。

　そして酷ひどく腹立たしかった。

「そんなもの……その程度の輩やから―。妾と汝なれがいれば、なんら恐おそれるに足らぬというのに！」

　口にしてからアルは呆ぼう然ぜんとする。

（……そうだ。そうだった。何故、忘れていたのか！　あのとき誓ちかったではないか。苦痛も悲しみも後こう悔かいも二人で分かち合おうと。なのに、なんてざまだ！）

　アルは自分自身を叱しつ責せきする。

　このようなところで手をこまねいている場合ではなかった。

（―戦わなければ！）

　アルは決意する。

気がつけば骸むくろたちの姿はなく、血にまみれた路も消えていた。

そこに残されているのは―。

「解わかっておる。解っておるとも」

胸に手を添そえながら、そう繰くり返す。

「もう大だい丈じよう夫ぶだ。……ありがとう。不ふ甲斐がいない妾わらわを見守っていてくれて」

アルは万ばん感かんの想いをこめて感謝の意を告げると、地面に落ちている剣を拾い上げる。

無垢なる刃。

魔まを断たつ剣。

それは光り輝かがやいていた。誇ほこりに、愛に、そして正義に―。

アルは手にした剣を握にぎりしめ、油断なく構えた。

そして次の瞬しゆん間かん、なにもないはずの空間に斬きりかかる。刃やいばが光の軌き跡せきを生み出す中、なにかがその場から飛び退のいた。

「妾の精神領域に踏ふみこんでくるとは……。汝なれ、何者だ!?」

アルは闇やみへと向かって問いかける。

「さすがに気づかれちゃったか。いやいや失敗、失敗」

軽い口調で笑いながら、その女は姿を現した。胸むな元もとが開いたスーツを身にまとった長身の美女である。もっとも、この領域で外見など意味はない。

（此こ奴やつ、何者だ？）

女が発する気配はヒトではありえない。怖おぞ気けがし、吐はき気けがするほどの強きよう烈れつな闇の気配を彼女は持っていた。

　アルは全神経を研とぎ澄ます。剣けんの切っ先を女へと向けたまま、睨にらみをきかせる。少しでも気を緩ゆるめたら魂たましいを持ち去られる可能性があった。

（敵か!?……こんなところで、やられてなるものか！）

　アルは十分に間合いを取り、相手の出方をうかがった。

「あーあ、そんなに緊きん張ちようしないで。僕はただ迎むかえにきただけなんだからさ」

「迎えにきただと？」

「そう。君は戦場に、九郎君の下もとに戻もどるつもりなんだろう？」

「汝、どこまで知って……！」

　アルは剣を構えたままにじり寄る。

「詮せん索さくは無意味だろう？　大切なことは、九郎君の下に戻った君に―。三さん位み一体となった君たちに、もはや敵はいないということだ」

「……なにを企たくらんでいる？」

「だから詮索は無意味だよ？　ただ利害が一いつ致ちしているとだけ答えておこうかな」

　女は嫣えん然ぜんとした笑えみを浮うかべる。

「今はそれで十分なはずだ。さあ、彼の下に帰っておやり。君がいなくなって、ずいぶんと寂さびしい想おもいをしているんだから。ふふ、少し妬やけるかな？」

　女はくすりと笑うと、その姿を闇の中へと溶とけこませていく。

（確かに、重要なのは九郎の下へと戻ることだ）

　視界が薄うすれていく。

　それとは逆に、意識が覚かく醒せいし始める。

　夢が終わりを告げようとしていた。

「それではご機き嫌げん麗うるわしゅう、【死し霊りよう秘法】。
また運命の瞬間にお逢あいしよう」

　どこからか異い形ぎようの声が聞こえてきた。

エピローグ

神の摂理に挑む者達――魔を断つ剣は未(いま)だ折れず

九郎は息苦しさで目覚めていた。

鼻や気管に溢あふれた血液が、むせるような咳せきとともに一気に噴ふん出しゆつする。

「かっ……げふっ……」

激しく咳せきこむ九郎。その都度、鮮あざやかな鮮せん血けつが口内から吐き出された。

意識こそあったが、体の感覚はほとんどない。おかげで痛みでのたうつことはなかったが、それはつまり死が近い証しよう拠こでもある。

それもそのはずだ。ベルゼビュートの攻こう撃げきでひしゃげてしまったコックピットの中で、九郎は計器類に挟はさまれていたのである。あちらこちらの骨は砕くだけており、内臓にも酷ひどいダメージを負っていた。このままでは死ぬのも時間の問題である。ティベリウスが手を下さなかったとしても、死は確実に忍しのび寄っていた。

『あんまり調子に乗ってんじゃないわよっ！　そんなに死にたいのなら、お望み通りに嬲なぶり殺しにしてあげるわ！』

ベルゼビュートは仰あお向むけに倒たおれているデモンベインの上に馬乗りになると、何度も何度もデモンベインを殴なぐりつける。その度たびにコックピットは激しく揺ゆれ、たったそれだけのことで九郎の意識は遠ざかっていった。

（ちくしょう……ちくしょう……！）

悔くやしかった。邪じゃ悪あくを打ち倒すためのデモンベインが手も足も出ないのである。悔しくてたまらなかった。

視界が涙なみだで滲にじんでいく。

（くそっ……。俺は……俺はまだ戦わなきゃならねえってのに……）

　だが肝かん心じんのデモンベインは動かず、九郎自身の命も風前の灯ともし火びである。

『ほほほっ。カワイソーねぇ、九郎ちゃん？　これが魔まを断たつ者？　笑わせるわねえ！　誰だれも救えず無様にくたばる間ま抜ぬけの分際でッ！』

　ティベリウスが嘲あざ笑わらう。

（……今度こそ……今度こそ駄だ目めなのか？）

　だが、すぐにその考えを否定する。

（こんなところで敗れるためにデモンベインは蘇よみがえったわけじゃない。俺に、俺に力があれば……）

　やる気は少しも萎なえてはいなかったが、体がついてこない。

『さあトドメよ！　後あと腐くされなく粉こな微み塵じんに吹ふき飛ばしてやるわッ！』

　ベルゼビュートの両りょう腕うでが掲かかげられ、その間に怨おん念ねんの塊かたまりが現れる。瘴しょう気きが辺りに充じゆう満まんし、大気が汚よごされ、何千、何万もの断末魔が木こ霊だまする。ベルゼビュート最強の必ひつ殺さつ技わざ・怨おん霊りょう呪じゆ弾だんだった。この状じょう況きょうでそれを食くらえば、デモンベインはもちろん、九郎の死も確定的となる。しかし避さける方法がなかった。

（くそっ……）

　打開策が見つからないまま絶望感に打ちひしがれる九郎。

（……諦あきらめるしかないのか）

　やれるだけのことをやり、万ばん策さくも尽つきた。これ以上はどうにもならない。

「大十字さんッ！　逃にげてぇぇぇぇぇ！」

瑠璃の叫さけび声が聞こえてきた。

囚とらわれの身でありながら、九郎の身を案じて叫んでいる。

そんな彼女を助けることもできず、想おもいに応こたえることもできない。

（俺は……。俺は、もう……）

体の感覚は消えかかっている。意識も混こん濁だくしてきた。地じ獄ごくの亡もう者じやが手ぐすね引いて待ち受けているのが解わかる。奈な落らくへの片道切きつ符ぷを切られるのも間近だった。這はい寄る絶望が、あらゆる希望を打ち砕いていく。

だが―。

「……諦められるわけ……ねえだろうがっ！」

折れた腕うでに力を注入し、操そう縦じゆう桿かんへと手を伸のばす。

デモンベインが動かないのは承知していた。

無意味であることも理解している。

だが九郎には、そうすることしかできなかった。

「動け……動けよ、デモンベイン！　おまえ、悔しくないのかよ……」

九郎は叫びながら操縦桿を動かす。

ベルゼビュートの腕の間で生成される怨霊呪弾が威い力りよくを増していく。噴出する瘴気で大気が震ふるえ、冒おかされ、断だん末まつ魔まの叫びが唸うなりとなって大地を振しん動どうさせる。

（あれを食らったら……今度こそおしまいだ）

魔を断つ剣けんが折れる光景が脳のう裏りに浮うかび上がるが、すぐにそれを払ふつ拭しよくする。

冗じよう談だんではなかった。

　邪悪を前にデモンベインが敗れるわけにはいかない。

「そんなんでいいのかよ……。あんな邪悪をのさばらせて……大切なものとか全部奪うばわれて……そんな理り不ふ尽じん、おまえは許せるのかよっ！」

　デモンベインは応えない。

『あひゃひゃひゃ！　ついにオカシクなっちゃったのかしら、九郎ちゃん!?　ワケ解らないこと泣き叫んじゃって、馬ば鹿かみたいよん☆』

　ティベリウスの言葉など九郎の耳には届かない。

　彼の話など、どうだってよかった。

　どんなに無様な姿を晒さらしたとしても諦めたくはなかった。

（俺は……俺は戦いたいんだ！）

　操縦桿を握にぎる手に力がこもる。

「デモンベイン！　おまえが動けないってんなら……おまえの躰からだに血が流れてないってんなら、俺の血をいくらだってくれてやる！　だから、おまえは俺に剣をくれ！　何者にも砕くだけない鋼鉄をくれ！」

　ベルゼビュートが振ふり上げていた両手が、デモンベインへと向けられる。とてつもなく凶きよう悪あくな魔ま力りよくの塊が―怨念渦うず巻まく邪じゃ悪あくな力が、悲鳴にも似た唸りを上げながらデモンベインへと向かってきた。

『死にくされ、大十字九郎ォォォォォォォ！』

　ベルゼビュートから解き放たれた闇やみの塊が、瘴気をぶちまけながらデモンベインへと襲おそいかかってくる。

「頼たのむ！　動いてくれ！　デモンベインッ！」

　明確な死が近づく中にあって、九郎は諦めることなく操縦桿を動かし続ける。

殺された者たちの無念の叫びが大だい音おん声じようとなって押し寄せてきた。

急に辺りが静まり返った。

唸うなるような悲鳴も、スイッチでも切られたかのようにピタリと止やんでいる。

やけに静かだった。

なにも聞こえず、なにも感じない。

（俺、死んじまったのか？）

そう考えればこの状じよう況きようも説明がつく。

（そうか……。結局、どうにもならなかったか……。俺は魔まを断たつ剣を振るう器うつわじゃなかったってことか）

死してなお悔くやしさが募つのり、涙なみだが溢あふれそうになる。

（すまない。すまない……みんな。俺が弱かったばっかりに……）

後こう悔かいしても遅おそかったが、そうせずにはいられない。

ティベリウスに―ブラックロッジに殺された人たちも、こんな悔しい思いをしたに違ちがいない。

そう考えると死んでも安らげそうにはなかった。

（それにしても、ここはどこだろう……）

いまだにコックピットの中にいた九郎だが、死んだのだからあの世には違いなかった。

その証しよう拠こに、開けっ放しになったハッチの外に彼女の背が見えた。

白い豪ごう奢しやなドレスに身を包み、銀ぎん髪ぱつを靡なびかせながら浮かび上がっている少女の姿が―。

（そうか。ついに俺も……）

　彼女の下もとへと行けたのであれば、それもまた本ほん望もうだった。

　だが―。

「勝手に死なすな」

　少女は叱しつ責せきするかのような言葉を吐はき出した。

「それと勝手に死ぬな。無責任すぎるぞ」

　その澄すんだ声こわ音ねが九郎の心に染しみこんでくる。

（まさか……）

　あり得なかった。

　信じられなかった。

　しかし、その少女は間ま違ちがいなくそこにいる。

　彼女は右手をかざし、不敵な笑えみを浮かべながら宙に浮かび上がっている。

　九郎の頭は瞬しゆん間かん的に混乱をきたした。様々な感情が去来し、どのような表情をしたらいいのか解わからない。

　不意に痛覚が戻もどった。全身に激しい痛みが突つき抜ぬけていく。生が実感できる。死んだわけではなかったのだ。

「あ……あ……ああ―」

　よく見ると、ベルゼビュートの攻こう撃げきは少女が展開した巨きよ大だいな防ぼう御ぎよ陣じんによって阻はばまれていた。

　それはあらゆる邪悪を退ける五ご芒ぼう星せい形―。

　そう。旧き印エルダー・サインである。

「こんなことって……」

瑠璃が驚おどろきの声を上げる。

だが、それは彼女だけではなかった。

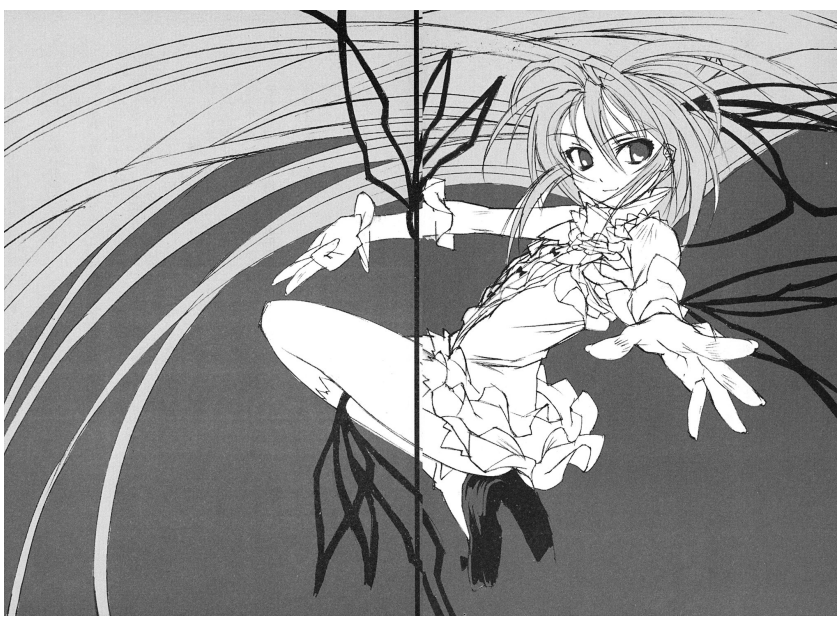
『何な故じえぇぇぇぇぇぇぇ!?　何故なのぉぉぉぉぉ!?　なんで、なぁぁぁぁぁぁんでアンタがここにいるのよっっっっ!?』

動どう揺ようするティベリウスの姿が目に浮うかぶようだが、そのようなことはどうでもよかった。大切なのは目の前の事実だけである。

涙で視界が霞かすんできた。

しっかりと自分の目で見み据すえ、目の前の光景を現実のものとして受け止めようとしていたのだが、なにもかもがぼやけてしまっている。涙るい腺せんが壊こわれてしまったのか、涙が次から次へと溢れ出てきた。

九郎はそれを拭ぬぐうことすらできなかった。いや、拭うことすら忘れていた。ただ目の前の光景を見つめながら静かに口を開く。



「奇き跡せきだ……」

「否いや、それは違ちがう」

　少女は即そく座ざに否定する。

「……汝なれは戦った。魔術師マギウスの力を失い、デモンベインを失い、それでも汝は戦った。絶望的な戦力差だった。すべてを諦あきらめ、投げ捨てたとしても、誰だれにも責めることなどできはしなかったろう。だが汝は戦った。戦い抜いた。戦って戦って戦って……今の今まで堪たえ続けたのだ。彼き奴やつらを前に一歩も退ひかず。だから……」

　彼女は九郎へと顔を向け、さらに告げる。

「だから妾わらわが間に合った」

　翡ひ翠すい色に輝かがやく瞳ひとみを九郎の視線に絡からめながら、少女は力強くうなずいてみせる。

　その瞬間、九郎の内部から感情が溢れ出してきた。

　そして、叫さけんでいた。

　体の痛みも関係ない。

　全身全ぜん霊れい、力の限り、ありったけの大声で叫んでいた。

　少女の名を。

　生意気で気位が高く、だが最高のパートナーの名を。

「アル――――――――ッッッ！」

　全世界、全宇宙に宣言するような叫びが木こ霊だました。

次巻予告

©Nitroplus,DIGITURBO,2003,2004

斬魔大聖
デモンベイン
正しき怒り

さぁ、反撃の時は来た!
鋼の神よ、正しき怒りを胸に、
今こそ憎悪の鎖を断ちきらん。

ついに復活したアル・アジフ。
そして最後の決戦にむかうデモンベイン。
すべては順風に見えた。
そうヤツが姿を見せるまでは——。
すべての輪廻に終止符が打たれる時、
誰も見たことがない結末が待つ!

DEUS MACHINA
DEMONBANE NEXT

あとがき

小説版『斬ざん魔ま大聖デモンベイン』の中巻も無事に出版の運びとなり、遠大なストーリーもいよいよ佳か境きようへと突とつ入にゆうしました。

当初予定していた構成を大おお幅はばに変へん更こうした挙げ句、オリジナルの要素をドッサリと盛りこんだのが本書になります。お口に合いましたでしょうか？

でも企き画かく段階では中巻を出す予定はなく、上下巻で終しゆう了りようだったのですが、あれよあれよという間に三部構成となり、こうして現在にいたることになりました。ページに余よ裕ゆうができたおかげで、脇わき役やくに甘んじたまま終わりを告げるはずだったキャラクター達にスポットライトを当てることができ、これだけでも小説版デモンベインの印象がずいぶんと変わるのではないかと思っています。また下巻は下巻で少し変わったことをやってやろうと画策しているので、それはそれで楽しみにしていただけたらなぁと。

さて。下巻では多種多様なキャラクターがそれぞれの想おもい（あるいは野望）を胸に抱いだきつつ、それぞれのラストへと向かって突つっ走ぱしっていきます。その先に待ち受けているのは生死すら超ちよう越えつするような極限の世界―などと書くと自分の首を絞しめかねないわけですが、デモンベインという巨きよ大だいな世界観に相応ふさわしい至高の領域、そしてすべてをのみこんでしまうかのような混こん沌とんの世界になるのは間ま違ちがいありません。ただラストは未定。このあとがきを書いている時点で、ラストは空くう欄らんのままなのです。

下巻の原げん稿こうを書き進めていくうちにラストも決まっていくのではと考えていますが、さてさて、どうなることやら。

なんだかイロイロと書いてしまいましたが……。

理り不ふ尽じんな世界に登場する不条理な敵を相手に、無理無む茶ちや無む謀ぼうの三さん拍びよう子しで挑いどんでいく我らが主

人公・大だい十じゆう字じ九く郎ろうの生き様をとくと見よ、と言うことです。はい。

　そろそろページに余裕がなくなってきました。

　現在、ニトロプラスでは新作『沙さ耶やの唄うた』のマスターアップを控ひかえ、社員一同、馬車馬のごとく働かされ……いえ、働いております。プレイステーション２版『機き神しん咆ほう吼こうデモンベイン』の発売も控えているし、それ以外にも水面下では（以下、社内校こう閲えつに引っかかったため記き載さい不能）。なんにせよ、これからもニトロプラスは爆ばく走そうし続けるということですね。

　で、僕はと言うと、「あれ」のノベライズはいかがなものかと直じき訴そ中でございます。

　そんなわけで下巻でお会いしましょう！

株式会社デジターボ　涼すず風かぜ　涼りよう

解説

鋼はがね屋やジン

この本を手に取っていただいた、素す敵てきなはじめましての人ははじめまして。ＰＣ版から付き合って下さっている愛すべき悪友な皆みな様さまもご機き嫌げん麗うるわしゅう。ゲーム版のシナリオを担当しました鋼屋ジンです。ノベル版『斬ざん魔ま大聖デモンベイン』の中巻、確かにお届けさせてもらいます……特に何もしてない自分が偉えらそうにのたまうのも何ですが。

今回はこのページを使って、自分の方から他た愛わいもない話をつらつらと。

──例えば指パッチン。例えば「カムヒア」。例えば「ショータイム」。一番近いのだと「驚おどろき桃ももの木さんしょの木」。つまりは『招しよう喚かん』。

あるいは「マジンゴー」「レッツコンバイン」「フュージョン」。つまりは『合体』。

どちらにせよロボットと『儀ぎ式しき』というのはなかなか親しい関係にあるようで。

必要なことなのでしょう。圧あつ倒とう的な『悪』を討うち倒たおす『正義の味方』なんて幻げん想そうをホンモノにするためには、『招喚』や『合体』と言う大おお仰ぎような『儀式』こそが。

『儀式』ってのは『願い』であり『誓ちかい』であり、つまりは『想おもい』です。『意志』です。

「そう在ろう」「そう成ろう」という『想い』が、『現在の自分』と『未来の自分』を結びつける。あたかもロボットがパイロットという『意志』と結びついて、正義の力たり得るように。

そんなワケでデモンベインは、それ自身は意志を持たない（少なくとも明言はされていない）『無む垢くなる刃やいば』だったりします。『彼』は『九く郎ろう』と『アル』と言う『意志』を得て、はじめて『魔まを断つ剣つるぎ』なのです。

また同時にそんな過程を経ることで、本来、無機物である鉄の塊かたまりに『魂たましい』のようなものの気配を感じ取ってしまう──これって人間の豊かさのような気がしますが、閑かん話わ休きゆう題だい。

ともかく『儀式』こそがロボットとパイロットを結びつけ、明日を切り拓ひらいていく……と、こんな気き恥はずかしいまでの真っ直すぐさこそ、自分がスーパーロボットを愛する理由なのかもしれません。

まあ『スーパーロボット』＝『儀式』ってなワケで、思ったのですよ。

「ロボットと魔ま術じゆつって、実は思いのほか相あい性しようが良いのではないか？」

こうして『スーパーロボットもの』にして『魔術もの』である『斬魔大聖デモンベイン』は誕生しました──悪ィ、相当こじつけクセェ。

で、魔術が絡からんでくるとさらに趣しゆ味みに走り出すというか、もうオカルトパンクってな感じで世界観も引っ張られるカタチに。いや、だって『ブラックロッド』ラヴだし、むしろ衝しよう撃げきだったし……などと、どさくさにまぎれて私的な感情まき散らしてみたり。

正気に戻もどって。

『斬魔大聖デモンベイン』、おかげさまでＰＣゲームも小説版もご好評をいただき、今度は『機き神しん咆ほう吼こうデモンベイン』と装よそおいも新たにプレイステーション２から登場と相成ります。

　今回は何とＯＶＡも同どう梱こんされたりします。アニメですよ？　九郎とかアルとか動いてますよ？　大変だ。

　なんかデモンベイン絡みの話がどんどん大きくなっていく様に、自分自身、戸と惑まどい気味ですが……よろしければ皆様。今度もまた付き合って下さると感謝の極きわみでございます。

　最後となりましたがノベライズという形で『現在』のデモンベインを『未来』へと結びつけて下さいました涼風涼さま、角川スニーカー編集部さま、それにファンの皆様に最大級の感謝を。

　それでは、またお会いしましょう―ちなみに下巻のこのページには『ブラックロッド』シリーズ、『サムライ・レンズマン』等の素晴らしい小説でお馴な染じみな、古橋秀之さまをお迎むかえしたいと思います。よし伏ふく線せんが繋つながった。

カバー・口絵イラスト / Ｎｉ

本文イラスト / かみわた＆Ｎｉ

フィニッシュワーク / なまにくＡＴＫ＆かみわた

デザイン / ｙｏｓｈｉｙｕｋｉ　タケウチデザイン

(C) Nitroplus, DIGITURBO 2003, 2004

斬ざん魔ま大たい聖せいデモンベイン

魔まを断たつ剣つるぎ

原作：鋼はがね屋やジン（Nitroplus）

著：涼すず風かぜ涼りよう（DIGITURBO）

平成25年12月1日　発行

(C) Nitroplus, DIGITURBO 2003, 2004

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『斬魔大聖デモンベイン　魔を断つ剣』

平成16年1月1日初版発行

平成18年7月10日7版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER